
プリンセス・オブ・クラッシャー

林来栖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プリンセス・オブ・クラッシャー

【Nコード】

N5160U

【作者名】

林来栖

【あらすじ】

西の地の大国アケノの第一王女にして、強大な魔力を生まれ持ったチカゲ・セラリア。

『魔術師の神』チナミ・エスタスを王家の祖とするアケノだが、昨今では魔術師が激減している。そんな中でチカゲは、王女にして魔術師であり、正にアケノの期待の星、なのだが……。幼い頃よりその強大な魔力を自在に操れるよう、訓練に訓練を重ねてきたにも拘らず、14歳の今日まで、魔力が大暴走しない日がないという、『ノーコン魔術師』だった。

そんな折り、千年前にチナミと仲間の神々が封印した悪しき魔術師、エルウィードの魂が、封印を抜け出し、三度目の依代に降りる。過去2度の再封印の時は、チナミを除く4柱の神々が、それぞれの依代に降臨した。しかし、今度の悪しき魔術師の依代は魔術師。しかも、チナミと同程度の魔力を有する、宮廷魔術師長補佐のパルスタードだった。

強大なパルスタードの魔力の前に苦戦する、四人の依代、チカゲの兄でアケノの王太子カナメ、従兄のトシヤ、チカゲの守役マリ、東の地の大国ヒノワの王太子ハーシエル。

兄達を助けたいと、チカゲはチナミの自分への降臨を願う。しかし、戦嫌いの神は、チカゲの願いを聞き入れない。

1. ノーコン王女（前書き）

西の地の大国アケノの第一王女のチカゲは強大な魔力を持って生まれた魔術師。しかし、訓練を重ねても一向にノーコンが治らない。そんなチカゲと、兄の王太子カナメ、従兄のトシヤ達が、国の危機に立ち向かって行く。

果たして・・・？

残酷なシーンはありませんが、戦闘シーンが結構あります。痛いのは苦手な方は、ご注意ください。

（林の戦闘シーンは、結構痛いと言われますので。汗）

1. ノーコン王女

王宮の広い中庭の上空は、今日も気持ちよい青空に覆われていた。木々は緑のベールを纏い、やや熱い夏の風にくすぐられて、サヤと心地好い音を響かせている。

そんな穏やかな景色の中に、異様に殺気立った少女が立っていた。チカゲ・セラリア。

今年の誕生日で十五歳になる彼女は、このアケノの国の第一王女にして強大な魔力を持つ魔術師である。

大陸の魔術師協会が定めたレベルで言えば、恐らく特別上級レベル。どれ程強大な魔力かというと、最小出力に絞って発動した筈の炎の魔法で、五十メートル四方の池の水を一瞬にして蒸発させてしまった。

平均レベルの魔術師の炎の魔法の威力が、せいぜい風呂が沸かせる程度なので、引き比べれば凄まじい威力なのだが、その時チカゲが狙ったのは、池ではなくそのほとりに置かれた人形だった。

要するにこの王女さま、魔法がもの凄く『ノーコン』なのである。「??」ですので、確固たる明快なイメージを己の中に描きつつ、呪文を唱えるのです」

長いあご髭も、髪も真っ白な魔術師長が、おっとりとした口調で魔術の心得をチカゲに話す。

チカゲは聞きながら、14歳にしてはやや小柄な体格に見合う小さな白い手で、30センチ

ほどの長さの櫛の白木の魔術用杖ぎゅつ、と握り締めていた。

白い小顔の愛らしい口をへの字に曲げ、薄緑色の大きな目で、前方五メートルの所に置かれた花瓶を睨み付けている。

細いサスペンダーで吊った膝丈の白いスカートの柔らかいプリーツが、夏風にふわふわと揺れる。

「さすれば、唱えた呪文が魔力に意味を与え、目に見える力となって発動されます。おわかりですか？」

「はいっ」

チカゲは、切羽詰まった声で返事をした。

彼女の後ろには、侍女でお守役のマリ・ミクニと、後見と称して付いてきた、兄の王太子カナメ・クリストがじっと成り行きを見守っている。

実は、カナメは後見というより、妹が何をしでかすのか楽しみで見物に来た、というのが正しい。

近年のアケノでは稀にみる強い魔力を持って生まれたチカゲは、年々歳々減りつつある魔術師と、それを庇護する国家にとって正に宝物であるには違いない。

が、いかんせんノーコン、魔術の実技訓練では、これまで一度も的の周囲の物品が無傷で済んだ試しが無い。

幼い頃からたゆまず訓練を続けているにも関わらず、である。

初めの頃こそ事態に色を失ったカナメであるが、今ではチカゲの暴走振りが、ある意味楽しみになっていた。

カナメは美しい青銀の目を細め、トレードマークであるポーカ―

フェイスの下で、わく

わくしながら妹の動作をつぶさに見ていた。

彼の、長めに切られた銀髪が、緩い風に揺れる。

東の地一と謳われた美女である王妃の母とそっくりな美貌の兄の、少々悪趣味な期待は

承知しているが、今のチカゲにそれをとにかく言っている余裕はない。

大きく深呼吸すると、彼女は炎の魔法呪文を唱え始めた。

初級の炎の魔法など、本来ならチカゲ程の魔力があれば呪文など唱えなくとも発動出来

る。しかし魔力制御が出来ないチカゲは、まず呪文で魔力の制限をしなければ、危なくて

発動出来ない。

??今日は、絶対失敗出来ないもん!

今年に入って、すでに十回の実技訓練を行ったが、全体的以外のなにがしかの物を破壊している。

そのひとつに、奥殿の中庭の四阿がある。

今回と同じく炎の魔法の最低レベルの訓練で、チカゲは的の水鉢と池を挟んで対岸にあ

った四阿を、粉々に吹っ飛ばしてしまった。

さすがにあれには、娘に甘い父王も渋い顔をした。

だから、これ以上は、本当にまずい。

「我が内なる力、理に従いて……」

??落ち着いて、落ち着いて。

チカゲは、心の中で一生懸命呟く。

杖を両手で水平に持って構え、一心不乱に呪文を唱えるチカゲの身体から、うっすらと

白く輝く光が立ち上る。

詠唱が終わるや、光は腕を伝い、杖の方へ

と集まる。チカゲは閉じていた目を開け、集まった光をロッドの先へ乗せると的へ向かって放った。

「ファイヤー・ボールっ！」

途端、光は炎の塊と化し宙を飛び、見事に的の花瓶に当たった。

炎の球に包まれた白い

花瓶は、一瞬にして粉々に碎ける。

が。

やはりいつもの如く勢いの有り余ってしまった魔力は、的のすぐ脇に立っていた柳の木を、まるで爆裂弾よろしく碎破した。そこで止まればよかったが、魔法の炎球は柳の後ろの彫刻にまで到達した。

外形を留めないまでに碎けた、三メートルはある年代物の美女の彫刻を目の当たりにして、チカゲは悲鳴を上げた。

「いやーっ！」

パニックを起こし、その場をびよんぴよん跳ね回る妹の後ろで、カナメは「やっぱり」

と表情を動かさずにほくそ笑んだ。

「どーしよううっ！ また壊しちゃったあああっ！」

大きな目を更に大きく見開いたままぼろぼろ涙を零し、チカゲは叫んだ。

「マリっっっ！」

チカゲより三歳年上のマリは、鋭利な雰囲気を持つ美女である。

幼い時から武術家の父

の厳しい指導を受け、十歳にして棍棒と体術の師範となった彼女は、チカゲが四つの時か

らお守役兼遊び相手として側に仕えている。

「落ち着いて下さいっ、姫様」

アケノの女性には珍しいショートカットの濃茶の髪が靡く程急いで駆け寄ったマリは、

「またもやの大失敗に思い切り凹む王女の背を、優しく撫でる。」

「大丈夫です、次は必ずちゃんと出来ますよ」

「そうだ、チカゲ。努力はいつか報われる」

チカゲは尤もらしい顔で空々しい台詞を述べる兄の、銀糸の縫い取りも美しい水色の上

着と同色のズボンを穿いたすらりとした長身を、恨めしげに見上げた。

「……そんな事、ちっとも思っていないくせに。兄上は、単にわたしの失敗を面白がってるだけじゃないっ」

あ、ばれてたのか、と腹の中で思ったが、顔に出すようなカナメではない。

「そんな事はないぞ。僕は……」

取り澄ましたカナメの弁明は、だが闖入者の大きな笑い声に掻き消された。

「あつはつはー、まーたやっちゃったのかあ、チカゲっ！」

笑いながらやって来たのは、カナメとチカゲの従兄、トシヤ・サフィスだった。

「おめー、ノーコン、全然治んねえのなっ？」

チカゲとカナメの父ナユタ二世の弟の子であるトシヤは、十九歳という弱輩ながら、並

外れた剣の腕で既に第一近衛軍軍団長を勤めている。

豪放磊落、悪く言えば大雑把な性格だが、面倒見はいいので部下の信頼は厚い。加えて

中々の美貌のため、宮中の女官達にも人気は高かった。

無論、王太子のカナメも、その美しさで女官達の目を楽しませている。

カナメの美貌が熟練の陶工の作り上げた精緻で優美な芸術作品と

見えるのに対し、トシ

ヤのそれは野生の獣を思わせる、精悍で肉感的な美である。

父の大公の意向で、幼い頃から市井の子供たちと一緒に武術や勉強をしたというトシヤ

は、乱暴な下町言葉を王宮内に持ち込んだ元凶でもある。

くだけた（くだけすぎでもあるが）言葉遣いのせいで、部下たちには『王族にしては気

さくな人物』という、好評価を得ている。

遅しくて、華麗で、人好きのする従兄は、しかし、そのおおらかで瑣末なことを気にし

ない気性で、時々チカゲの神経を逆撫でする。

今一番言われたくない言葉を言われ、チカゲは薄緑の目を三角にしてトシヤを睨んだ。

「何よーっ、そんなでつかい声で言わなくってもいいでしょーっ！トシヤ兄のバカっ！」

「おお？ ホントの事言われてバカはねーだろがっ！」

黒い丈長の軍服を着たトシヤは、切れ長の紫の瞳に笑いを浮かべたまま、腰まで届く赤

金の髪を背に垂らした小柄な従妹を見下ろした。

チカゲの言葉遣いが悪いのも、ものごころがついた頃からトシヤと口喧嘩をしているせ

いだった。幼い頃から一緒に遊び、言い争いもしているうちに、トシヤの口の悪さが移っ

てしまった。

が、チカゲが普通の王女様のようにおしとやかでないのは、何もトシヤのせいだけでは

ない。本人の、いわゆる『お転婆気質』も、多分に関係している。

チカゲは、言い返されてぶうっ、と膨れる。

「もうっ。兄上もトシヤ兄も、人の失敗を面白がってっ！」

半べそで怒る妹に、カナメは静かに訂正した。

「いや、僕は面白がつてはいないよ。チカゲが魔法が上手になる事を本当に、心から望んでる。……トシヤはどうか知らないが」

「おいカナメっ！ てめーどーしていつもそうやって、火に油注ぐような事言いやがるんだっ！」

「火に油なんて。僕は事実を言ってるだけだ」

「だーからっ！ それが一言多いってんだよっ！」

「まあまあ、お二人共」

今にも相手に掴み掛かりそうな勢いのトシヤとカナメの間に、魔術師長が割って入る。

「お従兄弟同士、仲がおよろしいのは分かりますが、その辺にしておきなされ」

魔術師長の鶴の一声で騒ぎが収まったところへ、宮殿の警備兵が二人、駆け寄って来た。

「魔術師長様っ！」

呼ばれた魔術師長と、チカゲ達は何事かと兵士を見る。

兵士は王太子と公子、そして王女にそれぞれ一礼すると、魔術師長に向かって言った。

「陛下のお召しでございますっ。至急、大広間にお越しをっ！」

「何があった？」

「はい。魔術師長補佐のパルスタード殿が、謀反の疑いで捕らえられました」

「なにっ、パルスタードがつ？」

「魔術師長が声を上げる。チカゲとマリ、それにカナメとトシヤも、思いもよらぬ出来事に驚愕した。」

2. 悪しき魔術師の『器（うつわ）』 1

パルスタードは今年で二十九歳。魔術師長の弟子の中でも、チカゲと並ぶほどに魔力が高く、また魔術と歴史に造詣が深い。ために通常四十過ぎにならないければ就けない宮廷魔

術師長補佐の地位を、その若さで与えられていた。

魔術師長は、主に宰相と並んで王の補佐を勤める。そのため実質的に宮廷魔術師の束ねをするのは、魔術師長補佐の役目となる。

貴族出身の宮廷魔術師の多い中、平民出身でありながら若くして補佐という重要な地位

にまで登り詰めたパルスタードは、平民出身の下級官吏や下働きの者に『平民の星』『ア

ケノの民の誇り』と称えられて来た。

大広間には、既に主だった廷臣と貴族が集まっていた。

カナメとチカゲの父、アケノ国王ナユタ二世は、既に玉座に着席していた。

魔術師長が、皆の目が集まる中を静かに玉座の前へと進む。

老魔術師と一緒に入室したチカゲとカナメは、玉座の前で父に一礼し、左右に別れ玉座

の脇に立った。トシヤは彼の父王弟公の隣に、廷臣達の背後から滑り込んだ。

ナユタ二世は、ゆっくりと膝を折る老魔術師を沈痛な面持ちで見下ろした。

「そなたには、まことに辛い事態となった。魔術師長補佐パルスタードが本日昼、『褐色

の塔』の封印を解いたのだ」

『褐色の塔』とは、シノノメ宮の本殿のすぐ側に建つ、尖塔である。

二千年前、アケノの太祖にして主神であるチナミ・エスタスが、西の地のヒナタ国を滅ぼしたとされる悪しき魔術師エルウィードを、この地に追い詰めて討伐した。

その魂と魔力を封じたのが『褐色の塔』である。

魂は気力を生み出す根源であり、その魂と気力を結び付けて守る器が肉体である、と、

この世界では理解されている。

また、魔術師の気力は魔力と呼ばれ、魔術師はそれを呪文によって有形無形の事象に変える。術には多大な魔力が必要であり、必然、生まれながらに通常よりはるかに多くの気力を持つ者だけが、魔術師となれる。

その他にも、剣士や騎士も気力の大小によって剣技の善し悪しが決まると言われる。

そのように、気力は人の行いに深く関わっていた。

人は死ねば魂は生前の記憶を無くして純化し、魂の世界と呼ばれる異世界へと旅立つ。

気力は魂の純化に伴い霧散する。

しかし魔術師、特に強大な魔力を有する魔術師の場合、僅かだが、魂が純化されても魔力がこの世界に残留することが、稀にある。

まして、エルウィードはこの世界に強烈な未練を残したまま肉体を失った。そのため、魂は生前の記憶を留めて純化せず、魔力も、魂が残存しているために、肉体があった時と同等に保たれてしまった。

危険なエルウィードの魂と魔力を、チナミ達は自らの魔力???チナミ以外の4人は気力???で封印した。

封印の魔力を安定的に維持するために、チナミは『褐色の塔』の周囲に『光の塔』と呼ばれる、五つの白亜の建物を建て、それに自分達の魔力を注ぎ入れた。

肉体を無くしてからは、魂を『光の塔』に封じ、エルウィードと同じくこの世界に残存させることで、封印を維持している。

『褐色の塔』は、チナミとその仲間の神々によって、強力な封印がされているため、よほどの魔力の持ち主でなければ封印は解けないのだが、過去、愚かにも幾人かが封印を解こうと試みた。

いずれも解く事は出来ず、逆に企みが発覚して死罪に処せられていた。

パルスタードをこれへ、と宰相が衛兵に言った。程なく、控えの間に入れられていたパルスタードが、縄を掛けられ衛兵に両脇を持たれ引き摺られるように広間へ入って来た。

灰色の髪を背の程まで伸ばした長身の若い魔術師は、居並ぶ貴族達を睥睨すると、侮蔑するように笑う。

玉座の前へと引き据えられたパルスタードは、衛兵に肩を押し付けられて膝を付いた。

魔術師長は、些か疲れた表情で右脇に跪いた愛弟子の、白蠟のような横顔を見やった。

「パルスタード・ニムラ。そなた何故に『褐色の塔』の封印を解いた？」

いや、そもそも強力な神々の封印を解けたことが凄い、と、チカゲは内心唸る。

???私の魔力でも、無理、なんじゃないかなあ。

チカゲがパルスタードの魔力について妙な感心している最中。詰問した宰相に、パルスタードはふん、と鼻で笑った。

「何故？ 己のものを取り戻すに理由がいるのか？」

「己のもの、だと？」

「そう……」

パルスタードは、喉の奥で笑った。

「あの塔に例の小僧が封じ込めたものは、私のものだ。小僧、余程私が復活するのが怖か

ったと見える、ご大層にあんな大きな塔を造り、五重もの封印を施すとは」

暴言に、居並ぶ貴族廷臣が色を成す。右列の騎士が怒鳴った。

「こっ、小僧とはっ、チナミ様のことかっ！」

「他に、誰がおる？」

「貴様っ！ 我がアケノの太祖にして魔術の神を愚弄しおってっ！」

「ははは、あれが魔術の神とは。お粗末な話だ」

「何とっ！ ますますけしからんっ！」

「極刑にしろっ！」

口々にパルスタードの態度を非難する。

「止めいっ！ 静まれっ！」

ナユタ二世が声を上げた。廷臣達の怒号が収まる。

魔術師長が、静かに弟子に訊いた。

「そなた、エルウィードの『器』であったのか？」

老魔術師の問いが、一度静まった広間に驚愕と緊張を走らせる。

「まさか……っ！ では『褐色の塔』の封印が三度緩んだというのかっ？」

二千年前、チナミは確かにエルウィードを『褐色の塔』に封印した。が、如何に強固な

封印でも、年月による変化は致し方無いものなのか、封印は千年後には緩み、エルウィー

ドの魂は『器』を得て転生を果たした。それがアルフレッド・オウ

ノという騎士で、アケ

ノは彼によって建国以来最悪の内乱が起こった。

しかし、チナミを除く四体の神が依代に降臨、見事にアルフレッドを捕らえた。

この世界に憎悪ゆえ執着するエルウィードの魂は、肉体を失っても純化はしない。消滅

させるしかないのだが、余程強力な魔術によらなければ、消滅しない。

アルフレッドは、神々の依代と、当時の宮廷魔術師長によって、魂を再び『褐色の塔』

に封印し直された。

ところがその七百年後、現在から三百年前、エルウィードはまたも転生した。

その時は靴職人で、王政反対を唱え民衆を扇動、シノノメ市内の半分を破壊した。

が、またも四体の神が降臨し、エルウィードの『器』を捕縛し、魂を塔に封印し直した。

もし、並ならぬ魔力を有するパルスタードが間違いなくエルウィードの『器』ならば、

過去二度の転生より最悪となるのは必至だ。

思わぬ事態に顔を引き攣らせた人々が見詰める中、パルスタードは当たり前だというよ

うに「ああ」と、素っ気なく頷いた。

「如何にも師匠の言う通り、私はエルウィードの『器』だ」

黙って成り行きを見ていたチカゲは、パルスタードの答を聞いた途端、ぞくりと冷たい

ものが背を走るのを感じた。

「……何時、それが分かった？」

驚きに震える声で、魔術師長がパルスタードに問う。

パルスタードは不敵な笑みを作ると、縛られていた縄をするり、

と身体から外した。

「なにっ?!」

縄の端を持っていた衛兵は、信じられぬ出来事にパルスタードと己の手の中の縄を交互に見る。

トシヤが、獲物を狙う肉食獣さながらの滑らかな動作で、玉座と若い魔術師の間に立ち
はだかった。

パルスタードは灰青の瞳で彼を一瞥する。

「魔術を習い始めてすぐに、私は己の魂が術を欲しているのが臍気ながら分かった。ぼんやりとした感覚は、術を覚える都度、だんだんと蘇り、それがやがてエルウィードの感覚

だと気が付いた。師匠が補佐に推挙してくれた時には、私は己が偉大なる魔術師の生まれ変わりであるのを、完全に悟っていた。……師匠には、大いに感謝している。私の魂を目覚めさせてくれた恩人だ」

「……なんということだ」

魔術師長は、長年目を掛けて来た愛弟子の絶望的な告白に、額を覆ってくずおれる。

「師匠っ!」

弟子の魔術師達が、老師匠を支える。チカゲも思わず師匠の側へ駆け寄った。

パルスタードは、打ちひしがれる魔術師長を冷ややかに見下ろし、言った。

「だが、私の行く手を阻む可能性のある者は、何人たりとも生かしてはおけない」

パルスタードは小さく呪文を唱えると、左手の掌を上へ向け、前へ出した。

彼の手には、稲妻を巻いて回転する小さな球が乗っている。

サンダー・ボール。魔法レベル3級の雷球は、そのまま投げ上げれば球は急速に巨大化

し、半径三メートルから五メートル以内のものや人を雷撃で黒焦げにする、恐ろしい魔法である。

3. 悪しき魔術師の『器（うつわ）』2

市井の魔術師より遥かに魔力が強い宮廷魔術師が唱えられる魔法の最大が、この3級レ

ベルの魔法である。それも、魔力の流れを制御する杖スタッフがあつて、初めて使用で

きる。

しかし、パルスタードは杖なしで、しかも簡単な詠唱のみでサンター・ボールを発動させた。

やはり、並の魔力ではない。

パルスタードが何をしようとしているか分かった魔術師達は、老師匠を庇って彼と対峙した。

「止めろっ！ パルスタードっ！」

「師匠を殺そうなんてっ！ 恩知らずにも程がありますっ！」

「目を覚まして下さい、補佐さまっ！」

後輩や同僚の魔術師達は、何とか止めさせようと説得する。が、パルスタードは不気味

な笑いを顔に張り付けたまま、答えない。

この期に及んで漸く最悪な事態になりつつあるのに気が付いた貴族達は、慌てて広間を出ようと入り口へ殺到する。

悲鳴を上げながら廊下を目指す腰抜け共を掻き分けて、近衛軍の騎士達がナユタ二世の周りに集まった。

カナメも剣を抜き、トシヤと並んでパルスタードと対峙する。一触即発の展開に、チカゲはますます蒼白になる。

「陛下っ！ 右手の扉からひとまずご退出をっ！」

トシヤが、パルスタードに剣を向けたまま大声を上げた。

近衛軍第三軍軍団長ハナブサが、部下達に向かって怒鳴る。

「おまえ達っ、陛下を外へお連れしろっ！」

「無駄だ」

パルスタードが、空いている右手に別の魔法の球を作り出して乗せる。透明な青い光を

放つその球は……

「ウォーター・ボールっ！」

チカゲは悲鳴を上げた。ひとつの魔法を発動中に、もうひとつ、同等レベルの別属性の

魔法を発動するのは、通常は不可能だ。魔法は術者の『気』を具現化するものであるため、

ひとつの魔法に魔力？？気持ち集中している状態で、別属性でなくとも、二つ目の魔法

を使おうとすれば、通常ならば魔力が分散し、どちらも霧散してしまう。

恐らく、魔術師長でも無理と思われる仕業を、だがパルスタードは易々とやって退けている。

パルスタードの魔力の大きさを、チカゲは改めて実感した。

パルスタードは、恐怖に顔を引き攣らせるチカゲを一瞥すると、青い水球を無造作に、

ナユタ二世目掛けて放った。

「父上っ！」

水の球に捕らえられたら、呼吸が出来なくなり即、死んでしまう。駆け寄ろうと立ち上がるが、彼女の位置からでは玉座は遠い。

魔術師達が一斉にデスペルを掛ける。だが、パルスタードの魔力を上回れず、悉く跳ね

返された。

もはや何ものにも遮られず飛んで来る魔法の水球に、一番近くに

居たトシヤが躍り掛かる。だが、柔らかく手応えの無い水は、刃では斬れない。

「しまったっ！」

飲まれる前に避けたトシヤを迂回して、球はナユタ二世に迫る。驚愕に、娘と同じ薄緑の目を見開いた王が、水色の膜に完全に覆われてしまうその寸前。

「デスペルっ！」

魔術師長の解呪呪文が、広間に響き渡った。

王を包もうとしていた水の球は、小さく弾けて消え去る。

「さすがは、師匠」

パルスタードは、口の端を吊り上げる。

「だが、二度目はどうか？」

元魔術師長補佐は、雷球の乗った掌を高々と上げた。彼を縛り上げていた衛兵が、抜刀して斬り掛かろうと構える。

「動くなっ！」

パルスタードは鋭い声とともに、衛兵の方へ雷球を向ける。

「止めてっ！」

チカゲは叫んだ。

「師匠や、父上を殺してどうなるのっ?! あなたの望みは力を取り戻すことでしょうっ！」

だったら、関係ない人を傷付けないでっ！」

「気の強い、アケノの王女」

パルスタードは、鋭利な刃のような灰青の瞳でチカゲを睨んだ。

「おまえは分かっている。おまえの父も師匠も、私の野望には邪魔な存在なのだよ。？」

「この世界を我が手で破壊するという野望に」

言うなり、エルウィードの『器』は雷球を上へと放った。球は瞬く間に膨らみ、美しい

アケノの山野を描いた天井画の付近まで成長する。

このままだと数分後には、天井を破壊するのみならず、ここにいる大勢の臣下達も必ず死傷する。

チカゲは、縋る思いで師匠を振り返る。ここに居る魔術師で唯一パルスタードの魔法を無効化出来る魔術師長は、しかし、先程の呪文で魔力を出し切ったのか、肩で息をしていた。

チカゲには兄弟子になる他の宮廷魔術師達も、パルスタードの圧倒的な魔力の前に、恐れをなして動こうとしない。

魔術師長の弟子の中で、一番魔力が強いチカゲがデスペルを唱えればいいのだが、どういうわけか、チカゲは何度練習しても、上手く発動出来ず、全く魔法を無効化できないのだ。

?? 他の方法って……
ないことはない。

異なる属性の二つの魔法がぶつかり合うと、同レベルでほぼ同等の強さなら、互いをきれいに打ち消す。しかし、かなりな高等技術である。

同レベルの魔法でも、強さには個人差が生じるため、相手の魔力?? 使用されている

『気』の大きさをきちんと見極められなければ、大惨事になる。

しかも、チカゲはノーコン魔術師、なのだ。

だが、このまま手をこまねいては、パルスタードに全員、殺される。

?? やるしか、ないよね。

腹を決めて、チカゲは詠唱無しで魔法を発動した。

「ファイヤー・ボールっ！」

「姫っ！ それは危険？？」

コントロールの怪しいチカゲの無謀を、慌てて止めようとした魔術師長の言葉は届かず、巨大火球が雷球を襲った。

刹那、二つの魔力はぶつかり、眩い光を放つ。雷球は火球の勢いに飲まれ、瞬時に消え失せる。

が、魔術師長の予想通り、コントロール・ミスが出た。パルスワードの魔力を遥かに上回ってしまったチカゲの魔力は、雷球を消滅させただけでは収まらず、天井と周囲の柱の一部を破壊する。

大音響と共に吹き飛んだ大広間の天井の断片が、上階の壁や窓を叩き壊す。一度吹き上がった破片は、再び広間へ降って来た。

「きゃああっ！」

チカゲは思わず頭を両手で庇ってしゃがんだ。すぐに発動された魔術師達の物理防御呪文^{プロテクト・シールド}によって、彼女の頭も、他の者達の頭上も守られた。

「……全くっ」

細かい破片を肩から払い落しながら、トシヤが渋い顔で、どすどすと足音荒くチカゲに向かって来た。

「おまえは自分の力を、ちっとも分かってねえんだなっ！ 見ろっ、上っ！ どーすんだ

こんな大穴開けてっ！」

「……ごめんなさい……」

消え入るような声で、チカゲは謝った。

「成功したことないデスペルより、ましかな、と思って……」
涙目で反省するチカゲに、トシヤは大きく溜め息をついた。

「あのなあっ」

「まあまあ、トシヤ様。確かに天井の破片は降って参りましたが、危険な雷球は消滅させた訳ですし」

放電で周囲の人やものを大量に破壊する雷球より、破壊力は大きくとも、触れなければ人体に被害は無い火球の方が、まだ安全である。破壊された建造物の破片などは、降って来ても先程のように物理防御呪文で何とか凌げる。

がそれでも、一歩間違えれば皆大火傷だし、大火事である。

魔術師長の執り成しに、トシヤは後ろ髪が長めの焦げ茶の頭をがしがしと掻いた。

「つたく、みんなチカゲに甘いんだからよっ」

「それは、そうかもな」

ナユタ二世が退出したのを見送ったカナメが、笑いながら寄って来た。

「でもそれは、チカゲが一生懸命だからだ。わざと大暴走してる訳じゃないし。それでも

これはちよつとやり過ぎだけど」

天井を見上げたカナメに、チカゲはもう一度「ごめんなさい」と小さな声で謝った。

兄は鷹揚に頷いた。

「今回は、魔術師長の言う通り、結果オーライってことで。ひとつ間違えれば人が死んでたけど、それは無かったし。パルスタードは取り逃がしたけどね」「え？」

チカゲは改めて周囲を見回した。確かにカナメの言う通り、パルスタードの姿は何処にも無かった。

どうしよう、とチカゲは慌てる。トシヤが、さすがにもうトゲは

引っ込めた落ち着いた

声で言った。

「気にすんな。取っ捕まえるのは俺らの仕事だ」

長身を見上げたチカゲに、従兄はにっ、と笑う。

「ノーコンはしょもねえが、陛下も魔術師長もご無事だ。よくやった」

4. 褐色の塔

その晩。

何となく眠れないチカゲは、寝台を抜け出してバルコニーの扉を開けた。

チカゲの部屋は王宮の南東にある。窓から見えるのは、所々に小さな池と四阿を配した庭園と、その先に恐ろしく背の高い細長い塔がひとつ。

『褐色の塔』である。

外壁の色からそう呼ばれるようになった塔は、昼間、パルスタードが言った通り、五重の封印でエルウィードの魂と魔力を封じ込めていた。

『褐色の塔』の周囲には、五体の神の塔『光の塔』が、正五角形を描くように配置されている。

正五角形は、魔法陣、すなわち五芒星を内接させる

また、六つの塔を囲むように建てられた王宮も、外堀に配置された五つの尖塔を結ぶと、

正五角形を形作る構造になっている。

尖塔で魔法陣を描いた理由は、『褐色の塔』を囲む『光の塔』の結果補強と、さらに、万が一の場合、外敵の魔法攻撃から王宮内の王侯貴族を守る結界を張るためであった。

夏の東の地特有の、南の草原からの乾いた夜風がチカゲの赤金の髪を揺らす。

バルコニーの真下では、警護の兵士が手燭を持ち、不動の姿勢で辺りを警戒している。

『褐色の塔』は、手燭の淡い明かりと星明かりに照らされ、黒く影のように見えていた。

その様子からは、封印を解かれたという感じはしない。

「ほんとなのかなあ……」

チカゲは、手摺に両肘を掛け軽く溜め息をついた。

「お起きになっていらっしやったのですか」

背後から掛けられた、マリの柔らかい声に、チカゲは振り向く。

「うん。何だか、寝られなくて」

「そうですか」と、マリはチカゲの隣に並んだ。

小さな頃から一緒に育ったマリは、チカゲに対し、言葉遣いこそ

丁寧だが、接し方は姉

のように気安い。

そうして欲しいと、チカゲが望んだ結果であるが、マリは本当の妹のように、チカゲを

案じてくれる。

「大変なことになっちゃったね」

チカゲは両手の上に顎を乗せ、目を閉じた。

「パルスタードがエルウィードの『器』だったなんて……。しかも逃げられちゃって。ト

シヤ兄はまた掴まえるって言ってるけど、エルウィードはそう簡単に掴まるとは思えないし」

これからどうなるんだろう、と、チカゲは不安な気持ちで呟く。

「そうですね。でもまた、神々が降臨なさるのでは？」

「三百年前はそうだったって話だけとお。今度もまた、神様達は目覚めて下さるのかなあ」

チカゲの白い絹のネグリジェの裾を、弱い夜風がはたはたと叩く。髪と同じ赤金の細い眉を寄せた小さな横顔に、マリは微笑んだ。

「大丈夫ですよ。神々は絶対、アケノをお見捨てにはなりません」

不意に、バルコニーの下で警護の兵が騒ぎ出した。何事かと、チカゲとマリは下を見る。

微動だにしなかった兵士の手燭の仄明かりが、塔の方向と宮殿の

間を忙しなく行ったり来たりしている。

「どうしたの？」

真下に来た手燭のひとつを、チカゲは呼び止めた。

「はっ、『褐色の塔』付近で、何か異変があった模様ですっ！」

王女とお守役は顔を見合わせる。

「パルスタード？」

「もしかしたら」

マリは、きゅっと美貌を引き締めた。

チカゲは再度、兵士に声を掛ける。

「誰か塔に入ったのっ？」

「分かりませんっ！　ただ、塔から異様な光が漏れていると……」

「光？」

そんなものはここからは見えないな、と、チカゲは暗い木陰に目を凝らす。

近いといっても、チカゲの部屋から『褐色の塔』までは1キロ弱はある。微弱な光だと、

間の林が邪魔になり、確認は難しい。

「ダメ。わかんない」

「そうですね」

二人が光の確認を諦めた時。『褐色の塔』から悲鳴が聞こえた。

「なんだっ?!」

警備兵の動きが止まる。チカゲとマリも再度目を向ける。

数秒置かず。いきなり足下から突き上げるようなうねりを感じた。

続いて横に激しく揺すられ、それで初めて、二人は地震であると分かった。

小さな揺れでも地震は苦手なチカゲは、マリに縋ってその場にしがむ。

「いやーっ！　怖いっ！」

「姫様っ！　大丈夫ですからっ！」

半泣きになりながら、転がらないようにバルコニーの手摺に掴まったマリの身体に、チカゲは必死に縋り付く。

下の兵達も、慌てたように叫んでいる。バルコニーの近くの大木の枝が、ばさばさと音を立てて動いている。

どれくらい揺れていたものか。漸く落ち着いて来たのを感じて、マリが手摺の飾り穴から下を窺った。

先程よりなお一層慌てた様子で中庭を走って行く兵士の足音が、まだ恐慌状態のチカゲの耳にも、ぼんやりと聞こえる。

と、マリが声を上げた。

「姫様っ！」

お守役の切迫した声に、チカゲは恐々顔を上げた。

「なに〜？」

「あれをっ！」

目に映ったのは、明滅する青白色の光だった。それが『褐色の塔』からのものだと分かるのに、数秒も掛からない。

更に。

「沈んでるっ。塔が沈んでるよっ?!」

思わぬ事態に、チカゲは地震の恐怖も忘れて、『褐色の塔』を指さして叫んだ。

光を纏った尖塔の先が、暗い梢の下にみるみる下がって行く。

一体何が起きているのか？ チカゲは確かめたくて咄嗟にバルコニーの手摺に手を掛けた。

風の魔法である飛翔の呪文を使えば、この高さからでも楽に着地出来る。他はノーコン

だが、チカゲはその魔法だけは得意で、しょっちゅうこのバルコニーから飛び下りていた。

飛翔の呪文が得意になった理由は、嫌いな地震を避けるため、というのもあった。今は地震が突然のうえ揺れが大きかったため、動揺して呪文を唱える暇もなかったが。

先刻の揺れの恐さをけろりと忘れ、飛翔の呪文を唱えつつ、手摺をふわりと足が越えようとした時、マリの両腕がチカゲの身体を掴まえた。

「いけませんっ！」

強引に引き戻されたチカゲは、抱き留めたマリをクッションにしてバルコニーに転がる。

「あいたたっ」

したたか膝を打ったチカゲは、それでも素早く起き上がると、身を挺して止めたお守役を振り返って睨んだ。

「だってっ！」

「今さっきの地震といい、この様子では何が起こるか分かりません。昼間の件もあります、姫様の身に危険があつては??」

マリの説教は、再びの揺れと強烈な閃光によって遮られた。

「きゃあっ！」

風のような質量は持たないはずの光に何故かチカゲは圧され、再びバルコニーの上に倒れる。

そのまま、チカゲは気を失ってしまった。

5. いにしえの王子

……小さな丸い光が、薄藍の闇の中にたくさん飛んでいる。

その中を歩きながら、必死に出口を探すのだが、何処まで行っても見当たらない。徐々

に疲れが溜まって来る。そのうち足が痛くなり、その場にしゃがみ込む。

と。

すぐ側で光が無数に寄り集まり、それが見知らぬ若者の姿になった。

小柄な若者である。黒い髪に若草色の瞳、童顔の愛らしい面立ちに淡い笑みを浮かべて、

若者はチカゲに白い手を伸べた。

『大丈夫だよ、まだ……』

「姫様っ！ 姫様っ！」

マリの必死な声に、チカゲは目を覚ました。

「あ……、れ？」

見回すと、そこは王宮の自室で、自分は寝台に横たわっている。

マリと兄カナメ、それ

にトシヤが、心配そうな表情で寝台の周囲を取り囲んでいた。

「どうしたの？ みんな……？」

「ああよかったっ！ 姫様、昨夜のこと、覚えていらっしゃいますか？」

「昨夜って……。地震があって、『褐色の塔』から変な光が出て……」

「その後、チカゲはバルコニーで倒れたんだよ」と、カナメ。

「驚いたよ。騒ぎが治まって戻って来たら、チカゲが倒れたというじゃないか。もしやパ

ルスタードに何かされたかと慌てたよ」

「俺は、またチカゲのドジかと思ってたぜ」

脇からトシヤがにっ、と笑った。

「どーせおまえのこった、バルコニーから飛び下りて尻餅ついたとか、そんなことかと思

ってたんだ。けど、マリーに聞いたら、『褐色の塔』からの光を浴びた途端、ひっくり返ったっていうから。俺もちょっと驚いたぜ」

最後の方は真面目な表情になったトシヤと、真顔で頷くカナメに、チカゲは半身起こして謝った。

「ごめんなさい、ご心配お掛けしました」

「まあ、何でも無くてよかったけど」

「ただ寝てただけだもんなあ。ずっと目が覚めなかったら問題だけだ」

「あの、私どれくらい寝てたの？」

窓を見ると、結構明るい気がする。開けられた窓から入る風も、

夏の真昼の暑さを含ん

でいる。

「お倒れになってから、半日と少し経っています」

「ええっ?! そんなに寝てたの私っ？」

はい、と肯定されて、ますますチカゲは驚いてしまった。

「じゃあ、『褐色の塔』はどうなったの？」

「塔は」カナメが、美貌を洩い表情に歪めた。

「全く形が変わってしまった。外壁が跡形も無くなり、小さな神殿のような姿になっているよ」

「犯人、やっぱりパルスタード？」

「そうだ。昼間大広間から逃げた後、あいつ、王宮内の何処かに潜んでいたらしい。夜を

待って、『褐色の塔』の第二の封印から先を解いたんだ」

チカゲは息を呑んだ。

「じゃあ、パルスタードは、完全にエルウィードとして復活したの？」

「いや」

カナメは首を振った。

「魔術師長に調べて頂いたところ、最後の封印は解かれていない、ということだった。」

最後の、第五の封印は、第一から第四までの封印とは異なり、神殿風の壁面全体に、古

代魔術文字による複雑な呪文が、びっしりと刻まれているらしい。

チナミの魔力によって、

他の4人の神々の神力を寄り合わせて刻まれた呪文だとか。そこまで強力な呪文では、如

何にパルスタードのような強大な魔力を持った魔術師でも、容易には解けない、ということだ」

「そっか。よかった」

第五の封印は、エルウィードの魔力を封印している。

チカゲは、ほっと胸を撫で下ろした。

「で、パルスタードは？」

「衛兵に気付かれて、そのまままた何処かへ姿を消したらしい。今度は魔術師達の力も借

りて王宮内をくまなく調べたが、何処にもいないので、多分王宮の外へ出たんだろう」

「また取り逃がしちゃったぜっ、全くっ」

冷静に説明するカナメの隣で、悔しそうに、トシヤが指を鳴らした。

「けど、隠れてまで封印解きに来るような奴が、このまますごすご引き下がるとは思えね

え。……次は絶対掴まえる」

唸ったトシヤに、カナメが難しい表情で腕を組んだ。

「さて、それだ。パルスタードの方も、どうやら最後の封印の解き方は考え中のようなが、

こっちも解き方が分からない。だが、ある程度知識が無いと塔をどう守っているのかも分からないのが事実だ。

そこで、やはりここは知っている方に教えを請うのが一番だと思うんだ」

「で？ 知ってる方って、誰だ？」

聞いたトシヤを、カナメは静かな目で振り返った。

「魔術師長か、父上。でもこの場合、魔術に精通している方でないと、具体的に対策を指導して頂けない」

「つてことは、魔術師長ね？」

訊いたチカゲに、兄が頷く。

トシヤが、ぱっと笑顔を作った。

「っしゃっ！ んじゃ魔術師長に聞きに行くぜっ」

とは言ったものの、トシヤとカナメは昨夜の騒ぎでろくに寝ていない。チカゲは起きたばかりで食事をしていない。

それぞれの事情を考え、魔術師長を訪ねるのは二時間後として、カナメとトシヤは一度

自室に引取り、その間にチカゲは軽い食事を探った。

昨日の衝撃的な出来事と、その後のパルスタード探索の疲れから、半日寝台にいた老師

匠は、チカゲ達が来るという先触れに、身支度を整えて待っていた。「ご存じと思いますが、チナミがエルウィードに施した術は、魂と魔力を分離して封印す

るものでしてな」

執務室の大きな机の前に座つ魔術師長は、いつもの黒に金糸の縁取りをした長衣を纏い、ゆったりとした口調で話し始めた。

「人の身体とは、実質的なものとしての肉体だけではなく、魂と気力というものが、肉体に内在して出来上がっております。

魂だけでも人にはならないし、気力だけというのは当然有り得ない。肉体と魂と気力、

この三つが揃って初めて、人は人たり得る。

どれが大事ということではありませんが、特に気力は、人が生きていく上で様々な活動をするために重要な役割を担います」

「チナミは、死してもなお禍いをもたらずであらうと考えて、エルウィードの魂と魔力を、

生きたまま肉体から分離したと、伝えられております。死した肉体から離れた魂と魔力を、

それぞれ急いで捕まえ封ずるよりも、先に封じて引き離れたほうが、間違いなく押さえられます。

れます。しかしそれは、並の魔術師に出来ることではありません。

チナミの強大な魔力を

もって、初めて為し得た技でしょう。

ご存じの通り、チナミは『褐色の塔』を五層に分け、第四層にエルウィードの魂を、そ

して第五層、最奥の層に魔力を封じたのです。第四層まではチナミの魔力と、『光の塔』

が形成する魔法陣のみで封印がされております。二重の封印に時折緩みが生じるのは、さ

て、我らも幾度も調べましたが何故かは分かりません」

「神と言えども元は人、だからかな」

チナミ達5人の魂が神に昇格したのは、二千年もの長い間に人々が『神』として崇め、
少しずつ人々の気力が塔に注ぎ込まれたため、5人の魂が生前の記憶を留めたまま純化された、稀な結果である。

人々の敬意の籠った気力によって磨かれた魂は、神となり、元々強大だった5人の気力は、『神気』にまで昇華した。

「元は人」とのカナメの言に、魔術師長は「あるいは」と頷いた。

「塔から抜け出たエルウィードの魂は転生します。正確には、転生と言うより憑依ですな。何故ならば、完全な転生とは一度、純化を経て魂の世界に行き、そこから再び現世に人として戻ることを言います。」

奴めの魂は純化はおろか、魂の世界には無論行かず、既に母親の胎に宿った命の魂に寄生し誕生します。そのため、幼子のうちは完全なる転生と同じくエルウィードの記憶は無い。

しかし、寄生??憑依であるので、長じるに従い徐々に奴めの魂が宿主の魂を喰い、奴めの記憶が蘇って来るのです」

「それって、最低かも……」

不快に、チカゲは顔を顰める。

「しかし、完全な転生ではないので、宿主が本来持ち得る気力以上には、エルウィードの魂も気力を生み出せません。」

チナミは、もしエルウィードの魂がかような仕方で復活しても、大した魔力を持たなければ、ヒナタ国を砂漠にしまったような酷い災厄は起こさないだろうと考えられたの

でしょう。事実、過去二度の転生ではエルウィードは全く魔力を持たず、内乱にはなりま

したが、アケノはすぐに復興出来ました」

宮廷魔術師長の執務室の置き時計が、ちん、と午後二時の鐘を叩いた。

チカゲは、僅か一日でげっそりとやつれた魔術師長を、心配な面持ちで見詰めながら聞いた。

「けど、そもそもどうして倒してしまわずに封印したんでしょう？」

「そこでございます」魔術師長は、内弟子の少年を呼び、奥の書庫へ品物を取りに行くように言い付けた。

程なく、少年は古い羊皮紙の巻き物を一巻、持って来た。

魔術師長は枯れた指でその帯を解き、卓の上へ広げた。

「これは、二千年前に滅びたヒナタ国の王家の系図です。アケノの魔術師長が代々、研究

のために王からお借りしている大事な巻き物です」

ヒナタ国のあった場所は現在、消える河の注ぐ大砂漠になっている。

エルウィードとチナミ達の戦いによって、街という街、村という村がことごとく破壊さ

れ瓦礫と化し、人々が国を捨てたためである。

一度人の手が入った大地は、人間が手入れをしなければ気脈が乱れ、水が涸れて砂漠へと変貌する。

ヒナタ国の王家の系図がアケノにあるのは、恐らく、チナミがエルウィードを封印した

後に、ヒナタの王宮跡から残った書物とともに持ち出させたものであろう。

魔術師長は、片眼鏡を掛け、系図を覗き込むと、

「これを見ると、ここに」

枝の形に線が引かれ幾つもの名が細かく書き込まれた最後の方を指差した。

「チナミ・エスタスの名があります。チナミは、ヒナタ国の王太子であらせられました。」

そしてここに、エルウィードの名があります。悪しき魔術師は、血筋で言えばチナミの兄

に当たりました。ただ、赤い線で書かれていることから、庶子であったと思われる」

「じゃあチナミ様は、兄上だったからエルウィードを倒すのをためらわれたんだ」

チカゲの推理に、だがカナメは異を唱えた。

「それは、無いな」

「あー、俺も同感だな」トシヤも同意した。

「え？ どうして？」チカゲは首を傾げた。

「実の兄上なら、ある話じゃないの？」

「我がアケノの国王陛下には、ご側室たる女性はいないからなあ」

トシヤが、苦笑しつつチカゲに説明した。

「他国じゃ、王や貴族は正妃の他に大概二、三人からの妾妃を抱えている。妃達は実家の

命運を背負っているから、当然、互いに王の気に入りになろうと競い合う。そんな環境で、

同じ血を分けたと言っても腹違いの兄弟が、相手に愛情なんて持てる訳がねえ」

「……そっか」

そうだね、とチカゲは納得した。アケノでは聞かないが、隣国ナナセの王宮では、正

妃と妾妃が、己の王子を何としても次期国王にしようと争っていると聞いた。

「兄弟だからって、倒すのを止められたんじゃないんだ。……じゃ

何でだろう？」

「さて。ただ一つ、ヒナタは平民より、王侯貴族の方が魔力が数段強かった、という話が残されております」

「倒したくとも、倒せなかった」系図を睨んだままのカナメが、呟いた。

「エルウィードは、本当に強かったのだろう。チナミの魔力や、仲間達の並外れた武力をもつてしても、奴を倒すのは不可能だった。そう考えた方が筋道が通る」

「どちらにせよ」

魔術師長は、静かに羊皮紙を巻き戻した。

「パルスタードは今一度、最後の封印を解きに現れるでしょう。その前に、こちらは手を打たねばなりませんまい」

「どうやって？」

カナメが、険しい表情で尋ねた。

「まずは『光の塔』の封印を調べねばなりませんまい」

チナミを初めとする五体の神々がそれぞれ祀られた塔は、アケノに異変のある時、淡く

清い光を放つと言われていた。

「『光の塔』は神々の魂と気力の入れ物です。あの塔が『褐色の塔』の周囲を囲むことに

よって、五つの封印、特に第五の封印が頑強に保たれているのです」

「そのことを、パルスタードは知っているのですね？」

カナメの問いに、老師匠は「如何にも」と答えた。

チカゲは、昨夜またも逃げたというパルスタードが今にも舞い戻って、『光の塔』を壊

し封印を全部解いてしまうのではないかと、一瞬物凄く不安に襲われる。

「だったら、こんなところでんびりしてられないよっ！ 早く『光の塔』を見に行かないと。」

「もしパルスタードが塔を壊したりしてたら？？」

「そんなに慌てる必要はないよ、チカゲ」

カナメは、血相を変えて立ち上がった妹に、のんびり言った。
マジック・シールド

「魔力防御があるのを忘れてるだろう？ 魔術師の『魔力』は、

王宮の敷地内に入って来ようとする、必ずこの魔法に引っ掛かる」

特殊な塔が並ぶシノノメ王宮の敷地内は、外部からの侵入者が無闇に塔に近付かないよ

う、防御魔法が城郭に沿って張り巡らされている。

防御の魔法は二種類掛けられており、魔力防御と、もうひとつは物理的防御である。

どちらの魔法も魔法レベル2、である。防御魔法は代々の魔術師長以下、宮廷魔術師達が常に目を光らせ、綻びがあれば補修している。

一度外へ出ると、従って宮廷魔術師と言えど正門である王宮正面門を通らない限り、防御魔法に『不審者』として弾かれる危険があった。

ただ、移動魔法の魔法陣を使用する場合のみ、通行証を携帯していれば、魔法防御には

捕まらない。パルスタードは最初に捕らえられた時、宮廷魔術師の目が携帯出来るその通行証を、取り上げられている。

「強い魔力を持った魔術師が減った今日では、必要ない魔法かと思っっていたけど……。こ

んな形で重要になるとはね」

「ま、でも慌てなくてもいいと言っても、そーいう話ならやっぱ『光の塔』は一応見て来ねえとまずいやな」

これからすぐ行くか？ というトシヤに、カナメもチカゲも同意

した。

6. 神の依代

王宮から出たチカゲ達は、『光の塔』の第一の塔になる、チナミの塔へと向かった。

チナミの塔は王宮の内庭の北側、やはり五芒星を形作っていた『褐色の塔』の、北向きの角と対峙している。

『光の塔』は高さも規模も『褐色の塔』の半分程で、形は円錐である。五つの塔共、全て

アケノ近郊の山で採れる白大理石で表面を飾っていた。

普段は、深い森にひっそりと姿を隠しているチナミの塔は、だがいつの間にか淡い光を放っていた。

森を半分ほど北へ入ったチカゲ達は、塔からの不思議な光に気が付き、駆け出した。

「まったく、パルスタードの奴、やっぱ『光の塔』にも何か悪さしてやがったなっ！」

先頭を走りながらトシヤが喚く。年長の従兄の悪態を、だがカナメが冷静に否定した。

「違う。『褐色の塔』に異変が起きたので、チナミの塔が目覚めたのだ。さっきの話をちゃんと聞いてなかったのか？」

「う……っ、わっ、悪かったよっ」

塔の前で、チカゲ達は足を止める。

言い伝え通り白く淡い光を放つ塔を見上げて、チカゲの胸に言い知れぬ不安が沸き起る。

「……どうなるの？ これ」

「伝説では、エルウィードの転生の器が現れると、神々はチナミを

除き、己の定められた

依代に降臨する、とされているが……」

「神々の降臨は、もう始まってるぜ？」

突然、背後の森から声がして、チカゲもそしてカナメ、トシヤも驚いて振り返った。

薄暗い木陰から現れたのは、黒髪を一本の三つ編みにし、背の中間にまで長く垂らした、

小柄な少年だった。

十五、六歳と見える少年は、背中に途轍も無く長く細い曲刀を背負っている。僅かな反

りを見せて黒い革張りの鞘に収まっているその剣は、西の地の国特有の剣であった。

「おまえっ、どこから王宮内へ入った？」

近衛軍軍団長のトシヤは、見知らぬ闖入者に警戒しながら、聞いた。

少年は、愛らしいと言える顔には、あまりそぐわない不敵な笑みを浮かべる。

「呼ばれたんでね」

「呼ばれた？ 誰に？」

「ユキナガ・セオドア」

「なに？」

ユキナガは、五体の神のうちの一人である。

「結界があんだろーがよっ。あれに引っ掛からないで正門以外から入れる奴なんていねー

ぞっ。ヘタな嘘つくくんじゃねえっ」

結界は、前述の通り、正門以外の場所を全て覆っている。唯一結界の敷かれていない正

門には、一個中隊の歩兵が配置されており、常に十人の警護兵が、出入りする人々をチェ

ックしていた。

完全に異国の人間と分かる格好のこの少年が正門に近付けば、必ず警護兵がトシヤに報告を上げてくるはずだ。

少年の言葉を全く信用していないトシヤを、少年は少々小馬鹿にしたような目つきで見上げる。

「んな、結界なんて。ユキナガの『神気』が引っ掛かる訳ないだろー？」

「んだとおっ……」

「それより、あんた達も呼ばれたんだろ。じゃなきゃこんなところまで来ないよな」

「それより、じゃねえってのっ！ てめー何の目的で？？」

「ちよっと待て」頭に血が上って怒鳴り散らすトシヤを、カナメの冷静な声が止めた。

「さっき君は、ユキナガに呼ばれたと言ったけど、それはどういうことなんだ？ それに、

僕達が呼ばれているとは？」

王太子は詰め寄るように一歩、前へ出た。

「大体、君は何処から来たんだ？ 見れば西の地の人間のようなだが？」

「ああ？？」

少年は、初めて自分が素姓を名乗っていないのに気付いた風で、黒い頭をぽりぽりと掻いた。

「俺はハーシエル・フブキ。あんたの言う通り、西から来た。さっきも言った通り、ある

日突然ユキナガが俺の目の前に立って、『東のアケノへ行け』っていうから、来たんだ」

王宮の方角からマリ・ミクニの声がした。

「カナメさまっ、チカゲさまっ！」

急用が入り魔術師長のところへは行かなかった彼女は、血相を変えてチカゲ達の元へと

駆け寄って来た。

「『光の塔』の、ユキナガの塔が何者かに封印を開けられたと……っ！」

「あ、それ俺」

悪びれた様子もなく答えたハーシエルに、マリは驚いて柔術の構えを取り後方に飛び退いた。

「何者ですっ?!」

「マリ、落ち着いて」チカゲは、お守役を止めた。

「彼はハーシエル。そのユキナガに呼ばれて西の地からはるばる東の地へ来たんだって…

…、本人は言ってるの」

「確認、取れてねえけどな」

厳しい表情を崩さないまま、トシヤが付け加えた。

ハーシエルが、口を尖らせて抗議した。

「あ、ひっでえっ！俺嘘なんか付いてないぜ？エルウィードじやあるまいし」

「証拠がねえだろがっ！」

噛み付くトシヤを制して、カナメが静かに言った。

「よせよ。真偽は追って分かるさ。それより、ハーシエル。先程の僕の質問に答えてくれないか？」

ハーシエルは「ああそれか」と、細い顎を上げた。

「あんた達アケノの王族だろ？ってことは、チナミの直径だよな。チナミが言ってた言

葉に『全ての事象は、何らかの意味を持つ』ってのがあんだろ？それぞれ違う責任を負

ってる王族のあんたらが、雁首揃えてどうしてこんな場所に来てる

のかつて、自分で考えてみるよ」

「んだところっ！俺達はなあつ、昨夜エルウィードの転生の『器』が『褐色の塔』の封

印を解きやがったから、こっちもどうなんだって心配してだな？？」

言い掛けたトシヤの身体が、突然白く光り始めた。

「うおわっ?!」

「トシヤ兄っ?!」

駆け寄ろうとしたチカゲを、ハーシエルが止めた。

「駄目だっ！今触ったら、あんた死ぬぞっ」

意外に力強い手に右腕を掴まれて、チカゲはもがいた。

「放してっ！」

「トシヤさまっ！」

マリが悲痛な叫びを上げた。と同時に、トシヤは気を失って倒れる。

光は消え、地面に俯せたトシヤに、マリが様子を見ようと近付いたその時。

今度はマリの身体が光り始めた。

「マリっ！」

チカゲはハーシエルの手を振り解き、お守役の側へ走り寄る。

「駄目だっ！」

再びハーシエルがチカゲの手を掴んだ。

「放してったらっ！」

チカゲが嫌がって手を大きく振るう。と、二人を見ていたカナメの身体も光り出した。

「兄上もっ?!」

二人はトシヤの時と同様、数分して気を失って倒れた。

「どうなってんの……?」

唐突な事態に、一人残されたチカゲはどうしていいか分からずその場にへたり込む。

「みんな、五体の神の依代だったってことさ」

「う……、ん……」

先に倒れたトシヤが、ゆっくりと起き上がった。

「トシヤ兄っ！」 チカゲは転がるようにトシヤの側へ行く。

「大丈夫っ？」

「ああ。ちよつと頭が重いけどな」

地面に座り、トシヤは左手で後頭部をさすりながら頭を振った。

「おい、ハーシエル」

呼ばれて、少年は「なんだよ」と彼を見る。

「おまえ、ユキナガだって言ってたよな？ ユキナガは前の戦いの時も、最初に目覚めて

他の連中を叩き起こした。そうだな？」

「ああ。……で、あんたは？」

「テオドールだ」

「……あ？」

ハーシエルが、心底驚いたという表情をした。

「な？？んでっ、何であんたにテオなんだよっ？！ 一番温厚で物

静かなテオがっ。どーし

てあんたなんか……？」

「うっるせえなっ！ しょーがねえだろがっ、あっちが俺を選んで来たんだからっ！ そ

れよか、てめえ俺とキヤラ被るからその態度どーにかしろっ！」

「うっさいよっ！ あんたこそ俺のマネしてんじゃねえってのっ！」

「ああもうっ！ どっちもうっさいわよっ！」

二人の、事態を無視した口喧嘩に、チカゲはキレて叫んだ。

「あんた達のキヤラなんかどーでもいいのっ！ それより、兄上とマリはどーなんのよっ

?!」

「そっ、それはあ……」

チカゲの剣幕に、二人はたじたじとなる。

ややあつて、カナメとマリが目を覚ました。

「兄上っ、マリっ!」

チカゲはマリに抱き付いた。

「よかったあっ!」

「姫様、ご心配お掛けしました」

「どうやら、ハーシエルが言った通りのようだな。僕達は単にここに来たんじゃない、神

々の依代だったから、集められたんだ」

「んだな。ってことで、じゃ、宝具取りに行くか?」

立ち上がったカナメに、トシヤが森の向こうを指差す。

テオドールの『光の塔』のある方向を示すトシヤに、カナメは、
だが「いや」と首を振った。

「取り敢えず、一度王宮へ戻ろう。父上に事の次第をご報告した上で、改めて『光の塔』へ行こう」

「了解」

トシヤがおどけて敬礼し、それを合図に皆は歩き出す。

先頭に行くカナメに、ハーシエルが後ろから声を掛けた。

「やっぱ、あんたがあいつだったんだ」

につ、と笑った少年に、カナメは彼に劣らず人の悪い笑みを見せた。

「僕の性格なら、当然だろ?」

「うえへ、やっぱ、ツバサ・トマスだよ……」

横に並んだトシヤが、さも嫌そうな顔をした。

一人何事も起こらなかったチカゲは、マリと共に最後尾を歩きながら、いきなり馴々し

くなった三人に「何なのよおっ」と膨れた。

7. ヒノワの王太子

王宮に戻った五人は、すぐにナユタ二世に謁見した。

王は、話が話なので宰相のナガトだけを残し、他の側近を退出させた。

カナメは、事前に宰相に話しておいた事の経緯を、改めて父王に説明し、ハーシエル・フブキを紹介した。

ハーシエルは玉座の前で型通りの拝礼をすると、名乗るより先にいきなり旅装束の綿のシャツの中へ手をつ込む。

名乗りもせずに懷に手を入れるのは、暗殺者の行為とみなされ、その場で斬り捨てても有り得る。

が、神々の依代となったカナメ達には、ハーシエルが同じ仲間だと分かっている。

神々はお互いの『氣』を知っており、その情報は、依代となったカナメ達にも神の記憶として伝わる。

五体の神の依代が、アケノの王に危害を加えるはずがない。

ただ、ハーシエルがユキナガの依代なのは分かるが、彼本人の正体は個々の神々の記憶に無いので分からない。

何をするのか、とカナメやトシヤが興味津々で見守る中、少年はシャツの中に隠していたペンダントを引っ張り出した。

ハーシエルが差し出すペンダントを受け取ったナガト宰相は、一目見るなり驚愕した。

「これは……っ！」

諸国の王侯貴族は長期の旅行に発つ際、万が一の場合を考え、己の身分の証しになるものを身に付けている。

大概はペンダントか小剣で、これに自国の紋章と、家の紋章か家名を彫っておく。

ハーシエルのペンダントはヒノワ国の紋章と、王族、しかも王位継承権第一位の者にしか許されない緋色が、施されていた。

「これをお持ちということは、あなたは、ヒノワの王太子殿下であらせられますか？」

ハーシエルは、得意気にやりとした。

「如何にも。私はヒノワのラルガ五世の第一王子、ハーシエル・フブキ・ヒノワと申す」

この展開には、カナメも、ハーシエルと先程妙な漫才をしていたトシヤも驚いた。

ヒノワ国は、ヒナタ国無き今は大陸で最も古い王国である。

由緒正しい大国の王子に、臣下と同じ扱いをする訳にはいかない。ナユタ二世は玉座を降りると、跪いたままのハーシエルの手を取って立たせた。

「知らぬこととは申せ、大変失礼を致した。ヒノワの王太子御自ら、大砂漠を越えて東の地まで、遠路はるばるのご訪問、感謝致す」

ハーシエルは、王子らしい優雅な物腰で立ち上がると、「いえ」と微笑んだ。

「こちらこそ、先触れも出さず訪問した無礼、お許し下さい」

「いやいや。??して、我が息子の説明では、殿下は『剣士の神』ユキナガが降臨されたとか？」

宰相が気を利かせて運ばせた椅子に、国王と賓客は座った。

「今年初月の初めに、私の夢の中にある神が御姿を現されたのです。

その若い神はユキナ
ガと名乗られました。そして、私にこの剣『虎鐵』を授け、言われました。

『東の地に騒乱が起こる。行って、我が同胞と共に鎮めよ』と。

目が覚めて枕元を見ると、夢と全く同じこの剣が置かれておりました。それと同時に、

私の記憶の中に神の？、ユキナガの生前の記憶が、はっきりとした形でありました。私

はこれは間違いなく我が身にユキナガが降臨されたと感じ、すぐに旅支度を整えこの地へ向かいました」

謁見の間の大時計が、低い音で時刻を伝えた。

四時半の鐘を聞き、チカゲは今日一日の時の早さに改めて驚いた。

「なるほど。では、ユキナガはこの度のパルスタードの一件を、予見なさっていたのですな」

宰相の言葉に、ハーシエルは頷く。

「ユキナガは剣士の神にして魁の神。エルウィードの監視役です。

彼の悪しき魔術師が、

またも綻びから抜け出し転生したのを、ユキナガは早くからご存じだったのです」

しかし、一体の神だけで止められる程、エルウィードの力は弱くない。

「ユキナガは、私を含め、依代となる者が十分に力をつけるまで待つておられたのです。

それは、ぎりぎりで間に合った。いや、エルウィードの『器』が完全に己の何たるかを知

り動き出してしまった今では、遅かったのかもしれませんが……」

「それは、もはや致し方ないこと」

ナユタ二世は言った。

「して、王太子殿下……、ユキナガ様には、これから、パルスタードはどう動くと、思われますのか？」

ハーシエルは、思案気に目線を落とす。

「パルスタードのままでも、魔力は十分に強いと思います。しかし、本来のエルウィード

の力はあるなものでは収まらない。そのことを一番よく知っているのは『器』自身でしょう。

う。パルスタードは完全にエルウィードになるために、どんな手段を用いても最後の封印を解きに來ます」

「それに備えるためにも」

カナメが、ハーシエルの言葉を受ける。

「依代となった我ら三人は、これから宝具を受け取りに参ります」
宝具とは、神々の武器のことである。

ハーシエルがユキナガから虎鐵を授けられたように、五体の神にはそれぞれ依代に授け

る武器がある。武器は神々が生前使用していたものと同じか、または依代に合った形にな

る。ただ、魁の神ユキナガと違い、他の神々は直接それぞれの塔の封印を開けなければ宝具は授からない。

カナメの言に、ナユタ二世は深く頷いた。

「では、すぐに『光の塔』へ参れ」

は、と一礼すると、カナメ達三人は謁見の間を退出した。

三人が出て行った後、王宮に残されたチカゲは、ハーシエルを案内して貴賓室へと移動した。

東の地には、アケノともう一国、ナナセという国がある。アケノの北に位置するナナセ

は、国の大半が湿地を含む巨大な森林地帯であるため、国土から殆ど穀物が採れない。

その代わり、森林から豊富に採れる良質な木材を高級家具などに加工、輸出しその外貨で穀物を買っていた。

職人の腕は大陸のどの国より確かと定評のあるナナセの家具調度は、東西の地のみならず、他の大陸でも殆どの王宮で使用されている。

シノノメ宮の貴賓室も例に漏れず、ナナセの最高技術を持つ職人に特別に作らせた家具で埋められている。

「おー。さすがアケノの王宮」

贅を尽くしてはいるが決して華美ではない室内を見回しにつこり笑うと、ハーシエルは

部屋の中央に置かれた、白地に銀糸で小鳥と花の刺繍を施した絹のキルトカバーを掛けられたソファに座る。傍らに背から下ろした虎鐵を立て掛けた。

チカゲはハーシエルが座るのを待って、真向かいの背の無い椅子に腰掛けた。

「どーして自分だけ、何も無いのか気になってんだろ？」

凶星を指され、チカゲはぎくりとした。

「そつ、そんなことは、ありませんっ」

普段は東の大国アケノ唯一の王女いう、母王妃に継ぐ高位の女性に相応しい所作などど

こ吹く風のお転婆娘だが、その気になれば幼児の頃から叩き込まれた嗜みは、きちんと優雅な動きとなって現れる。

動きやすく膝丈までに短くしたスカートの裾をきれいに広げ、しやんと背筋を伸ばした
美しい姿勢のままソッポを向いたチカゲに、ハーシエルは「気取る

なよ、今更」と笑った。

「わーかってるって」

チカゲは俯いた。

兄とトシヤは、彼等の話からそれぞれ『知略の神』ツバサ・トマスと『友愛の神』テオ

ドール・イズモが降臨したらしい。

そして自分のお守役のマリにも、神々の紅一点『武勇の神』カレリア・ヒヅキが降臨した。

彼等の実力と立場を考えれば、神々が依代として選ぶのは実に相応だと思う。

だが、自分は。

「……残ってるのは、チナミ・エスタス様だけだもの」

チナミは降臨しない神だった。他の四柱の神がアケノの危機の度に依代に宿り活躍しても、チナミだけは、じっと塔の中で眠っていた。

そのため、チナミのことを『眠れる大神』という者もいる。

その神が、幾ら魔力が強くとも、ノーコンの自分を依代に選ぶ筈が無い。

そのくらいのことは、わきまえている。が、兄達やマリが国の、いや、世界の大事に際

し、働く権利を与えられたのに、自分だけ何も無いのは、やはり悔しい。

愛らしい薄紅の唇を噛んだチカゲに、ハーシエルが聞いた。

「あんた、魔術師なんだって？」

声にからかいの響きがある。チカゲは尖って聞き返した。

「……誰から聞いたのよっ？」

「さっき、カナメから。それも、魔力でかいくせに凄えノーコンなんだってな」

そんなことまで、兄は異国の王子に言ったのか。

きつ、と目元をきつくして振り向いたチカゲに、ハーシエルはぷつ、と吹き出した。

「何がおかしいのよっ！」

「いやだって……。そんな、子リスみたいな顔で睨まれたって……」
「誰が子リスよっ。だれがっ！」

チカゲは右側に置いてある布張りの丸椅子を、ぱんぱんと叩いた。
「それにつ、ノーコンで悪かったわねっ！ 私だって、好きで、だ
い……大暴走しちゃう

わけじゃないんだからっ！ 魔法が勝手に、大きくなっちゃうの
っ！」

「あはははっ、大暴走しちゃうんだ？」

「だーっ！ もうっ、ほんっとに失礼な奴っ」

ぷんぷんに怒って、チカゲは立ち上がった。

「あんた、本当にヒノワの王太子っ？！ 言葉遣いも態度も、トシ
ヤ兄より悪いわよっ！」

「うーん、それは、認める、かなあ。うちの国って、王太子でも十
歳までは、乳母の里で

普通のカギどもと一緒に育てられっからな。たまたま、俺の乳母の
里が王都の下町で、口

の悪い連中ばっか、ダチだから」

「……う、乳母の里が、下町？」

一体、ヒノワというのはどういう国なんだ？ と、チカゲは驚い
て、思わずあんぐり口
を開けてしまった。

普通の王家では、王太子どころか他の王子や王女にも、乳母には
しかるべき身分の女性
をつける。

下町育ちの女性など、つけはしない。

チカゲも、十歳までは乳母がついていた。伯爵夫人で、おおらか
な性格の女性で、チカ

ゲのお転婆を窘めはするが、本気で怒られたことはなかった。

「なんで……？」

薄緑の眼を、驚きに目一杯見開いて尋ねたチカゲに、ハーシエルは、苦笑する。

「伝統なんだよな、ヒノワの。小さい頃に庶民と同じ暮らしを経験して、庶民の感覚を養

つとけていう。そのおかげで、俺だけじゃなくて、親父も兄弟も、みんな公務の時以

外は口が悪いけどね」

「お、親父……」 伝統あるヒノワの国主である父王を、『親父』と呼ぶ王太子殿下に、チ

カゲは驚きを通り越して呆れてしまった。

「……そりゃ、私もトシヤ兄も、人のこと言えた義理じゃないけど

……

上には上がいるものだ。

妙な感心をしてしまったチカゲに、ハーシエルが、ひた、と、真面目な目を向けてきた。

「チナミの塔に行ってみたら？」

「……は？」

一瞬、相手の言っていることが理解出来ず、チカゲは目が点になる。

「何、言ってるの？」

「そんなにでかい魔力持ってるなら、ひよっとしてチナミが依代にするかもよ」

「そんなこと、ある訳ないよ」

チカゲは即座に否定した。

「私みたいなのに、チナミ様は降臨しないわよ。第一これまでの危機だって、偉大な魔術

師はいらした筈なのに誰にも降臨なさってないし。それなのに、ノ
ーコン、の私になんか

……」

自分で言うのは物凄く抵抗があるが、事実なので仕方ない。
しよげたチカゲを、ハーシエルは数秒、黙って見ていた。

「……そーじゃねえんだよな、多分。あいつは、チナミは、怖がってやがるんだ」

「えっ？」

神様が怖がる？

あの、大陸に暗黒をもたらしたという悪しき魔術師エルウィードを倒した偉大なるチナ

ミが、一体、何を怖がっているというのか？

意外な言葉に、チカゲは目をしばたたく。

訳が分からず見詰めるチカゲに、ハーシエルは渋い顔で説明した。
「人を巻き込みまうことを、あいつ、怖がってるんだ。二千年前のエルウィードとの戦

いってのは、そりゃ酷かったから。チナミなんかもう、ぼろ雑巾みたいになってまで、奴

と魔力をぶつけ合った。それで漸く封印出来ただけど……。

そんな戦いをもう一回やって、依代の人間が死ぬなんて事態になるのが、チナミは耐えられないんだと、俺は思う」

神々は魂だけの存在である。依代が死んでも彼等は自分の塔に戻るだけで、別に傷付かない。

「優しい男だからな、チナミは……」

ユキナガの記憶を共有するハーシエルの黒い瞳が、切なさとも哀れみとも取れる色を掃く。

仲間として友として、とても大切に思っていた事が感じられて、チカゲは切なくなった。

「あの……、どんな方だったの？ チナミ様って……？」

「……ああ。ヒナタの王太子だっていうのは、さつき魔術師長から聞いたんだよな。??」

うん、真面目を絵に描いたみたいな性格ってのが、一番近いかな。とにかく、自分のやれることは全力でやる。人には優しくて自分には厳しい。厳し過ぎて、他人の手が借りられない。何でも一人で背負い込んでしまう。それと、争うのがとっても苦手」

チカゲはめまいがした。自分とは全く共通点が無い。

チカゲは、自分で言うのも何だが、とっても自身には甘いと思う。すぐ人のせいにするし、グチも零す。

怒るしわめくし、喧嘩もする。

うーっ、と唸って下を向いたチカゲに、ハーシエルは軽く笑った。

「さては、自分と引き比べたな?」

「だって……。でも、そんな方の依代なんて、絶対ムリだよ……」

「確かに、チナミは完璧主義で神経質で温厚だった。だから多分、自分が誰かに頼るのは

許せねえんだと思う。けど、今回はそんなこと言ってらんねえし。何としてもチナミにお

出まし願わねえと。俺らだけじゃ、パルスタードは間違いなく手に余る。ダメ元でも、ご

降臨願うしかない」

ハーシエルの、言い方は乱暴だが、真摯な言葉に、チカゲはますます困った。

「もし、本当にダメだったら……?」

「あんたのせいには絶対しないよ。だってそりゃ、チナミがわがままなんだし」

真顔で断言したユキナガの依代に、チカゲはやってみようかな、とほんの少し思う。

「やってみて、くれる？」 チカゲの心を読んだように、ハーシエルがチカゲの眼を覗いてくる。

一拍置いて。チカゲは腹を決めた。

「……うん。行ってみる」

8. 『光の塔』第一の神

空は水色から茜色の変わりつつある。

本殿の通用口から外へ出て、夕焼けの眩しさに思わず目を細めたチカゲは、木立ちの間からこちらにやって来る人影に気付いた。

「兄上っ、マリっ」

それぞれの塔に行っていた三人だった。

「よお、宝具は手に入った？」

けしかけた張本人として、まだ不安が残るチカゲについてきてくれたハーシエルが、三人に笑って尋ねる。

トシヤは、答える代わりに手にした槍を見せた。それは、穂先から柄の元まで金色に輝いている。胴体には、滑り止めも兼ねた、西の地の植物らしい美しい花の文様が、緻密なタッチで彫り込まれていた。

マリが受け取ったのは三節棍と呼ばれる武器だった。こちらは、三つに別れた棍棒の部分と、それを繋ぐ鎖とが全て黄金色で、トシヤの槍と同じく細かな装飾が彫り込まれている。

カナメはロングソードを手に使っていた。緋色の革の鞘の中程に細い草文様が施され、柄には鞘と同色の革を細く切ったものが巻かれていた。

「へえ、カナメは剣が得意なのか？」

ハーシエルはカナメの剣を借り、鞘から抜き放つ。黄金の両刃の剣は鞘と同じデザイン
の文様が、柄から十センチ程の長さの辺りまで彫られていた。

「いや、得意という程じゃないんだが。逆にこれしか扱えないという方が正しい」

「そりゃ……、頼もしいな。で？ トシヤは槍が得意？」

問われて、トシヤは鼻の頭を掻いた。

「槍がいいっていう訳じゃねえ。俺はどっちかてえと剣が得意だが」

「カナメとのバランスかな？ で、マリは三節棍か。元々はツバサが弓、テオは小剣、カ

レリアは体術のみで革手袋だったんだけどな」

「変わってないのは、ハーシエルの、ユキナガの刀だけだな」

苦笑すると、カナメは面白そうに両刃剣を眺めていたハーシエルから返して貰う。

「ところで、君達は何処へ行くんだ？」

カナメに問われ、チカゲは思わずハーシエルの顔を見た。ヒノワの王太子は、不安な表

情で自分を見るアケノの王女に素早くウィンクする。

「俺らこれから、第一の塔へ行くんだ」

「あ？ チナミの塔へ？」

トシヤが、横から入って来た。

「うん。ハーシエルが、チナミ様の降臨を試してみろって」

チカゲがおずおずと答えると、トシヤはぶっ、と吹き出した。

「無理だって。ハーシエルはチカゲの日頃の行いをよく知らねえから、そんな無謀なこと

勧められるんだぜ」

その通りだが、相変わらず齒に衣着せぬ言い方をされて、チカゲは悔しさのあまりみるみる頬を真っ赤にした。

べそはかかないまでも完全な膨れっ面になった姫に、チカゲ大事のマリがやりわりトシヤに抗議する。

「トシヤ様、それはあんまり……」

「だって、ほんとのことだぜ？」

だが、相手の気持ちに全く鈍感なトシヤは、窘められたのが不満な顔で言い返した。

トシヤと同じく、普段は妹をからかい倒すのが好きなカナメだが、これはトシヤが言い

過ぎかなと、援護の口を開き掛けた時、意外な方向から抗議が来た。

「ほんとだからって、何でも言っていないとは限らねえってのっ。あんた、年上なんだから

いい加減そんなこと学べばっ」

ハーシエルにずばりと言われ、今度はトシヤが赤くなる。

「んだとコラっ！ 生意気な事言いやがってっ！ ガキのくせにっ！」

「俺が生意気なガキだってんなら、あんたはただの大バカだぜ？」

チカゲは自分のいたら

なさは、よく知ってる。それでも、俺が無理に頼んだから、怖々でもチナミの塔に行く

って言ったんだ」

出会って数時間しか経っていない少年に言われ、トシヤは猛然と腹を立てた。

「てめーに何が分かるってんだっ！ 俺はチカゲとは赤ん坊の時から鼻付き合わせてんだ

ぞっ。その俺がダメつつってるんだから、ダメに決まってるんだろがっ！」

「そんなにダメダメ言わなくなったっていいじゃんっ！」

チカゲは、我慢出来ずに怒鳴った。

「トシヤ兄に言われなくても分かってるよっ！ 私がバカでドジで、どーしようもない

ことくらい。でも、アケノが大変で、みんなが頑張ろうって動いてる時に、自分だけなんにも出来ないのが、辛いのっ！」

ここ二日で、周囲には目まぐるしく様々なことが起こった。その中で、チカゲは自身の

いたらなさに、ずっと気持ちが凹み続けていた。

泣くまいと堪えていた感情が、一気に涙になって流れ出て来る。

拭いもせずにしゃくりあげる妹の赤金の頭を、カナメは側に寄りそつと撫でた。

「あつ、兄上みたいにつ、私つ、頭良くないしっ……。知ってるもん、によつ、女官達が

っ、私のこと、母上に……。似ないブスで可哀相って、言ってるの……っ！」

「そんなことないよ。チカゲは今のままで十分可愛い。誰が思わなくても、僕は絶対そう思ってるから」

「兄上……っ！」

チカゲは、兄の長身に抱き付いた。

普段は自分に妙なことをけしかけて、心密かに失敗するのを楽しむような、ちよつと意

地悪な兄だが、チカゲが完全に凹み切った時には、何故かとても優しい。それはアケノの

王太子として常に冷静沈着、時として冷徹な一面さえ見せなければならぬカナメにとって、妹は唯一彼が癒される大事な存在だったからだ。

見事な銀糸の刺繍が施された兄の絹のベストに、涙と涙を盛大に擦り付けるチカゲの背

を、カナメは頓着せずに撫で続ける。

こうなるともう、兄妹の独壇場である。

よく言えば謹厳実直、悪く言えば『姫様バカ』のマリは、美しき愛情で強く結ばれた兄

妹の姿だと、眼前の二人に感激の涙を流す。

逆に、カナメが王太子として生まれた時からライバルで喧嘩相手

のトシヤは、盛大に鼻白んだ。

「出たよ久々に。カナメのシスコンが……」

「どうでもいいけど、暗くなっちゃうぜ？」

一人だけ、この状況に全く飲まれていないハーシエルが、至極冷静な声で言った。

「ああ、そうだね」

漸く妹の背から手を離れたカナメが、小さく返した。

「さあチカゲ、顔を挙げて。出来る限りでいいから、やってみよう」
「……うん」

泣き止んだチカゲは、まだずるずるな顔を片手で隠すように拭きながら頷いた。

お守役が近付いて、彼女にハンカチを渡す。行こうぜ、と声を掛けたハーシエルにも頷き、チカゲは歩き出した。

松明と警備兵に囲まれた『光の塔』第一の塔は、夕闇の中、揺らめく炎と、内から発する燐光に似た光を外壁に纏い、神秘的な姿を見せていた。

魔術師長の命令で、塔の周りは呪文を編み込んだ綱が巡らされている。カナメは監視役

の魔術師に事情を話し、綱の一部を外させた。

五人は、正面と思われる扉のような文様のある前へ並んだ。

「相変わらず、閉じてるなあ」
トシヤが呟く。

「完全に目覚められている気配はありますが……」

マリも眉を寄せる。

「塔に触ってみれば？」

ハーシエルの突飛な提案に、チカゲは驚く。

「えっ？ そんなこと、しちゃっていいの？」

「チナミが何もする気が無いんなら、こっちからちよっかい掛ける
しかないじゃん？」

「う、うん……」 降臨して頂けるのか、やってみるとは言ったが、
いざ目の前にチナミの

塔が聳えている状態は、やはり緊張する。

チカゲはひとつ深呼吸すると、恐る恐る塔の外壁に手を伸ばした。
つるりとする白大理

石の感触が人差し指の先に当たる。

その刹那、塔の光の色が変わった。

「ふうわっ?!」 純白から卵色にいきなり変化した光に驚いて、チ
カゲは思わず変な声を上
げ、手を引っ込める。

光は、それまでの弱い波動から、波打つように大きな波動になる。
中に金粉を含んだような美しい波動に気を取られたチカゲは、光
が一筋、自分の方へ長

く伸びて来るのに気が付かなかった。

伸びた光がチカゲの腕に触れる。途端、チカゲは物凄い強さで引
っ張られた。

カナメかトシヤが何か叫んだが、聞き取れない。

「きゃっ……」

驚きの声を上げる前に、だが唐突に引っ張る力は止んだ。

いきなり放されて、チカゲは思い切りつんのめる。

「ったた！」

たたらを踏み、転ぶのを免れる。ほっとして顔を上げたチカゲは、
そこが先程の塔の正

面とは、似ても似つかない場所だと気が付いた。

とにかく、何処を向いても真っ白だった。

ところどころに壁の隅のような場所があるので、どうも建物の中
のようだ。

チカゲは、茶色の革靴の底で、足下を叩いてみた。こんつ、という音が返って来たのを

聞いて、足の下は固いもの、床であるらしいと判断する。

「もしかして、ここ、塔の中なのかな……？」

眩いた時。白い壁であるらしい周囲に金色の光が走った。

光はくるくると四方を這い、やがてチカゲの真正面で止まった。

「なに……？」

思わず呪文の構えを取った王女の眼前で、光はみるみる人の形になる。

「??あれ? これって夢で……?」

夢では景色が藍色だったが、全く同じ様な状況に驚く。

光の人型は、やはり夢と同じく小柄な青年の姿に変わった。

夢の中では気が付かなかったが、青年は青い生地に金糸で刺繍を施した長い上着と、足首で裾を絞った黒いズボンを履いている。

上着は首から左右の肩に向かって開くようになっており、そこに飾り紐と釦を付けて留めるようになっていた。

それは、滅びたヒナタ国独特の衣装だった。

「あなたは？」

もしやと思いつつ、チカゲは尋ねる。

藍色の光景と同様、淡く笑んだ青年は、静かな声で答えた。

「この主だよ」

「ここって、やっぱり『光の塔』の中、ですか？」

青年が頷く。途端、チカゲはパニックになった。

「でっ、でっ、ではやっぱりっ、あなたが、いえ、あなた様がチナミさまっ！」

ひえっ、と、チカゲはその場に座り込む。

チナミに接触する積もりではいたが、こんな形で対面するなど、予想していなかった。

アケノの太祖と言われるチナミだが、不思議なことに、その肖像画は1枚も残っていない。

い。しかも、過去一度も降臨しなかったため、後世の人間でチナミの顔を間近で見た者は、

恐らくチカゲが初めてだろう。

しかし、今のチカゲにはそんなことを考えている余裕はなかった。もしかして、勝手に塔に触ったのでお怒りなのかも、と頭を抱える王女に、くすつ、と

チナミは笑った。

「そんなに驚かなくても。君の魔力がこの塔の僕の魔力と引き合っただけだから」

「そっ、そうなんですか？」

妙なことをして怒りを買ったのではないと分かり、チカゲは一応安心する。

落ち着いたところで、当初の目的を思い出した。

「あっ、あのっ！」

勢い良く顔を上げたチカゲに、チナミは優しい笑みを向けた。

「なに？」

「私に降臨して、頂けないでしょうか？」

チナミは少し考え込むように、腕を組んで片手を顎の下に当てる。

髪と同様の形良い黒い眉が僅かに寄せられるのを見て、これはほぼ確実にダメだと覚悟する。

しかしそれで諦めては、決心して来た意味がない。

「私っ、魔力はありますが、ノーコンでっ。えっと、そのっ、ノーコンっていうのは、自

分のイメージしている魔法の強さにぜんっぜんならないってことでっ、いっつもなんか出

力オーバーしちゃうんですけど、でっ、でもっ、それは、何とか治せば治るかなーと思い

ますし……」

必死で自らを説明しようとしているチカゲに、チナミは深い眼差しを向ける。

「君のことはよく知ってるよ。僕は普段半覚醒なんだ。だから君が、小さな時から一生懸命に魔法を練習しているのも、それでも上手く扱えないのも、見ていた」

「……ご存じだったんですか……」

だったら、無い知恵絞って必死に説明することはなかったと、チカゲは肩を落とす。

拍子抜けした王女に苦笑して、チナミは続けた。

「僕が依代に降らないのは、魔力や魔法の問題じゃないんだ。……君はまだ若い。若過ぎ

るって言ってもいい歳だ。僕は、そんな君に、過酷な戦いをして欲しくない。神経が磨り

減るような、自分自身も無くなってしまうような、あんな……」

アケノ最強の守護神と言われ、人であった時は、その数々の武勇で称賛された『神』は、

切ない眼差しで虚空を見詰める。

チナミの辛そうな表情から、チカゲは如何にエルウィードとの戦いが苛烈なものであったか、幾許か推し量る事が出来た。

しかし。

「でも、現実にもうエルウィードは転生しています。今回は前と違って、パルスタードと

いう魔術師です。魔法が使えるってことは、前とは比べものにならないくらい大変なんじゃ……」

チカゲは、偉大な神に向かい、少々気後れしながらも訴えた。

「そうだね。それは、僕にも分かってる。今回は三百年前とは桁違

いな被害になるかもしれない」

チナミの、まるで自分には関係ないと思っているような言い方に、チカゲはむかつとする。

「それをご存じで、どうしてっ？」

若いチカゲを戦いに向かわせたくない、と言いながら、戦火に巻き込まれるかもしれない

い、アケノの子供たちは放っておくのか。

「私は、確かに力不足かも知れませんが。でしたら、魔術師長もいらっしゃいますし、他

の宮廷魔術師もいますっ。どうか、降臨してお力を……」

「僕はっ」チナミは、強い調子で王女の言葉を遮った。

「君だけじゃなく、誰も傷付けたくない。過酷な戦いをさせたくないんだっ。??弱虫と

思われてもいい。卑怯者と言われてもいいっ。それでももう、戦いに誰も巻き込みたくな

いっ！」

チナミの言い分は矛盾している。言い返そうと口を開きかけた時。

チカゲは不意に、今

度は後ろへ引かれた。

塔に入った時とは逆に、そつと後ろ襟を引かれたような感覚に、

チカゲは僅かだかよろ

めく。

片足を半歩後ろに下げた途端、景色が元の場所へと戻った。

「あ、れ……?」

きよろきよろと周囲を確認するチカゲに、ハーシエルが大きな溜め息をついた。

「やっぱ、ダメだわ……」

「チカゲ、チナミは何て？」

カナメに尋ねられ、チカゲは、はっ、と兄を見た。

「あ、うん……。私を戦いに巻き込みたくないって……」

という理由だったが、考えてみれば、やはりチナミはチカゲの力量を信用していないのだ。

それはそうだ。年がら年中魔法の大暴走を引き起こしているような魔術師を、最強の魔

術の神が依代には出来ない。

「やっぱり、私じゃ無理だった」

諦めと、だが少し残ったどうしてもという気持ちが縋い交ぜになり、チカゲは少しひがみつぽく口を尖らせる。

「だーっ！」突然、トシヤが喚いた。

「ったくっ！ 何甘ちゃんなこと抜かしてやがんだっ、このすつとこどっこいっ！ ころ

っ、チナミっ、聞いてっかつ！ おまえが自分の依代を殺したくないつて？ じゃあ俺達

はどーなんだよっ！ おまえ抜きで戦えっかつ！ それこそ俺達の依代はっ、俺達は負

け決定じゃねえかつ！ このまんま突っ込んだって死ぬぞっ！ 今までの相手とは桁違い

だったのパルスタードはっ！ 分かってんだろーがてめーだってよっ！ そんなでも、自分

の依代だけ大事だって言いやがんのかよっ！」

馬鹿野郎っ！ と、トシヤは大声でチナミの塔に向かって吠えた。塔は、それを聞いているかのように、卵色の光を徐々に弱める。

「ったくっ！」

トシヤは、塔に蹴りを入れる真似をする。

「喚いたって無駄だ。チナミは昔っから頑固なんだから」

カナメが、厳しい表情で言う。ハーシエルは呆れた顔で首を振っ

た。

「でも、今度はバカ過ぎ。ほんと、ここまで臆病者に逆戻りしてるとは思わなかったぜ」

あーあ、と、少年は伸びをするように頭の後ろで手を組んだ。

「臆病者って？」

神々の記憶の無いチカゲは、何のことか分からずマリの顔を見る。

「チナミ様は……。子供の頃とても身体がお弱かったので、一日の殆どの時間を、ご自分

のお部屋に引き籠もって過ごしてらっしゃったそうです。そのせいなのでしょうか、少々

引っ込み思案な所がおりになって……」

「引っ込み思案じゃあなくて、弱虫なんだよ。戦いとか喧嘩とか、嫌いって言うより怖

いって言ってたしな」

ハーシエルの補足が何となく分かる気がして、チカゲはそう、と相槌を打った。

「取り敢えず、今日はダメだ。引き上げよう」

カナメの言葉に、全員が塔に背を向けた。

9. プロポーズ？

夕食までにはまだ時間があるので、チカゲ達は各々の用を済ませようと一旦自室へ引き上げた。

マリと共に部屋へ戻ったチカゲは、入るなり待ち構えていた王女付きの女官達に掴まり、とつとと軽装の外出着を脱がされた。

「えーっ、何なのいきなり？」

「何じゃあございせんよ、姫様」

お湯に浸し絞った手拭いでチカゲの手足を拭きながら、女官長は言った。

「お聞きしたところ、何とヒノワの王太子殿下が我がアケノへお越しになられてらっしゃるとのこと」

「それを、何処から？」

ナユタ二世には謁見したが、ハーシエルの訪問は、まだ王宮内全ての者に正式に発表はしていない。

驚くマリに、年配の女官長はにこりと笑った。

「壁に耳あり、でございますよ。私くらいの古株は、そこら中に『耳』を持っております。」

それより、問題は姫様でございます」

「え、私？」

「はい」大きく頷いて、女官長はチカゲの肩に淡いオレンジ色のロングドレスを着せ掛ける。もう一人が同色のヒールを姫の足に履かせた。

「ヒノワと言えば大陸一の伝統を誇る由緒ある国。そんなお国のお世継ぎの王子様がお見

えというのに、姫様はあのような軽装のお召し物で外を飛び回られてっ」

「だって、いつも外へはあの格好だもの」

魔法の訓練の時も、暴走しやすい自分の魔力で万が一のことがあつてはならないので、動きやすい短いギャザースカートに革の上着かベスト、革のブーツを履いている。

「魔法を使うのに、袖が長かったり裾が長くて広がってたりすると邪魔なんだから。ねえ、マリ？」

「はい、それは……」

「それは分かります。しかしでございますよ」

女官長は、髪を結うためにチカゲをドレスサーへと連れて行く。

「ヒノワの殿下は大切なお客様でございます。確かに、我が国の懸かる大事にご助力のためお越し下されたという事情はおありですが、それでも、アケノの第一王女たるチカゲ様が、くれぐれも粗相があつてはならない方です」

「……そーかなー」

「左様でございますとも。ここはひとつ、アケノの王女として優雅にかつ威厳を持って、

お振る舞い下さいまし。さすればひょっとすると、殿下が姫様にプロポーズ、ということ

だって、有り得るのでございますよ？」

「なっ??、プロポーズっ?!」

あまりに驚いて、チカゲは声を引っくり返す。

「どっ、どどど、どうしてそんな……?」

「姫様は御歳十四におなりでございますよね? ヒノワの殿下も同い年ほどとお見受け出

来るとか。願ってもないお相手ではありませんか?」

確かに、ハーシエルに正確な年齢は聞いてないが、チカゲと1つと変わらなそうである。

それに、大国に嫁ぐというのは、王女にとって最高の幸せかもしれない。

が。

「あのハーシエルだよ？」

出会って本当に間が無いが、口は悪いは図々しいは、とにかく憎たらしいガキとしか思えない。

??あ、でも……

トシヤに言い返してくれた時は、ちょっとかっこいいと思った。よく見れば、容姿もそれなりに悪くない。特に、アケノの人間には少ない黒髪黒目はエキゾチックで魅力的である。

日頃、背の高いトシヤやカナメを見慣れているせいで、まだ十分に成長していないハー

シエルは、どうしても頼りなげに見える。しかし、あと四、五年もすれば背も伸びて、立

派な王族の青年になるだろう。

「それは、ちょっと見てみたいかも……」

「姫様？」

考え事に没頭していたチカゲは、マリに声を掛けられ我に還った。気付けば、すぐ目の前に食堂の扉がある。

「あ、あれ……？」

女官に手を引かれるまま、周囲を見もせず歩いているうち、いつの間にか食堂まで来ていたのだ。びっくりして振り向くと、マリが心配そうな顔をした。

「何処かお加減が？」

「あ、ううん。ちょっと」

ハーシエルのことをずっと考えていたとは、恥ずかしくて言えな

い。曖昧に笑って手を

ひらひらと振ると、チカゲは衛兵の開けてくれた両開きの扉の中へ入った。

食堂では、すでにカナメとハーシエルが卓に着いていた。

「お、着替えて来たんだ」

ドレス姿のチカゲに、ハーシエルがにっこり微笑む。先程の会話もあり、チカゲは少年の笑顔にどきりとした。

「さすがアケノの第一王女だな、いいドレス着てるじゃないの。そーやとちつとは淑女に見えるし？」

「……あのねえ」

あからさまに『馬子にも衣装』と言って退けたハーシエルに、チカゲは笑顔を引き攣らせる。

「？？もーやだっ！ やっぱこいつ、ただの悪ガキよっ！

ちよつとでもイイ男になるかと思って、ときめいた自分が情けない。

「悪かったわねっ、ドレスだけよくってっ！」

頬を膨らませると、チカゲはドスドスと足を踏み鳴らして自分の席へ向かった。

当のハーシエルは、そんなチカゲにゲラゲラと笑い出す。少年の向かいの席のカナメは、俯いて肩を震わせていた。

玉座の右の扉が開き、ナユタ二世が入って来た。王の後ろには、カナメとチカゲの母、王妃カユラが続く。

王妃は大変大人しい人で、政治など表向きの事柄には一切口を出さない。普段は王宮の北側奥の王妃の部屋で、女官達と共に趣味の手芸や音楽などを楽し

んでいる、典型的な貴婦人だ。

王妃はハーシエルに軽く会釈すると、夫の隣の席に着席した。チカゲは、臨席の少年がうっとりとお綺麗な方だなあ」と呟くのを聞いて、更に向かった腹を立てた。

「さて、皆着席しておるか？　？トシヤがおらぬようだな」卓を見回すナユタ二世に、カナメが聞いた。

「父上、トシヤをこちらにお呼びになったのですか？」

「うむ。パルスタードの件で、神々の依代同士、意見の交換もあると思うてな」

「それは、恐れ入ります」

カナメが礼を述べ終わらぬうちに、扉が開きトシヤが入って来た。「遅くなりました。南の封印塚の方角で、何やら騒ぎがあったという報告を聞いておりましたので」

「そうか。して、そちらへは？」

「近衛軍第二軍が向かっております」

「うむ」

ナユタ二世は、トシヤからチカゲの背後に立つマリに目を転じた。

「そなたも着席せよ、マリ・ミクニ」

「はっ、ですが……」

急に言われ、マリは慌てる。が王は鷹揚に笑った。

「そなたも依代の一人。立っている意見は言いづらかろう」

「……はい。では、今回はお言葉に甘えまして」

マリが末席の椅子を引き全員が着席したところで、料理が運ばれて来た。

「本来なら、ハーシエル殿下のために晚餐を開かねばならぬところなのだが、時が時じゃ。」

「かようなささやかなものでご勘弁願いたい」

とんでもありません、とハーシエルが返す。ナユタ二世が食物の神リリアに短い感謝の祈りを捧げ、夕食が始まった。

程なく。扉が急に開き、侍従が緊張した面持ちで足早にトシヤの側へとやって来た。

「???なに?」

トシヤは、膝に掛けていたナプキンを鷲掴みすると、難しい表情で立ち上がった。

「陛下、並びにお姫様に申し上げます。火急の事態が発生致しました。失礼ながら、退出のご許可を賜りたく」

「どうしたんだ?」

訊いたカナメに、トシヤは吐き捨てるように言った。

「南の封印塚が、パルスタードらしい魔術師に破壊された」

封印塚とは、シノノメ市内を囲む三の濠のすぐ側五か所に作られた、結界の塚である。

『褐色の塔』『光の塔』の封印結界を補佐する王宮城壁の遮断結界を、更に強固にするために作られたものであるが、範囲が広いために、さほど効果は強くない。

塚は五つどれも同じ形で、丸く盛られた土の上に、アケノでは花石と呼ばれている最も硬い質の石を大小の円盤形と円筒に加工し、一番大きな円盤から順に、小さな円盤を間に挟みながら積み上げて築かれている。

円筒形の石は塔の中程に挟まれており、その中に結界石として大人の拳大程の、呪文を封印した水晶が納められていた。

土台の土饅頭から半径二十メートル程は建造物などは無く、塚を中心とした広場になっ

ている。

塚の正面の地面には、魔法文字で魔法陣が彫られた花石の石盤が埋め込まれている。宮

廷魔術師が塚の見回りの時間を短縮するために設けたもので、宮廷魔術師だけが着けるの

を許される腕輪と呼応するようになっていた。

トシヤの言葉に、カナメは美貌を厳しくする。

「で、被害は？」

「塚は壊滅。しかも周囲の民家まで破壊して、多数の死傷者が出ている。第二軍だけじゃ

手が足りねえ。？？ちくしょう、あいつ、人を飢え死にさせる気かってんだっ」

最後に小声で毒づいたトシヤに、ハーシエルが小さく吹き出す。

国王の退出許可を得たトシヤは、少年を一瞬横目で睨んで、出て行った。

10. パルスタードの計略

「???全く」

扉が閉まるのを見ながら、カナメが片眉を上げる。

「あちらも色々やってくれる」

しかし、幾ら封印塚の力が弱いといっても、他の結界に何等かの影響があることは確かだ。

かで、塚が壊れるのは厄介だ。

「正攻法がダメならと、搦め手で来たな」

カナメはふん、と鼻を鳴らし、腕組みした。

「封印塚の破壊は、恐らく、僕達三人が依代となったという情報を、何らかの手段で知り

得ての行動だろう。市内で騒ぎが起きれば、市警護の任に就くことになる近衛軍軍団長の

トシヤは、王宮から離れなければならない。そうやって、僕達のうち一人でも王宮から離

れる者を出したいのだ」

「え、何で？」

依代となったカナメ達が王宮を離れると、パルスタードにどんな益があるのか。

兄の言が分からなくて、チカゲは首を傾げた。

カナメは、チカゲの後方の壁を睨み付けながら、説明する。

「まず、本来、王宮の遮断の結界は『光の塔』の結界の補助として張られたものだ。塔の

結界は、中から外への放出は防ぐが、外からの侵入は防げないからね。封印塚は、ここに

一番関係している」

三百年前のエルウィードの『器』も、何とか王宮城壁の結界を弱めようと、三つの封印

塚を破壊したが、魔力の無い身では完全に結界を取り除くことは出来ず、最後は四体の神

によって討伐され、再び魂を封印された。

「そして『光の塔』の結界というのは、神々の魂がそれぞれの塔にいて初めて最大の効力を

を現す。けれど今は、チナミ以外、塔に神がいない。僕達に降臨しているからね。神々は

魂を依代に降臨させている時にも、『神力』の3分の1程は、『光の塔』の最低の結界維

持のために残している。『神力』を依代に全て移さないのには、他にも意味があるのだけ

れど……。とにかく、こういう風に依代に降臨した時は、依代が王宮内にいれば、すぐに

『神力』のやり取りが可能のため、封印結界は安定している。だが、僕らが王宮を離れ

ば離れる程、結界の効力は当然薄くなるんだ」

「あつ、なるほど」

理解したチカゲは、両掌をぱちんと合わせた。

「封印塚を壊して、まず城壁の結界を歪めて侵入し易くした上で、兄上達を王宮から遠ざ

けて『光の塔』の結界を緩めようってわけねっ」

「その通り」

ハーシエルが大きく頷いた。

「時間は掛かるが確実な方法、ってね」

「なかなか、侮れぬの」

ナユタ二世が眉を顰める。

「ならば他の封印塚にも兵をやり、守らせる方がよいかも知れぬな」

「いえ」父王の意見に、だがカナメは反対した。

「どれだけ兵に守らせても、パルスタードの魔力の前には全く無力でしょう」

広間で対峙した時の感触から、自分とほぼ同程度の魔力であるだろうと、チカゲは推測していた。

その魔力で封印塚と周辺の家屋を破壊したのだから、相当の被害だろう。

そんな相手と渡り合わなければならないかもしれないのに、トシヤは朝から忙しく動き

回って、ろくに食事をしていない。

「トシヤ兄、大丈夫かな？」

「確かに。ハラが減り過ぎて敵に不覚を取る、なんてことに、なったらやばいよなあ」

氣遣うチカゲに、おちよくってるのか心配しているのか分からない感想を、ハーシエルが小声で返す。

「その点は何とも言えないな。トシヤは人の倍食べないと動けない男だから」

聞き取ったカナメが、含み笑いをした。

「……効率わりい」

顔を顰めて呟いたハーシエルに軽く頷き、カナメは「さて」と居ずまいを正した。

「僕らも、トシヤ達に助力するため出たいと思います。どうかご許可を」

「え？ でも兄上、それじゃ結界が……？」

驚いて尋ねるチカゲに、カナメは何時になく真面目な表情で言った。

「確かに、『光の塔』の封印は僕達が王宮を出ることにより、確実に弱まる。が、パルス

タードは多分、この程度では僕達が全員で外へ出ないと踏んでいる筈だ。だから、初期段

階の現在、全員で奴を追い詰めれば、あるいは容易に掴まえること

が出来るかもしれない」

「差し出がましいようですが」

マリが、声を上げた。

「一歩間違えれば、かなり危険な戦術ではないのですか？ 敵は狡猾なエルウィードです。」

「そうそう。逆に我らの虚を突いて、無理矢理王宮へ乗り込んで来るとか」

ハーシエルも同調する。

「その時は」

カナメは、青銀の瞳を細め、冷徹な策士の表情になる。

「チナミに頑張ってもらうしかないな。何せ、自分で降臨は嫌だと言ったのだから、その

分、結界の守護には当たってもらわないと」

「そりゃそうだけど、な」

難しい表情で椅子に背を預けたハーシエルに、チカゲは訊いた。

「でも、チナミ様は、それで納得なさるの？」

「なさるも何も……。『光の塔』はそういう風になってるんだ。五人が全員塔に居る時は、

結界に掛ける力は等しいが、誰かが欠けている？？降臨して塔にいない時は、その塔が最

低の結界維持力を割った場合、その分を残った連中で補うようになってる。今はチナミ以

外は降臨しているから、俺らが王宮を離れば当然、最悪の状態になった時点で、チナミ

が一人で結界の力を維持するしかないんだ」

「その責務は放棄出来ない」

カナメが、硬い声で言い放った。

「だから、幾らチナミが嫌だと言おうが、僕達がいけない時にパルスワードが侵入してくれ

ば、チナミは結界守護に力を出すようになる」

「ただ……、最悪の場合、結界守護に力を使い果たして、消滅する危険も、あるけど」

ハーシエルが眉を曇らせる。

チカゲは驚いて、椅子から立ち上がった。

堅い檜の材の椅子の足が、板張りの床を擦り、高く鳴る。

「チナミ様が消滅っ?! そんなっ、そんなこと……っ!」

「予想のひとつだ。そうなる前に、僕達がパルスタードを掴まえればいい」

とにかく、とカナメは、仲間を見回した。

「早い段階でパルスタードを掴まえないと。時間が掛かれば掛かる程、奴はシノノメを、

アケノを破壊する。急ごう」

「決まったようだな」

ナユタ二世の重々しい声音に、カナメが頷く。

「はい」

「出撃の許可を与えよう。一刻も早くパルスタードを捕らえて参れ」
カナメが立ち上がる。ハーシエルとマリもそれに習った。

「では、行って参ります」

一礼して席を離れる三人を見ながら、チカゲはどうしようと考えた。

チナミの依代には、なれなかった。魔法を大暴走させないコントロール法は、未だに勉強中。

だがそんな自分でも、みんなと行って、何か役に立たないか。

「マリっ、待って」

チカゲは、思い切ってお守役を止めた。

「私も、一緒に行く」

マリは、柳眉をきゅっと引き上げた。

「いけません。南の封印塚の辺りは、恐らくかなり危険です。姫様

は王宮にお残りになって下さい」

「マリの申す通りだ」

ナユタ二世が言った。

「そなたはここに残れ、チカゲ。まだ未熟なそなたでは、パルスタードとは戦えぬ」

「分かっています」

チカゲは父を振り返った。

「でも行きたいんですっ。お願いします、私にもご許可を」

「姫様……」

マリは、娘に懇願され、低く唸るナユタ二世と、チカゲを交互に見やる。王妃カユラも、
氣遣わしげな表情で夫と娘を見詰める。

と、不意に別な声が割って入った。

「自分の身を自分で守れない奴が一緒じゃ、俺らは戦えない」

皆のやりとりを側で聞いていたハーシエルが、冷たく言った。

あまりな言い様に、チカゲの頬が真っ赤になる。

自分が半人前なのは十分わかっている。しかし、他人からずばりと言われるとやはり悔しい。

「わっ、分かっているわよっ。でも、私だって何か役に立ちたいっ」

ハーシエルは、大きな黒い瞳をひた、とチカゲの薄緑の目に据える。

「修羅場じゃ役に立たないって言ってんだ。魔力はあってもただのお飾り。使えば大暴走。

そんな奴、危なくて連れてけるか」

「ひっ、酷い……」

涙が、目尻に溢れて来る。でもここで泣いたら本当に意地がくじけてしまうと思ったチ

カゲは、ぐっと奥歯を噛んで泣くのを堪えた。

そんな妹の気持ちを察したカナメが、側に来るとチカゲの頭をそつと撫でた。

「ハーシエルのは言い過ぎだ。でもチカゲ、おまえはまだ勉強中だろう？ それに、王宮に

は父上母上もいらっしゃる。お二方を、魔術師長と共にお守りしてくれ」

兄にもやんわり断られ、立つ瀬が無いチカゲを救ったのは、やはりマリだった。

「あの、カナメ様。私がお守りしますから、どうか姫様をお連れ下さい」

「なあに言っただよつ、あんたっ！」

ハーシエルが目を剥いた。

「パルスタードとの対決になったら、俺らだけだってやばいんだぞつ。ましてこんなお荷物

物背負ってたら、全滅だぞっ！」

「お荷物になるかどうかは、あちらの状況次第。どうか、お願い致します」

「ダメだったらっ！」

断固反対のハーシエルを、カナメは片手で黙らせた。

「チカゲ」

静かに、しかし冷たい響きで名を呼ばれ、チカゲは兄を、断罪者を見上げる咎人のように、

おどおどと見返した。

「……はい」

「いざとなったら、僕達はおまえを見捨てる。それでもついて来るか？」

チカゲはぐつ、と掌を握り締めた。

「はいっ」

「なら、来なさい」

「カナメ」

心配そうに声を掛けるナユタ二世に、アケノの王太子はにっこりと笑った。

「大丈夫です」

踵を返したカナメの脇を擦り抜けながら、「知らねえぞっ」とハ―シエルは呟いた。

許可が下りたチカゲは、だが嬉しさよりも責任の重さを感じた。
?? 行きたいなんて、言わなきゃ良かったのかも。

今更、自分の我がままに皆を巻き込んだのを、反省する。

そんな彼女の心を察したマリが、そっと肩に手を置いた。

「大丈夫ですよ。ああはおっしゃいましたけど、カナメ様は、いざとなったら姫様をいの一番にお助けなさいます」

「マリ」

そうじゃない、という気持ちは、だが言っても実力の無い自分では我がままの上乗せになってしまう。

黙って頷くと、マリは微笑んで頷き返した。

「それでは、参りましょう」

11. 市街の惨状

兄から許可が貰えたチカゲは、みんなには先に出発して貰い、裾の長いドレスを、乗馬

の出来る普段の外出着に着替えに、自室へと一度戻った。

手早く着替えて、残ってもらったマリと共に、騎馬で兄達の後を追う。

シノノメはアケノの王都でもあり、東の地一の大都市である。

都市にはつきものの歓楽街も多くあり、夜ではあるが道は比較的明るい。

しかし、南門に近づくにつれ夜の街の様相は明から闇に変わっていった。

大門通りから升目に通された大路の一本、南第二大路を左に入った途端、チカゲ達の前

に目を覆いたくなるような光景が現れた。

破壊され燃え上がる民家、逃げ惑う人々。

道端には死体と、怪我をして動けない市民が横たわっている。

それらの人々を、先発の近衛軍第二軍の兵士達が介抱していた。

「兄上達は？」

西門と南門を結ぶ南第二大路の屯所には、先に城を出たカナメとハーシエルの姿は見当たらない。

第二軍の軍曹に尋ねると、二人は南の封印塚近くに陣を敷いた第一軍の方へ向かったという。

南第二大路をこのまま塚まで馬で進むには、瓦礫が多く、チカゲの乗馬の腕前では、とても乗って行かない。

二人は軍曹に馬を預け、徒歩で塚へ向かうことにした。

「大変危のうございます。姫様、くれぐれもお気を付けて」

気遣ってくれる軍曹に礼を言い、チカゲ達は先導の兵と共に瓦礫の路に踏み込んだ。

「予想していたより、酷いね……」

大路の左右に立ち並んだ高い建物がことごとく全壊しているのに、チカゲは顔を歪める。

「雷系か、火系の呪文かな。こんな、いっぺんに広い範囲を壊せるのって」

「凄いものですね……」

焼けたレンガの屑や、外壁が吹き飛ばされ黒く焦げた家具が剥き出しになった建物を目の当たりにし、マリが身を震わせた。

「本当に、魔法の威力は凄まじい」

更に進むと、焼け残った商店の中に数十人の人々が蹲っているのが、松明の明かりにうつすらと見えた。中の一人が、チカゲ達を見付けて近付いて来た。

マリは警戒して、チカゲを背に庇う。

やって来たのは老人だった。

「お願いです、お偉い方」

老人は、怪我を負ったのだろう、煤けた服を千切って巻き付けた両手を合わせ訴えた。

「子供が怪我をしております。薬をお持ちでしたら、どうか分けて頂けませんか？」

「薬の持ち合わせは、あいにく無い」

同行した近衛軍の兵士が答えた。

「衛生兵か宮廷魔術師が来るまで待て。待てぬなら、薬はこの先の屯所にある。歩けるよ

うならそこへ行け」

「子供は重傷です。歩けません。どうか……」

「……残念だ」

なおも縋る老人を無視して、三人は歩き出した。

チカゲは、五メートル程行ってから、やはり気になって振り返った。

老人はまだ、彼女達を見ていた。

「あの人……」

「今は、気の毒ですが助けている時ではありません。一刻も早くパルスタードを見付け出さなければ」

「うん、でも……」

マリの言葉も納得出来る。

パルスタードを掴まえなければ、あの老人のような人々がまだ増えて行くのだ。

だが、今日の前で苦しんでいる人達を放って行くのは、どうしてもチカゲには出来なかった。

戻ろう、と決意し踵きびすを返すと、ぱっ、とチカゲは走り出した。

「あっ、姫様っ！」

老人の元へ向かったチカゲに、マリが慌てて声を掛ける。だがチカゲは聞かず、老人の顔を覗き込んだ。

「怪我した子供は何処？」

老人は一瞬驚き、そしてくしゃりと顔を歪めた。

「こちらです」

チカゲは、彼に付いて歩き出した。

老人は先程の商店の裏へと入って行く。そこは、正に地獄の様相だった。

瓦礫の中から皆でやっと探し出したのだろう、地面に置かれた幾つもの手燭や灯籠が、

様々な苦痛と悲しみを、照らし出している。

傷を抱え蹲る人、横たわり苦痛にあえぐ人、泣く子供、疲れ果て

て項垂れる老人。どの顔も、埃と汗に塗れている。

背後では未だに火事が収まらず、夜空に微かに黒煙が上がっているのが見える。

よくマリと外出するチカゲだが、こんな街のありさまは、今まで見た事が無い。

胸が痛い。

しかし、助けると言ったものの、具体的に何をどうすればいいのか、実のところチカゲには思い付かない。

困ったな、と思い始めた時。

「姫様っ」

追い付いて来たマリが、背後から肩を掴んだ。

「いけません、こんなところまでおいでになつては……」

「でも……」チカゲは振り向く。前に行く老人が声を掛けた。

「こちらです」

そこは一階部分が破壊され大きく裂けた、三階建ての集合住宅だった。

中には、薄い布だけを敷いた床の上に、数十人が横たわっている。その中の一人の少女

に、チカゲは視線を止めた。

「あの子……?」

老人が頷く。

右側の壁の際に寝かされたその少女は、年頃はチカゲより随分下に見える。半分壊れ掛けた角燈の明かりの中で、青白い顔を天井に向け、死んだように動かない。

チカゲは側へ寄る。と、隣に寝ていた老婆が上半身をゆっくり起こし、チカゲを見上げた。

「この先の建物が崩れた時に、上から落ちて来たレンガが頭に当たったんだよ。私は足に

当たってね。一緒に運ばれて来たんだけど、その時にはもう、こんな状態で……」

何とかしてあげたいけれど、と、老婆は片手で目頭を押さえる。

老婆の肩を、案内して来た老人がそっと抱いた。この二人は夫婦だったのだ。

「私共が魔法でも使えば、この子を助けられるのですが……」

老人の言葉に、チカゲははっと気が付いた。

??あ、そうか。水の魔法には、治癒の呪文があったんだ。

治癒魔法は、大して魔力の無い者でも簡単に発動出来る、水の魔法の初級呪文である。

チカゲの魔力なら当然難なくこなせる魔法だ。
が。

??あれ、使ったことがないんだよなあ……

魔力が暴走する彼女は、人体に使うこの魔法を、何が起きるか分からない怖さから、こ

れまで一度も使わなかった。

魔法は、術者が魔力を思い描くものに変換して初めて完成する。

今までは、訓練のために漠然とした想像で呪文を唱えていた気がする。

??でも、今は、この小さな女の子を、私は本気で治したい。

そう思えば、多分、魔法は正常に発動する筈だ。

チカゲは、よし、と心中で気合いを入れると、きゅっ、と真一文字に口を引き結ぶ。少

女の枕辺にしゃがみ、息をゆっくり吸い込むと、そっと少女の上手を翳した。

魔術の杖がなくとも、チカゲの力なら手を翳すだけで、魔力の放出は可能である。

「???清き水の力、傷付きし者の身を癒せ。治癒水」

静かに呪文を唱える。すぐに、チカゲの掌から白い光が溢れ出た。光は少女の身体に落ち、透明な水となって少女の身体を覆う。頭髮の中や服の中を流れ、

そして、見る間に地に吸い込まれて消えた。

数秒して、少女が僅かに身動ぎした。

「お……、おお」

老夫婦は、ゆっくり目を開けた少女に、驚いて呻いた。

「……私？」

「よかったっ。魔法、効いたねっ」

初めて使う魔法に、上手く出来るかと心配していたチカゲは、少女が喋ったのを聞いて

ほっとして笑った。

少女は、覗き込むチカゲを不思議そうに見上げながら、ゆっくりと起き上がる。

「どう？ どっか痛い？」

12. 癒しの魔法

「頭が痛い。でも……。あれっ、痛くないよっ？」

弾けるようにチカゲを見て、少女は大きな青い目を真ん丸に見開く。

「どうして？ お姉ちゃん、魔術師？」

「うん。チカゲっていうの」

「私、ユリ。お姉ちゃん、ありがとうっ」

ユリは、にっこり笑うとチカゲに抱き付いた。チカゲは、抱き付かれてびっくりしながら

らも、初めて自分の魔法が人の役に立った嬉しさに、少女を抱き締めた。

「よかったあっ！」

「お嬢さん、魔術師なんだね。こりゃ大したもんだ」

老婆と老人は、嬉しそうに二人を見ながら笑う。

チカゲは、老婆の足の怪我を思い出して、そっとユリを離した。

「お婆さんも、足が痛いんだよね？ 待ってて」

ユリにしたように患部に手を翳し、水の治癒魔法を再び唱えた。

先程と同じく、光が老

婆の足に下り、透明な水となって患部を包む。

「ああ……。足の傷が癒えていく」

老婆の顔からみるみる苦痛の表情が消える。

「おお、ありがとう、チカゲさん」

老人は、連れ合いの笑顔に喜んで、チカゲの手を取って礼を述べた。

魔法を使って二度も感謝された。嬉しくて、チカゲは満面の笑みを浮かべた。

「あの……」

後ろから声を掛けられ振り向くと、老婆の斜め左にいた中年の男

が、縋るような表情で

チカゲを見ている。

「わしも、お腹を打ったんだよ。良かったら治しておくれ」

チカゲは「いいよ」と笑うと、男の腹部に手を翳す。魔法はすぐに発動し、たちまち男の痛みを止めた。

それを見ていた周囲の怪我人が、次々とチカゲに助けを求め始めた。

「俺は、足を……」

「私は、腕を折ったの」

あっと言う間に、チカゲは人々に囲まれた。

「お願いっ、どうか治してっ」

「助けてくれっ！」

「娘が大怪我を……」

「あっ、あのっ、ちょっと待って……」

我も我もの状態に、チカゲは慌てる。困った王女を助けたのは、最初に治した少女ユリだった。

「お姉ちゃんが困るでしょっ。みんな、順番っ！」

ユリの一言で、群がっていた大人達は静まる。

少し離れて見守っていたマリは、皆がチカゲに群がり始めたのに危険を感じ駆け寄ろう

としたが、ユリの一言で静まったのを見て止どまった。

「じゃあ、並んで下さいっ」

ユリの号令で、人々は列を作り始めた。同じく治して貰った老婆と老人も手伝い、チカ

ゲの前にはたちまち長い列が出来る。

漸く到着した衛生兵が、騒ぎを聞き付け飛んで来た。

「何ですかこれはっ？」

「姫様が、怪我人の治療を始められたのです」

マリは兵士に説明し、チカゲの元へ寄った。

「こんなに大勢では……、お疲れになりませんか？」

お守役の心配に、チカゲは「ううん」と首を振った。

「治癒の呪文は初級だし。私、魔力だけはあるから、大丈夫」

では治療を始めようと、チカゲが手を翳した時。

「マリいるかっ！」

「ハーシエルっ！」

息急き切って、ハーシエルが駆け込んで来た。

「よくここが分かりましたね？」

「カレリアの『気』を追って来た。……それよりパルスタードが居たっ。西の封印塚の方

に現れて、今、カナメとトシヤがそっちに詰めてる部隊の応援に向かつてる。上手くすれ

ば今度は掴まえられそうだっ」

「分かりましたっ！」

失礼します、と立ち上がったマリを、チカゲは止めた。

「待ってマリっ、私も行くっ」

一度は、兄達の足手まといになりそうな自分は、行かないほうがよい、と思った。しか

し、市街のこの惨状を目の当たりにして、チカゲは本気でパルスタードが許せない、と感じた。

「ですが……」チカゲの申し出に、マリは美貌を曇らせる。ここでチカゲが怪我人の治療

に専念していてくれれば、危険な目に遭わせずに済む、と考えているのだろう。

お守役の逡巡を断ち切るように、ハーシエルが鋭い声を放った。

「やめとけてっ。生のパルスタードだぞっ。あんたにはまだ無理だっ」

「これでも一度は戦ってるんだからっ。それに、ここから西の封印

塚まで、馬でも十分は

かかるよっ。私が一緒なら魔法陣が使える。一瞬で行けるっ」

兄はいいと言ったのだ。なのにここで置いて行かれるのは嫌だと、チカゲは必死に言い

募った。

「魔法陣を使えるのは、私みたいな魔術師だけっ！ しかも、王族なら何人か一遍に運べるんだからっ！」

王女は魔術師長から貰った腕輪を、ハーシエルに見せた。
ハーシエルは束の間、難しい表情でチカゲの腕輪を睨む。

「……それ、本当だろーなっ」

「ほんとよっ。どーして私がウソつかなきゃなんないのっ」
さも自信あるように、チカゲは胸を張って見せた。

「……ほんとはカナメに連れて来んなって言われたんだけどな。カナメに殺されっかな」

……。でも、間に合わなきゃ意味ねーし、背に腹は換えられねえか。
??よしっ、一緒に来なっ」

わあい、と、チカゲは飛び上がって喜ぶ。

彼女の隣で、ユリが悲しげな顔をした。

「お姉ちゃん、もう行っちゃうの？」

これから始めようとしていた治療を思い出して、チカゲははっと、少女を見た。

「あ……、ごめん。でも、私……」

「そんな殺生なっ！ 私らの怪我は治してくれないのかねっ?!」
せっかく並んだのに、と、周囲からも非難の声が出た。

「ごめんっ！ でも私、行かなきゃなんないのっ。お願いっ、勘弁してっ」

頭を下げる王女に、それでも人々は怒りの言葉を投げる。

「痛いのを我慢して並んだのにっ！」

「治してくれるって、嘘だったのかよっ！」

「人でなしっ！」

「静まりなさいっ！」

堪り兼ねて、マリが声を張った。

「そなた達は、誰に向かってもものを言っているのですかっ。この方は、アケノの第一王女、

チカゲ・セライア様ですっ！ 本来ならそなた達が気安く声をお掛

けてよい方ではありませんっ！」

怪我人達は、一斉に黙った。呆気にとられる周囲に気恥ずかしく

なり、チカゲはあらぬ方に視線を飛ばす。

「えーと……」

「お姉ちゃん、王女さまなの？」

困惑した表情のユリを、チカゲは彼女を見下ろして頷いた。

「ごめんね、黙ってて」

「どーして、王女さまがここにいるの？」

「それはちよっと、事情があつて……」

話せば長くなるし、詳しい説明をしている程、時間は無い。

「ごめんねユリちゃん。それはまた今度話すねっ」

とにかく、ここに集まった人々の治療をどうしようと考えて、チカゲははたと思い付いた。

「??私の魔力なら、一人一人に掛けなくても、全員一遍に治せるかも。」

普通の魔術師なら、かなりの暴挙と言える。だが今は時間が無い。それに、しょっちゅう魔力を暴走させているので、魔法を巨大化させるのは、ある意味得意である。

後は大暴走に注意だが、やり方は、ユリと老婆の時に分かった。

後は、対象を広げて、
ここにいる全員を治す意識を持てばいい。

チカゲはすぐに魔法の詠唱に入った。

「……清き水の力……」

目を閉じて、怪我人全体を、更にこの場所の状況をしっかり心に
思い浮かべ、魔力を高
める。先程は掌からしか現れなかった光が、チカゲの全身から迸る。

「??? 治癒水」

呪文が完成すると同時に、チカゲは両手を天に向け、くるり、と
その場で回った。

途端。彼女の身体から発された光は、一度天井まで上がり横に大
きく広がると、程無く
雨のように降って来た。

光は人々の身体に触れるや透明な水に代わり、瞬く間に患部を浄
化していく。

「お……、おおおっ」

「すごいっ！」

傷が癒された人々は、皆驚きの声を上げる。

並んでいた人々だけではない。光は建物をはみ出し、通り近くで
衛生兵の手当てを受け

ていた者までが癒され、衛生兵が何が起きたかと驚く。

無論、老人の手の怪我也跡形も無くなっていた。

「これでよしっ、と」

チカゲは、あらかた効果を確認すると、マリとハーシエルを振り
返った。

「お待たせしま……、あれっ? どしたの?」

二人とも、チカゲの魔力の強大さに、今更ながら驚いてあぐり
口を開けていた。

「何びっくりしてるの?」

「……すっげえ。こんなバカでかい治癒魔法、初めて見た」

「私も……、今までお仕えしていて、初めて、姫様のお力の凄さを見たと思います」

「わっ、私だって、やれば出来るんだからっ」

褒められて、ちょっぴりくすぐったくなったチカゲは、わざと頬を膨らませた。

「急がなきゃ、さ、行こうっ」

二人を促して、チカゲは歩を踏み出す。その背に、ユリが言った。

「おねえ……、王女さま、また会える？」

チカゲは振り返り、微笑んだ。

「うん。絶対。悪い奴を倒したら、必ず会いに来るから」

「うん、待ってるねっ」

さよなら、と、少女が手を振る。それに釣られるように、傷を癒された人々が、チカゲに頭を下げた。

次々と感謝の礼を述べる人々の中を、チカゲはハーシエル、マリと共に、魔法陣へと急いだ。

13. 封印塚の攻防

魔法陣を開けるのも治癒魔法同様初めてだったが、こちらですんなり行った。

が、魔法陣の設置されている場所が悪かった。

どの封印塚も、魔法陣は塚の真正面、すぐ間近の位置にある。

南から西の魔法陣に飛んだチカゲ達は、出た途端、大変なものに出会ってしまった。

塚の真上にパルスタードが居たのだ。

「おや、これは。アケノの王女」

塚に背を向ける形で転送されたチカゲは、魔術師に呼ばれ、慌てて振り向いた。

「パルスタードっ?!」

「うっわ、近いっ」

ハーシエルが、驚いて一步跳び退く。

「正に一触即発の中央に出現するとは。良い度胸だ」

指摘され、周囲を見回す。と、反対側には北面隊と第四騎士団、それにカナメ達が身構えていた。

「こおらハーシエルっ! 何でチカゲを連れて来たっ!」

トシヤが、槍を構えたまま怒鳴った。

「カナメに、あっちの屯所に置いて来いって、言われたろうがっ!」

「んなこと言っただけでしょーがねえだろっ! チカゲがいなけりやこの魔法陣、使えないって言うんだからっ!」

「なにいつ?!」

「俺とマリが一緒に通るには、王族の魔術師の力が要るってっ」

ハーシエルが言った途端、カナメが渋い顔をしたのが、塚を囲むように設置された松明

にはっきりと照らし出された。

「……しょうもない嘘を……」

「えっ？　嘘っ？」

「王族の魔術師でなくとも、普通人を連れて魔法陣を通るのは可能だ」

片眉を上げて、ハーシエルはチカゲを振り返った。

一緒に行きたい一心の嘘がばれて、チカゲはヒノワの王子に手を合わせて謝った。

「ごめんなさいっ！　でも、どうしても来たかったのっ」

「……ほんと、しょーもない……」

「ところで、私は何時まで内輪揉めに付き合えばいいのかな？」

塚の先に腰掛けたパルスタードは、のんびりと言った。

チカゲとマリ、それにハーシエルが、事態を思い出して飛び上がる。

「てっ、てめえっ。なんとここで呑気に観察してるなっ」

「心外な。勝手に君達が揉め始めたのだよ。私のせいじゃあない」

まあ、気が付いてくれたようだから、と、パルスタードは掌をチカゲ達に向けた。

「では、攻撃させて貰おうか」

ストップ、と、魔術師が呪文を唱えた。

これは四大要素とは別種の、防御や遮断の魔法などと同系の無形系呪文と呼ばれる魔法で、掛かれば敵の動きを止める効果がある。

明らかに自分達を捕らえる積もりと気付いたチカゲは、相手の呪文を無効にする魔法を発動させた。

「カウンター・ストップっ！」

幸いなことに、と言うべきか、四大要素の魔法の解呪呪文デスペルとは違い、チカゲは

無形系呪文を無効にする反対呪文は、比較成功率が高い。

常人には見えないが、飛んで来たパルスタードの魔力が自分の魔力と空中でぶつかり、
相殺されるのがチカゲには見えた。

必死で唱えた呪文が上手く行って、チカゲはほっと胸を撫で下ろす。

「ほう。少しは上達したようだな。暴走王女」

「しっつれいなっ！」

チカゲは力一杯怒鳴った。

「私だって、これくらいの魔法は使えますっ！　バカにしないでっ！」

「それは失礼」

パルスタードは余裕の笑みを浮かべると、浮遊の魔法で中空に立ち上がった。

「冗談はこれくらいにして、では本気で掛かせて貰おう。殿下方も退屈なさっておられるようだ」

「んだとっ？！」

トシヤが気色ばむ。今にも突進しそうな彼を、カナメが無言で制した。

二人の様子を笑いながら、パルスタードは魔法を発動した。

「？？サンダー・スピア」

途端、パルスタードの頭上に稲妻を内包した巨大な球が浮かび上がる。

サンダー・スピアはその名の通り、槍状になった稲妻が広範囲に落ちる魔法である。

チカゲは青くなった。薄曇りの夜空の下、急速に回転するあの球が炸裂したら自分では止められない。

「逃げてっ！」

叫んだ。が、兄達は動かない。

「何してるの兄上っ！ 逃げないと……」

「こっちへ来いっ、チカゲっ！」

ハーシエルが、彼女の手を強く引っ張る。

全速力で走り、北面隊に合流する。その刹那、球が割れ稲妻の槍が降って来た。

「そりゃあっ！」

トシヤが、テオドールの宝具である金の槍を頭上で大きく回した。槍全体から、金粉が

溢れる。金粉は味方を今しも襲おうとしている稲妻を、ことごとく弾き飛ばした。

パルスタードの魔法を防いだトシヤは、得意気に鼻の下を擦った。

「へへん。ざっとこんなもんだっ」

「凄い……。あ、そうか。兄上達の武器って、神々のものだもんね」

宝具が特殊なマジック・アイテムであることを改めて知って、チカゲはなるほどと関心する。

関心したのは、彼女だけではなかった。

「そうか。おまえ達の武器が魔力を帯びているのを、失念していた」

「そりゃそうかもね。前にご披露したのは、二千年も前だし？」

厳しい表情のまま、ハーシエルは相手の台詞に合わせておどけた。

「そうだな。では、武器の魔力が行使出来ない方法を取らねばな」

パルスタードは、端正な顔をぞっとするような笑みに歪めた。

「？？我が意に従い生まれ出よ。命無き闇の獣達よ。魔獣召喚」

開いた掌を、悪しき魔術師はぎゅっと握る。その途端、闇が振じれたようにチカゲは感じた。

次にパルスタードが掌を開くと、次々と闇の中から醜怪な獣が飛び出して来た。

大型の犬のような獣は、だが犬より断然巨大な牙を持ち、前足には鋼鉄と見える鋭い爪

を有している。

「死の犬っ！」

マリが叫んだ。

死の犬は、冥界を司る神々の一柱、死の女神の使いとされている。悪行の果てに死んだ者や、非業の死を遂げた者の魂を喰い、死の女神の元へ運ぶと言いつた。

松明に照らされてなお黒い毛並みを逆立て、炎の色の目でこちらを睨みながら、地の底から響くような唸り声を上げる犬に、さすがのアケノのつわもの達も後退りした。

「死の犬を呼び出すなんて……」

冥府の使い魔を使役する魔法など、見たことも聞いたことも無い。チカゲは恐怖にののいた。

学問好きで古代王国とその魔法にも精通しているカナメが、苦り切った表情で説明する。

「魔獣を呼び出す魔法は、現在は殆ど使われない精霊魔法の中の闇の魔法だ。古代から邪法と言われ、今では全て禁呪の筈だ」

「パルスタードおまえっ、禁呪をこっそり研究してやがったのかっ！」

ハーシエルは、背の刀を抜き放つ。

パルスタードは、暗い笑みを消さずに少年を見下ろした。

「そうだ。エルウィードの魔力の封印が解けない場合を考え、覚えたのだ。精霊魔法は現

在使用されている魔法とは体系が違う。従って、おまえ達には解呪出来ない」

「なるほどな」カナメは、魔獣を睨みながら鞘を払った。

「だが、如何に魔獣と言えど、宝具にはその牙、通用しない」

「やってみるがいい」

パルスタードの手が動く。「行け」という声と同時に、死の犬が一斉に襲って来た。

先頭の一頭がまず跳躍し、北面隊の中に突っ込んで来る。トシヤは、犬が着地する前に
槍を横腹に突き立てた。

しかし、犬はトシヤごと槍を引き摺ったまま、構える兵達に襲い掛かる。

「この……っ！」

踏ん張って、犬の動きを押さえるトシヤの背後から、ハーシエルが躍り出た。虎鐵を振りかぶると、一閃、死の犬の首を薙いだ。

犬は、甲高い泣き声と共に霧散する。

「姫様を頼みますっ！」

マリは近くにいた騎士と兵士二人にチカゲを託すと、カナメと共に次の一頭に向かって行った。

まずマリが三節棍で跳躍して来る犬の足を叩く、倒れたところを、カナメが斬り付けた。

しかし、魔獣は一度や二度の攻撃では倒れない。二撃、三撃と打撃と剣を繰り出し、漸く死の犬の姿が消える。

四人が奮戦している所とは別の場所で、残り三頭は騎士団と歩兵隊の中で暴れに暴れていた。

魔獣の牙は、騎士の胴鎧も歩兵の鎖帷子も、紙のように引き裂く。死傷者が、さして広くない広場を囲んだ路上に、たちまちの内に溢れる。

チカゲを庇った騎士と歩兵三人も、襲って来た犬の爪と牙で深手を負った。

すぐにチカゲが治癒魔法を掛けたので大事にはならなかったが、それでも彼等の周囲の仲間は今々と倒れて行く。

凄惨な混戦の中、チカゲは辛うじて攻撃を回避しながら手近の負傷者に治癒魔法を掛け続けた。

悔しいが、今の自分にはこれしか出来ない。

眼前に倒れて来た騎士の傷を癒し、ふと顔を上げた時。

チカゲは目を見開いた。

真正面に封印塚があった。

死の犬の牙を避け動き回っているうちに、何時の間にか塚の前に出てしまったのだ。

見上げると、パルスタードがまだ塚の上空に浮いていた。その身体が、淡く光っている。

魔術師の身体が光を放つのは、魔法を使おうとしている時である。パルスタードは、カナメ達が死の犬にてこずっている間に塚を破壊しようとしているのだ。

「パルスタードっ！」

チカゲは、立ち上がって叫んだ。パルスタードが、冷ややかな目を彼女に向ける。

「ほう、またおまえか。アケノの王女」

「塚を壊す気ねっ！ そうはさせないっ！」

くくっ、と、魔術師は小馬鹿にしたように笑う。

「魔力の制御の出来ないおまえに、私は止められないと、この前も言った筈だが？」

「こっ、今度は失敗しないわよっ！」

チカゲは、利き腕を前へ突き出し呪文の準備をする。

鼻で笑い、パルスタードは掌を天へと向けた。

「では、やってみるといい。??ファイアー・ボール」

振り下ろした掌から、炎の球が吹き出る。

先刻の、無形呪文の反対呪文は上手く行ったのだ。チカゲは気を落ち着けて解呪呪文を唱えた。

「デスペルっ！」

しかし、制御しようとし過ぎたせいか、彼女の解呪呪文は炎の球を消し去れず、球は塚から逸れただけだった。

「ええっ、どーしてっ?！」

焦るチカゲの前で、パルスタードは逸れた球を呼び戻す。炎の球は、今度は横から塚に激突するコースを取る。

自分の解呪呪文は、やはり効かない。それなら一か八か、失敗続きの別属性の呪文をぶつけるしかない。意を決してチカゲは風の魔法を唱えた。

「ウインド・エッジっ！」

??上手く相殺してっ！

祈る気持ちで魔力を放つ。鋭い刃のように回転しながら炎に迫る風は、見事にパルスタードの魔法を切り裂いた。

しかし。

先程とは逆に、今度は放出が大き過ぎた。風の刃は炎の球を両断した勢いのまま、封印した勢いのまま、塚に激突する。

「きゃああっ！」

悲鳴を上げたチカゲの眼前で、塚は爆音と共に瓦解した。

「ははははっ！これはっ、見事にお手伝い頂いた。礼を言うぞ、暴走王女」

声を上げて笑うと、パルスタードは丈長の上着の袖を翻し、闇の中へ消えた。

「……どーして？」

「またもやの大失敗に、チカゲは呆然と膝を付く。」

「あっちゃあっ！ やってくれたなっ！」

「やっと最後の一頭を片付けたハーシエルが、チカゲのところへやって来た。」

「跡形も無い塚に、盛大に溜め息をついた。」

「横目で見てたけど、思わず虎鐵を落っこしそうになったぜっ」
「槍を担いでやって来たトシヤが、片手で顔を覆って天を仰いだ。」

「ああもう……。何のために俺達ここまで頑張ったんだか……」

「まんまと奴の手に乗ってしまった、という感じだな」

「静かに、しかし冷たい声で言い、カナメは剣を鞘に納める。」

「……あにうえ……」

チカゲは兄の言葉に、改めて自分のしでかし事態の重大さと、腑甲斐無さを思い知る。

「猛然と悔しさが沸き起こった。」

「……もーやだっ！」

「悔しくて、情けなくて。」

「わっと泣き出した王女を、マリが抱き締めた。」

「姫様、そんなにお泣きにならないで下さい。姫様は頑張られたではないですか。ねっ？」

「頑張っても頑張っても、結果は最悪なものにしかならぬらい。」

「マリの慰めさえ辛くて、チカゲはお守役の革の胴着の胸元に顔を押し当てて、何時までも泣いていた。」

14. 寂しがり屋の魔術師

封印塚は騎士団と歩兵隊に任せ、チカゲ達は王宮へ戻った。

壊された封印塚以外は、すぐに宮廷魔術師達が行き、結界を張ったという。

ならば、もう今夜のところはパルスタードも動かないだろうと踏んで、カナメは自室へ、

ハーシエルは貴賓室へと引き上げた。

トシヤは近衛軍宿舎に泊まるといい、部下達と共に本殿を出た。

今日と昨日で一年分くらいの失敗の山を築いてしまったチカゲは、凹みに凹んで、風呂から上がるとバスローブのままぼったり寝台に倒れ伏した。

「姫様、そのままお休みになられると、お風邪を召しますよ？」

チカゲが生まれた時から仕えてくれている中年の女官長が、丸い顔に苦笑を浮かべつつ

声をかけた。

マリは側仕え専用の浴場へ、戦闘で汚れた服と身体を洗いに行っている。

無言で枕に頬を押し付けたチカゲは、今マリが居なくてちよっぴり良かったと思った。

あの優しいお守役が居れば、きっと酷く当たってしまいそうな気がする。

自分は全く何も出来なかった。やっても目茶苦茶な失敗だけ。対してマリは、立派にパルスタードの魔獣と渡り合った。

それに、マリは五体の神の依代である。けれど自分は、チナミの降臨に失敗した……。

マリと自分を比べても仕方無いのに、何故か比べてしまう。また自分を卑下してしまう。

そんな自分の現在の胸中が、チカゲは堪らなく嫌だった。

???どーしてなんだろう……

何がいけなくて、魔法が暴走してしまうのか。

ユリや焼跡の怪我人達に掛けた治癒魔法は、上手く出来たのに。
悩みながらのろのろと起き上がり、寝台に正座する。

「よっ、落ち込んでるかあ?」

突然声を掛けられて、チカゲはびっくりして入り口を見た。

「トシヤ兄」

「べこべこに凹んでるチカゲちゃんを、見学に来てやったぜえ」

近衛軍宿舎に泊まると言っていたのだが、戻って来たらしい。

軍服の上着を脱ぎ、黒のベストとズボンという軽装で、さも楽しそうに笑いながら入っ

て来るトシヤを、チカゲは力の無い目で睨んだ。

「ここはレディの寝室ですっ。こんな夜中に勝手に入らないでっ」

「はは。おまえがレディなら、女官長だって立派なレディだぜ?」
なあ?」

振られた女官長は、同意してよいのか分からないという表情で、

曖昧に笑う。

「何の用?」

「んー……」

トシヤは、焦げ茶の後ろ頭をポリポリと掻いた。

「言った通り。チカゲ凹んでるかなあ、と思って」

「思った通り、凹んでるわよ? 当たって楽しい?」

「楽しいってなあ……」

半ばヤケになったチカゲがトシヤに当たり始めた時。マリが風呂から戻って来た。

「ただ今戻りました。???トシヤ様、お出ででしたか」

よお、とトシヤはマリに手を上げる。

チカゲは、不思議に思った。以前なら、トシヤはマリにそんな挨拶はしなかった。

これも、それぞれ五体の神の依代となったせいかな。

二人への羨望と嫉妬で、ますますヤケになり掛けたチカゲに、トシヤが言った。

「おまえが落ち込んでんのは、多分、封印塚をぶっ壊しちゃったからだろ。ったくよお、

ほんと、無茶してくれたよな」

彼は溜め息をつくど、寝台の端に座った。

「チカゲ、明日おまえ王宮から出るな」

「……え？」

「封印塚をぶっ壊したのもそうだけど、おまえはまだ、魔術師として半人前だ。しかも、

魔力が半端じゃねえから厄介。はっきり言って、一緒に来られてもお荷物なんだよ。

けど、俺達が怒ってんのは、その話じゃねえ。おまえが勝手に、自分から危険に飛び込

んで行くことだ。まあ、あれは確かにハーシエルも悪いんだが、カナメが来るなって言っ

たのに、西の封印塚まで来やがって……。おまえがパルスタードの真ん前に現れた時は、

心臓が口から飛び出そうになったぜっ」

言われて、チカゲは俯いた。

アクシデントであったものの、あれは本当に無謀だったと、自分でも思う。

だが、十分反省もしているのだから、今更また言わなくてもいいではないか。

悔しさが更に胸に溢れて、チカゲはバスローブの膝の辺りを強く握る。

従妹の姫が涙を堪えているのに気が付いたトシヤは、マリに言われる前に謝った。

「悪い、言い過ぎた。けどな、俺はおまえに危ない所には行って欲

しくねえんだ」

「……………」

「ちゃんと自分を守れる力があるなら、俺もここまでは言わねえ。けど、何遍もしつこいようだけど、おまえにはまだ、奴と戦う力はねえ。だから、矛盾してつかもしれないけど、

俺は今、おまえにチナミの依代になんかなって欲しくねえ」

「トシヤ様……………」

マリが、意外だというような声を上げた。

「チナミの塔におまえが行った時、チナミが降臨しないってんであんなだけ怒っという変だっと思うかもしれないけど……。俺は、今のまま、おまえにこの危険な戦に参加して欲しくない。それは多分、カナメも同じだ。

うん。チナミじゃねえけど、危険に晒したくねえんだ。だから？」

聞いていて、チカゲは無性に腹が立った。と同時に、自分の別のところがどんどん冷静になって行くのも感じる。

確かに自分は半人前だ。このままでは、トシヤの言う通り足手纏いになるばかりで、何も出来ない。

誰も救うことも出来ない。

だが、だからと言って何もしないで、王宮に隠れていいのか？何も出来ないと言っても、他の誰より魔力はあるのだ。それをどうにか使う努力をしないで、どうするのだ。

そうだ、落ち込んでいる場合ではない。この魔力を使う手を考えねば。

「チカゲ？」

怒り出すでもなく、否定的な話を黙って聞いている従妹に、トシヤは少し不安になる。

「おまえ、人の話ちゃんと聞いてっか？」

「聞いているよ。私が王宮から出ない方がいいっていうんでしょ」

「うん。……まあ、そういうことだ」

いつもとは別人のように聞き分けのいいチカゲに気味悪さを感じて、トシヤは半端な笑

みを浮かべた。

「けど、それでパルスタードが倒せるの？」

「……あ？」

チカゲは、表情を厳しくすると、近衛軍軍団長の従兄に向き直る。

「パルスタードは、物凄い魔力の持ち主だよ？ それに、今夜分かったように、禁呪の闇

の魔法まで使える。そんな相手に、チナミ様抜きで……、魔術師抜きで戦えるの？」

トシヤは、表情を陰しくした。

「それはっ、これから作戦を立てるっ。半人前のおまえが口出しすることじゃねえっ！」

「半人前だって、私は魔術師だよっ！」

チカゲは詰め寄った。

「魔法の怖さは、魔術師が一番良く知ってるの。私だって少しは使えるもん、パルスター

ドがどんなに恐ろしいか、トシヤ兄なんかよりずっと知ってるっ。

……心配するなら、も

う一緒に戦いに行きたいなんて言わないよ。でも、だからって王宮で縮こまってるなんて

っ、絶対嫌っ！」

「姫様……」

マリが、心配そうにチカゲの顔を覗く。

チカゲは続けた。

「何かしたいのっ。みんなを助けたいのっ。そう思うのも、ダメって言うのっ？」

「……分かったよ」

トシヤは、真剣なチカゲに、降参と手を挙げた。

「おまえの頑固さに完敗。明日カナメと、チカゲが出来そうなのがあるか、話してみるぜ」

じゃあな、と言って、トシヤは腰を上げた。

「ありがとう、トシヤ兄」

トシヤは片手をひらひらと振って、チカゲの部屋から出て行った。

「本当はお優しい方なんですよ、トシヤ様は」

マリが、しみじみと言った。

「いつも周囲の人々を気に掛けてらっしゃいます。性格がまあ、ああいった、おおらかな

方ですから、そんな風に見えないでしょうけれど……。テオドールが、どうしてトシヤ様

を依代に選んだのか、分かる気がします」

友愛の神、と呼ばれるテオドール・イズモは、ユキナガの依代であるハーシエルによれば、

とても温厚で穏やかな人柄であつたらしい。

それだけ聞くと、トシヤとは全くの正反対である。だが、友を愛し互いの絆を守ろうと

する気持ちが強いというところは、確かに共通している。

神々は、無差別に依代を選んでいる訳ではない。

何処か自分に似た性格の人間を、必ず選んでいる。カナメがツバサの依代となった時、

ハーシエルが「やっぱり」と納得していたのでも分かる。

チカゲはふと、自分とチナミの共通点を考えてみた。

完璧主義で神経質で温厚、とハーシエルはチナミを評していた。自分とは一致するところ

ろが無いと、チカゲは思った。

しかし、そのすぐ後で、ハーシエルはチカゲにチナミの降臨を試してみろと言った。

それは何故だったのか。

「ねえマリ、チナミ様って、どんな方？」

不意に聞かれ、マリは少々驚いたように目を見張る。がすぐに、笑顔に戻した。

「そうですね……。周囲の人々に気を使われる方でした。ツバサは八方美人だと言ってま

したが、私はむしろ、寂しがり屋なんだと、思っていました」

病弱で、一人で自室に居る時間が多かったチナミ。

聞いた途端、チカゲの脳裏に、ヒナタの王宮の窓から、外で遊ぶ幼馴染み達を羨ましそうに眺める、小柄な少年の姿が浮かんだ。

一緒に遊びたくても、彼はその輪には入れなかった。

だからと言って、外の子供達を恨む気持ちは無かった。現実一緒に遊べなくとも、幼

馴染み達は十分、彼の空想の中では仲間として遊んでくれた。

そして遊ぶ子供の風景は、いつしか彼の心の中の宝物になった。

だからチナミは、後に仲間が出来ても周囲に気を遣い、自分一人で何も彼も背負おうとしたのだ。

何も失いたくなかったから……。

「姫様？」

マリに呼ばれて、チカゲは我に還った。

「どうかなさいましたか？」

「あ？？。ううん。ねえマリ、私とチナミ様って、その……、共通点って、あると思う？」

「そうですね」

マリは小首を傾げて、少し考える。

「寂しがり屋なところがおりなのは、似てらっしゃいますね」

「……そっか」

やっぱりそうなんだ。

自分も、どんなにカナメにからかわれても、トシヤにバカにされても彼等から離れない

のは、一人にされるのが嫌だからだ。

いいや、彼等を好きだからだ。

「チナミ様も、きっと、周りの人が好きだったんだろうね」

チカゲの呟きに、マリは「ええ」と頷いた。

「そうだと、思います。自分はどうかろうと、周りの親しい人々を絶対傷付けまいとなさ

いましたから……」

ふと、マリの瞳が曇る。それが、在りし日のカレリア・ヒヅキの想いを追っているのだと、チカゲは納得した。

「私、明日もう一度、チナミ様の塔に行つて来る」

マリは、驚いた顔をする。

「それは……。先程トシヤ様が、お止めになった方がよいと……」

「うん」チカゲは薄く笑った。

「言つてたよね。でもね、私も、チナミ様と同じ。みんなを失いたくないから。もちろん、

チナミ様がまた私じゃ嫌だつておっしゃったら、素直に諦める」

チカゲははあ、と大きな溜め息をつくど、ばたん、と寝台に背中から倒れた。

「どーして私なんだろうーな」

「は？」

「だって、兄上に、もし私とおんなじくらいの魔力があつたら、もっとずっと前に魔法を

ちゃんと使えるようになってると思う。でも、現実兄上には魔力は無く、持つて生ま

れたのは、バカでドジな妹の私」

カナメは理不尽だと思っっているかもしれない。が、魔法の才で兄から面と向かって嫌味を言われた覚えはない。

もしかしたら、執拗にからかうのは、カナメなりの嫌味なのかも知れないが。

「神々は、その人に何か一つは必ず、祝福をなさると言います」
部屋の隅でそれまで黙って繕い物をしていた女官長が、静かな声で言った。

「カナメ様は、並外れて明晰な頭脳をお持ちです。それが、神々からの、カナメ様への贈り物なのでしょう」

「二つは無いってこと？」

「そうですねえ。おつむが宜しい他は、カナメ様は巧みな剣士でもいらっしやいますねえ」

「やっぱ、二つか……」

ちよつと羨ましいという顔をしてしまったチカゲに、マリが苦笑した。

「カナメ様の二つ分に、姫様の魔力は匹敵致しますよ？」

「そっかなあ？」

そうですよ、とお守役と女官長が口を揃える。

「カナメ様には、明晰な頭脳と剣の腕前を、姫様には、並外れた魔力を。神々はちゃんと

ご兄妹に均等に祝福をお与えです。ですからもう、ご自分を卑下なさるのはお止め下さい」

二人に言われ、チカゲはそうだな、と思い直した。

「うん。ごめんなさい」

「さあ、もうお休みなさいまし。また明日も忙しゅうございましょう」

女官長が、どっこいしょ、と丸い身体を椅子から持ち上げる。

お休みなさいませ、と挨拶し、チカゲの寝室を出て行った。

「では、私も」

「マリ」

チカゲは、文机の上の手燭を取ったお守役を呼び止めた。

「明日、私が『光の塔』に行くってこと、兄上達には内緒にして」
「分かりました」

微笑んで、マリは一礼した。

15. 再びチナミの塔へ

もし、自分が神々から祝福されてこの魔力を貰ったのなら、きっといつかはきちんと魔法をコントロール出来る。

そのいつか、を、今日にしたい。

チカゲはそう思いながら、翌朝早く、チナミの塔へと向かった。

塔のある庭園は、夏の早朝の陽を浴び、木の葉がきらきらと輝いている。青々とした下

草をブーツで一步一步踏み締めながら、チカゲは塔へ近付いた。

チナミの塔の前には、護衛の兵三人と、魔術師見習いの若者が立っていた。

彼等はチカゲが一度塔へ入ったのを知っていたので、再び挑戦に来た王女に、何の疑問

も抱かず綱を解き道を開けた。

塔は、一度目と変わらず、淡い卵色の光を発していた。

チカゲはその前へ立つと、大きく深呼吸する。そして、そっと白い壁に指を伸ばした。

細い指先は、淡い光に触れるや、するり、とその中へ入った。

驚いて、チカゲは指を引っ込める。

一度目の時は、身体ごと中へ引かれるように入っただが、今度は全く吸引力は無い。

自分の意思で入って来いというような『光の塔』に、チカゲは意を決して進んだ。

ぶつかるときに光に身体を投げ出す。ふわり、と卵色が全身を包んだかと思った瞬間、

チカゲは塔の内部に入っていた。

中は、前に来た時と少し様相が変わっていた。白一色に少し色があつたたげの内壁に、

薄い赤や緑の色彩が浮かんでいる。

チナミの心の変化が、このような色を作っているのだろうか。

不思議に美しい色彩に束の間目を奪われていると、小さな光が目の前に集まり始めた。

光の集合体は、すぐにチナミに変わる。

チカゲは、二度目の謁見になる魔術の神に、王女らしく優雅に膝を折る。

「また、会えたね」

チナミの穏やかな声に、チカゲはそっと膝を上げた。

「もう一度、チナミ様に降臨を願おうと思って参りました」

「うん……。分かってる」

チカゲは、落ち着け、と心の中で唱えながら、先を続けた。

「昨夜、パルスタードが南と西の封印塚を破壊しました。その、結果的には、西の塚は、

私が壊しちゃったんですけど……。でも、南の塚が壊された時、パルスタードは周囲の民

家も壊して、多くの民が犠牲になりました。

私も、兄達と共に塚の様子を見に出掛けて、その多くの怪我人に少しでも役に立てば

と魔法を使いました」

「うん。カレリアが近くに居たから、それも知ってる」

「あんなに大勢の人々が怪我をして苦しんでいる姿を見るのは、初めてで……。とっても

怖かったし、悲しかったです。あんな様子は、二度と見たくないし、誰にも苦しい思いを

して欲しくない。私、みんなを守りたいんです。だから」

私を依代にして下さい、と言おうとして、チカゲは思わず言葉を止めた。

チナミの、チカゲを見詰める若草色の瞳が、微かに揺れている。不意に、昨夜のトシヤの言葉がチカゲの頭を過ぎった。

「チナミと同じ、おまえを、危ない目に遭わせたくない」
チナミは周囲の人々を守りたいが故に、たった一人で戦おうとしたと、マリが言っていた。

その決意に、トシヤの言葉に、自分は打ち勝たなければいけない。ただ、漠然とみんなを助けただけでは、チナミの翻意を促すのは、難しいだろう。

ならば。

「私……、私っ、自分のことはいいんです。たとえ相打ちになっても、絶対、エルウィー
ドを封印したい。いえっ、封印してみせますっ。今度こそ絶対出られないように、しっかりと。ですから、どうか、私にお力をお貸し下さいっ！」

チカゲは、赤金の髪を振り回すように、勢い良く頭を下げた。

今の自分には、これ以上言葉が見付からない。上手く伝えられたとは到底思えないが、

何とかチナミが汲み取ってくれれば。

だが、ダメなら、これで諦める。

決意を頭の中で繰り返しながら、チカゲはじっと、チナミの声を待った。

とても長く感じられた数秒後、チナミが静かに言った。

「……自分の身を犠牲にしても、みんなを守りたいって、チカゲはそう言うんだね？」

「はいっ」確認されて、チカゲは即答する。

「とても辛いことだよ？ 分かっているの？」

チカゲは、顔を上げた。憂いに満ちた、美少女のようなチナミの面を見詰め、彼女はき

っ、と眼差しをきつくした。

「でも、チナミ様もなされたではないですかっ」

チカゲの反撃に、チナミは目を見開く。

「誰にも頼らずに、エルウィードを倒そうとしたと、マリ……、いえ、カレリア様からもお聞きしました。テオドル様やユキナガ様も、そうおっしゃってましたっ。そのチナミ様を、私は手本としたいのですっ！ 力不足は、前回も申しました。それでも、私はみんなを助けたいのですっ！」

最後は足を踏み鳴らしそうな勢いで、チカゲは叫んだ。自分に出来ることは、全力でやりたい。険しかったチナミの顔が、ゆっくりと笑みを掃いた。

「思った通り、頑固な姫君だね、君は」

チナミが、白い手をチカゲの方へと伸べる。チカゲは、思わずその手を取った。

途端。

チナミの身体が光となり、チカゲの中へと溶け入る。

自分の中に吸い込まれるチナミに、チカゲは慌てて己の周囲を見回す。

「あわわっ！」

『チカゲ』

チナミの声が、頭の中で響く。

『君は分かっていたいなかったかもしれないけれど、僕と君は、もうずっと前から融合していたんだ。……君は僕の意識を、ずっと感じていた筈だ』

「え……？」

思わぬ言葉に、チカゲは驚く。

『君は、僕の夢を見た。『褐色の塔』の封印をパルスタードが解いた日に。更に、君は僕の意識を感じた。昨夜マリと話していた時に』

そういえばあの時、チカゲにははっきりと窓辺から外を見詰める少年が見えていた。そ

れは、少年を外から見たのではなく、窓ガラスに移った寂しげな顔を、見ていたのだ。

あれは、幼い日のチナミだったのだ。

そして、感じていたのは、その時のチナミの感情だ。

『君は僕の依代だ。ずっと前から決まっていた。そう、君が生まれた時から、多分』

「チナミ様……」

『避けていたのは、僕のわがままだ。それは、今も変わらない。本当は君を、辛い戦いに』

向かわせたくない。それだけはチカゲ、どうか覚えておいて』

「はいっ」

チナミの優しさが、依代となったことでより一層強く感じられた。何時の間にか、手の中に一本の杖が握られていた。

チナミの宝具である。

チナミの信頼の証である金色の魔法の杖を、万感の思いを込めて、チカゲはぎゅっと

胸に抱いた。

塔から戻ると、チカゲの部屋にカナメ達が集まっていた。

「『光の塔』へ行ったって？」

開口一番、兄に問われて、チカゲは神妙な表情で「うん」と頷いた。

「マリから、聞いたの？」

「いや。聞かなくても依代なら分かる。……チナミが降臨したな？」

「うん」チカゲがチナミの宝具である黄金の杖を見せると、ハーシエルが拳を突き上げて

「やったっ」と叫んだ。マリも手を打って喜ぶ。

トシヤは、渋い顔で後ろ頭を掻いた。

「ったく、あんだけ行くなって、言ったのによっ」

「うん、ごめん」

「トシヤの気持ちも分かるが、決まっていた事柄だ。先延ばしにしていたのは、チナミのわがままだ。そうだろ？」

頷くチカゲに、トシヤは「ちくしょう」と苦笑した。

「けどよ、チナミの依代になったからって、チカゲのノーコンが治るって訳じゃねーだろ

？ その辺は、どーすんだよ？」

「やってみなきゃ分かんないでしょっ！」

チカゲはむっ、と、頬を膨らませた。

「チナミ様に色々、教えて貰えるし。私も頑張るし？」

「ふーん、今までだって、頑張ってたんじゃないの？」

「もっと頑張るのっ！」

長身の従兄の方へ、小さな顔を突き出して、いーっ、と歯を出したチカゲに、ハーシェ

ルが吹き出す。

マリとカナメも苦笑した。

「さて。五人全員揃ったところで、では作戦会議をするか」
カナメの提案に、皆が頷いた。

16. 封印塚、再戦1

朝はあんなに良かった天氣が、昼に近付くにつれ、どんどん悪くなっていた。

空には暗雲が広がり始め、南風に代わり、北からの冷たい風が吹き出す。

チカゲ達は、作戦会議室として宮廷魔術師の執務室を借り受けた。ここは元は魔術師長補佐であったパルスタードが使用していた部屋で、彼が掴まった一昨日以前のままになっている。

パルスタードの私物も幾つか残されていたが、そこからは、彼が潜伏しそうな場所の手掛かりなどは何も見付からなかった。

「……遅いね、トシヤ兄」

持ち込んだ卓に乗った、すっかり冷えてしまった一人分の昼食を見て、チカゲはぼそりと言った。

トシヤは話し合いの最中、大門で市民が暴れているとの報告を受け出動した。近衛軍軍団長でもある忙しい身の彼に、チカゲは少し同情した。

「大変だよね。あっちもこっちもじゃ」

「仕方無い。一応トシヤは軍人で、国から祿を受けているのだから。本人もこういう事態を覚悟していたし」

「ま、パルスタードさえ掴まえちまえば、こっちのもんだしな」
食べ終わったプティングの皿を、ハーシエルは脇に退けた。その皿をチカゲはワゴンに乗せる。

「しかし、パルスタードは一体、何処に潜伏しているのでしょうか？
紅茶のカップをソーサーに戻し、マリはカナメを見る。

「トシヤが、近衛軍直属の諜報隊を市内に放っていると言っていた
が……。今のところ何も掴めていないようだな」

「魚は網には掛からない、と」
ハーシエルは立ち上がって伸びをする。

「ま、さっきの結論通り、待つしかないんじゃない？ 奴は必ず、
残り三つの封印塚に
手え出すって」

王宮の内外の結界が緩まない限り、パルスタードは『褐色の塔』
第五の封印には近付けない。

「奴はまだ、チカゲがチナミの依代になったのを知らない。知られ
ないうちに捕らえられ
れば、こちらに十分な勝機がある」

カナメが、ティーポットから残りの紅茶を自分のカップに注ごう
と手を伸ばした時。

扉が素早く開き、トシヤが入って来た。

「お帰り、トシヤ兄」

「おや？ 雨降って来た？」

彼の軍服が濡れているのを見付けたハーシエルが、窓の外へ目を
移す。

トシヤはそれには答えず、大股でカナメの側へ寄った。

「パルスタードが現れた。北だ」

五人はすぐに、執務室の隣にある魔法陣の部屋へと入った。そこ
は封印塚に移動するた
めだけの部屋なので、しっくい塗り固められた三方の壁には、短

い呪文が、扉も含めた
四方それぞれに書かれていた。

「うわっ、あっちーっ」

窓が無いため、夏の気温上昇を通気で解消出来ない部屋は、黴臭
さと、むっとする湿気
が充満している。

「おえっ。早くしないと窒息するぜっ」

長い軍服を着ている上に雨に濡れたトシヤは、蒸し暑さに気持ち
悪くなって口を片手で
覆う。

チカゲは、行く先の北側の呪文を確認して、魔法陣に戻った。

「大丈夫。すぐに着くよ」

「まあた、パルスタードの真ん前に登場しちゃったりしてな」

西の地特有の襟高の服を着ているハーシエルも、暑いのはトシヤ
に負けないらしく、し

きりに手で顔を仰ぎながら軽口を叩いた。

「じゃ、全員魔法陣に入って。あ、片足だけでも大丈夫だから」

チカゲは、皆が魔法陣を踏んでいるのを確認すると、呪文を唱え
た。

「北の扉を開けよ。オープン・スペル」

瞬間、景色が流れる。何度潜っても慣れないスピードに、気持ち
悪くなってチカゲは目
を閉じる。

倒れそうな程平衡感覚が狂い、しかし何とか踏ん張って治まるま
で待っていると、すぐ
隣でマリの声がした。

「パルスタードっ！」

チカゲは目を開けた。

そこには、ハーシエルが言った通り、パルスタードが立っていた。
ただし、この間とは位置が逆転している。

パルスタードは、王宮を取り囲む二の濠を背にして立っていた。北の封印塚はその外側

の三の濠に面して作られている。

塚の周囲には、近衛軍第三軍と、宮廷魔術師五人がいた。

再び眼前に魔法陣を使って現れたチカゲ達に、パルスタードはさも面倒臭そうに顔を顰めた。

「また、おまえ達か。昨夜は見逃してやったものを、今度は殺されに来たか」

「俺らが殺されっかどうかは、戦ってから言えよっ！」
ハーシエルが、啖呵を切って剣を抜く。

雨粒が、刀身を伝って彼の手元に落ちる。

「ふん、威勢のいいことだ。だが、そんな玩具のような武器では、私は倒せないぞ」

パルスタードはすっ、と利き腕を前へ出した。その掌から、詠唱も無しに火の球が現れる。

「さあ、そこを退かなければ、皆丸焼けだ」

魔術師が、腕を前へと押し出す。火球が、回転しながら真っ直ぐに塚へと突進して来た。

大粒の雨さえものもしない火球は、見る間に巨大化しながらチカゲ達に迫る。

背後の兵が浮き足立つ。

「動くなっ！」

トシヤの大喝が飛んだ。と同時に、チカゲがチナミの杖を胸の前へ突き出した。

「マジック・シールドっ！」

普段のチカゲでは、絶対成功しない魔法防御の呪文が、見事なコントロールで発動され

る。魔法の効果による金の粉のようなものが、チカゲを中心に半円形に味方の上に広がる。

雨の中、きらきらと宙を舞う金粉は、触れた火球を炸裂させる。身に危害は無いものの、

あまりの眩しさに、カナメ達も兵も反射的に目を閉じた。

「ほう、チナミの杖を手に入れたのか。なるほど、チナミが降臨したか」

パルスタードはククっ、と喉の奥で笑った。

「面白い。魔法の制御が出来ない王女が、何処までチナミの魔力を発揮出来るのか。試させて貰おう」

パルスタードが再び魔力を放出するために、構える。

「させっかつ！」

ハーシエルが、全速力で魔術師に迫った。

虎鐵の白刃が、魔術師の手元を掠める。紙一重で避けたパルスタードは、小さな雷球を

ハーシエル目掛けて投げた。

その間に、トシヤがハーシエルの背後から走り寄った。西の国の王子が雷球を叩き落と

している間に、トシヤの槍がパルスタードに迫る。

飛翔の魔法で槍先を逃れたパルスタードは、彼等の後ろから第三弾として駆け寄って来

るマリを認め、舌打ちした。

「……面倒な」

彼は両掌を下へ向けると、小さく呪文を唱えた。

「我が魔力の元に形を現せ、土の傀儡よ。ゴーレム」

ぼこぼこという、鈍い音が足元から響く、何事かと動きを止めたチカゲ達の眼前に、巨

大な土の人形、ゴーレムが現れた。

土色の人形達はどれも寸胴で、脚より腕が長い。顔の造作は無く、僅かに中央に鼻らし

き隆起があるだけである。

「どっひゃあっ！」

ハーシエルが、自分とパルスタードの間に立ちはだかった、人の背丈の二倍はあるだろ

う巨大な土人形に目を剥いた。

「どーすんだこんなんっ?！」

彼より驚き怯えている兵士達は、皆一斉に逃げ腰になる。

パルスタードは、腰が引けた近衛軍を、高みから笑った。

「おまえ達には、丁度よい相手だろう?」

ゴーレムが、巨大な腕を振り上げる。予想よりも素早い動きに、トシヤもハーシエルも焦って飛び退く。

体術を使うマリは、咄嗟に巨大人形の腕をかい潜り、太い脚に蹴りを入れた。

「はっ！」

強大な神の依代の破壊力は、びくともしないかに思われた土人形の太い脚を粉々に砕く。

倒れるゴーレムを目の当たりにして、近衛軍の兵士達も喚声を上げた。

「なるほどな。脚か」

マリの戦法に感心したハーシエルは、次の一体には彼女の真似をして、身体を低くして脚を薙いだ。

切れ味鋭い虎鐵の刃は、一閃、土人形の脚を斜めに切り取り、ゴーレムは重心を崩してどうっ、と倒れる。

「へへん。どーんなもんだいっ！」

兵達のやんやの喝采を浴びて、ハーシエルは得意気に鼻の下を擦った。

「アホっ！ 浮かれてる場合かっ！」

トシヤに怒鳴られ、ハーシエルは振り返る。と、その目の先を死

の犬が跳躍した。

「げっ！ またかよっ！」

彼等が巨大な土人形にかかり切りになっている間に、パルスタードは次々と禁呪で魔物を召喚していた。

死の犬は塊になっていた近衛軍に飛び掛かり、兵士達は大混乱になる。更に、ゴブリン

という凶暴な小鬼を召喚し、死の犬に襲われる兵士に追い討ちを掛けた。

「ちつくしょうっ！ でけえの速えのっ、色々出してくれるじゃねえかっ！」

素早い動きのゴブリンにてこずりながら、トシヤは大声でグチを零す。

カナメも、死の犬とゴブリン二匹を相手に、かなり苦しい戦闘をしていた。

人間ではないもののとの戦いで戸惑う兵士に喝を入れたのは、第三近衛軍の軍団長ハナブ

サだった。

「何がなんでも、この化け物共を市街地に行かすなっ！ それがつ、近衛兵の気概だっ！」

軍団長の命令で、軍全体に気合いが入る。

襲い来る魔物を食い止めようと、兵達は必死の体で剣を振るった。正に死闘となり始めた状況を、だがチカゲは少し離れたところからじっと観察していた。

一刻も早く兄やトシヤ達を助けたいのは山々だった。が、自分が勝手に魔法を使えば、また飛んでもない結果しか導かない。

焦る心を押さえて、王女はじっと、頭の中に聞こえるチナミの声を聞いていた。

『今、魔法で仕掛けても、味方に当たってしまう危険がある。焦ら

ないで、とにかく待つ

んだ』

「……はい」

『機会が来たら、僕が合図する。そうしたら、パルスタードを捕らえる呪文を唱える。い

いね』

チカゲは、硬い表情でもう一度頷いた。

パルスタードは、乱闘になりカナメ達が封印塚から離れるのを待っている。

中空で様子を窺う魔術師を凝視しながら、チカゲは黄金の杖を両手で強く握る。

息詰まるような数分の後。

パルスタードが、機を見て封印塚の方へ移動して来た。

『今だっ』

チナミの声が聞こえた。

チカゲは、風の魔法の封印呪文を唱え始める。

蜘蛛の巣のように風の網を広げ相手を捌め取るこの魔法は、難しい上に詠唱が長い。

チカゲ自身はまだ覚えていなかった呪文は、チナミからの知識として脳裏に流れ込み、

彼女の口から一字一句変わらず滑らかに零れる。

あと少して呪文が完成という時。

パルスタードの移動に気付いたトシヤが、封印塚の方へ戻って来た。

17. 封印塚、再戦2

魔術師の掌には、塚を破壊するための雷球が乗っていた。

「野郎っ！」

トシヤは槍を逆手に持ち替え、上空のパルスタード目掛けて投げ付ける。

槍が己の方へ飛んで来るのに気付いたパルスタードは、雷球を稲妻の槍に変え、向かって来るトシヤの得物に投げ付ける。

宝具と稲妻は途中で出会い、稲妻は二つに裂け、一方が槍を叩き落とした。

しかし、裂けたもう一方は、進路を変える事無く真っ直ぐ飛び、トシヤの腹に突き刺さる。

「ぐっ……！」

「トシヤ兄っ！」

チカゲは、崩折れる従兄を見て、呪文の詠唱を途中で止めた。頭の中で、チナミが叫んだ。

『ダメだっ、止めちゃ！』

しかしチカゲには、その声は聞こえなかった。

束の間、頭の中が真っ白になり……次の瞬間、煮えたぎるような怒りが、腹の底から沸き上がった。

膨張する怒気は魔力の風となり、チカゲの長い髪を宙へ舞わせる。チカゲは、再び雷球を作り出そうとしているパルスタード目掛けて、攻撃魔法を繰り出した。

「ファイヤー・スピアっ！」

チカゲの掌から、炎の槍が生み出される。槍は一直線にパルスタ

ードへと走る。

パルスタードは、発動しかけていた雷球で、その槍を消した。

一撃目は消されると予想していたチカゲは、間を空けず、大きな魔法を仕掛けた。

「サンダー・ボムっ！」

サンダー・ボールより以上に大きな威力のあるこの魔法は、対象物を微塵に砕く力を持っていた。

簡潔にした呪文を叫び、チカゲは掌を前へ突き出す。渾身の魔力を込めて繰り出した。

が。

唐突に力が抜けて行った。

??なんでっ?!

驚くチカゲの目の前で、威力が半減した雷球が、それでもパルスタードに命中する。

魔法防御を示す銀色の光が、パルスタードの身体の周りで明滅する。

威力半減と、防御のお陰で腕に負傷する程度で済んだ魔術師は、しかしその直後、塚を

踏み台にして跳躍したハーシエルの剣を避け切れず、左脚を斬り付けられる。

「くっ……!」

腕と脚を庇いながら、パルスタードは瞬間移動の魔法でその場から消えた。

操る術者が負傷し力が途切れたためか、魔獣や魔法人形も瞬く間に掻き消える。

チカゲは急いでトシヤの元へと走った。

「トシヤ兄っ!」

先に駆け付けたカナメに抱き起こされたトシヤは、失血で蒼白な顔を仰向けている。

軍服は雨に重く濡れていて血の染みは分からない。が支えるカナメの、白いシャツの腕

が、雨でも洗い流せない程朱に染まっていた。

トシヤが死んでしまう。

口は悪いが、心の中ではいつもチカゲを心配してくれていた、優しい従兄が。

チカゲの全身を、みるみる不安と悲しみが支配する。

「……いや……」

チカゲは頭を大きく振り、後ずさる。

「チカゲっ！」

兄の鋭い声が響いた。

「何を惚けているっ！ 治癒魔法を使えっ！」

チカゲはびくんつ、と痙攣した。途端、恐慌状態に陥り掛けている神経が、正常に戻る。

トシヤの脇にしゃがむと、チカゲは掌を彼の腹部に翳す。詠唱を省いて魔法を発動させた。

「……治癒水」

白い光が手から溢れ、トシヤの身体を包む。癒しの水は服の中

にくまなく流れ、パル

スタードの雷の槍で貫かれた傷のみならず、他の戦闘で出来た傷まで全て治す。

大量に流れ出ていた血液は止まり、痛みが薄らいだ彼の呼吸が徐々に平常に戻った。

やがて、うつすらと目を開けた。

「トシヤ兄っ」

呼んだチカゲの方へ、トシヤは顔を向けると、まだ蒼白な面をくしゃりと歪めて笑った。

「よお……。奴、掴まえたか？」

チカゲは、黙って首を振る。目尻に溜まった涙が、雨と共に散っ

た。

「そか……」

「それ以上口を利くなっ。今、馬車を用意させる」

「待って」

チカゲは、カナメの袖を掴んだ。

「魔法陣、使えるから。私が運ぶ」

「ああ、そうだな」

冷静を装っていても、カナメも気が動転していたようである。

「手え貸す」

ハーシエルはトシヤの片腕を肩に掛けると、ゆっくりと長身を起こした。

カナメとハーシエルに支えられ、トシヤは漸く起き上がった。

「あーもー。ついてないなあ」

急にぼやいたハーシエルに、チカゲは「どうしたの？」と尋ねた。

「身長差だよ。ユキナガ本人だったら、テオなんかより全然でかつたのに」

「あ、なるほど」

チナミの記憶が流入しているので、チカゲはすぐに納得した。

生前のユキナガは、今のトシヤと同じ程の背丈の偉丈夫だった。

ハーシエルが背負っている長い刀をベルトから吊し、それでも鞆の底が地から数十センチ

チは浮いていた。

歩き出した彼等に残ろからついて行きながら、チカゲは、在りし日の仲間の記憶を辿る

チナミの思いを、一緒に噛み締めていた。

傷は塞がったものの、失血で貧血状態のトシヤは、王宮の貴賓室に運ばれた。

近衛軍宿舎には自室もあり、また傷病兵用の病院もあるが、チカ

ゲ達がいちいち行くに

は遠い上、魔術師の執務室からも離れるため王宮内の部屋を病室に選んだのだ。

「俺、こんな贅沢なベッドに寝た事ねえ……」

貴賓室の寝台の、大きな天蓋を仰ぎ見て、トシヤは目を丸くする。王弟の息子の意外な発言に、ハーシエルが思わず吹き出した。

「あんた、一応公子なんだろう？　だったら自分の館にこんぐらいのベッド、あるだろうが」

「ねえよ。俺ん家の親父はちょーケチでさ、『子供は贅沢はいかんっ！』つつって、俺も

弟達も、みんな一緒の部屋で普通の木のベッド。マット直すのも服片付けるのも、全部自

分でやってたし」

「ええっ？！　それって普通は侍従の仕事なんじゃ？」

自分も幼い頃は、平民の乳母の家に預けられて育ったと言っていたハーシエルが、すっ

とぼけて王子面で話しているのに、チカゲは首を捻る。

本当のことを言わないのは、大国ヒノワの面子があるからか？

しかし、そんな事情には、ハーシエルの性格からして頓着するとは思えない。

ハーシエルの真実を知らないトシヤは、更に子供時代の話が続けた。

「俺ん家、子供に侍従なんていなかったもんよ。そんなのは大人になって、しかるべき身

分を手に入れてから使えって言われた。もちろん、護衛は居たけど。な。っても、護衛兼武

術指南で、とっってもおっかねえおっさんだったけど」

「へえ」ハーシエルは、心底驚いている様子で相槌を打った。

よっぽどトシヤに教えてやろうか、とチカゲが口を開きかけた時。「しかし、どこの国でも似たようなこと、してんだな」

ハーシエルは、自分で話し始めた。

「俺も、ちっちゃい頃は乳母の家に預けられてた。っても、トシヤと同じ。乳母の旦那が、

俺の剣の師匠なんだ。やっぱめっちゃおっかねえオヤジでさ。下町に道場があつたんだけ

ど、周りの悪ガキ達と修行サボって遊びに行こうとすると、必ず見つかって、半日は説教

だったぜ」

「しかし、君は、ヒノワの王太子だろう？」

カナメが、信じられないという表情で尋ねる。

「大事な跡取りを、護衛も付けずに、しかも街中で養育するなんて

……。ヒノワの国王陛

下は、随分と剛胆な方なんだな」

半分厭味とも聞こえるカナメの言に、だがハーシエルは笑って答えた。

「伝統なんだ。ヒノワの。それに、俺をどうにかしようとしたって、師匠をまず倒さなく

ちゃなんない。そりゃ、ヒノワ広しと言えど、絶対無理だな」

「そんなに強えのか。おまえの師匠」トシヤが面白そうに肩肘を起こした。

「ああ。剣の腕も桁外れだけど、さっきも言ったように、説教の長いのも桁外れだったぜ」

「そっか。その点でも、俺の武術指南役と似てんなあ。……けど俺は、そのおっさんのお

陰で、とっとと近衛軍に入れたんだよなあ。ただの若様だったら、きつと今頃絶対女遊び

とか博打とかして、親父の財産食い潰すだけの、大バカ公子になつてたと思うぜ」

「そう言えば、トシヤ様は十三歳から近衛軍に入られたのでしたよね？」

マリーに聞かれ、トシヤは「ああ」と肯定した。

「俺がふらふらする質なのは、親父は見抜いてたんだよな。だから、悪い方へ転がる前に、

がんじ絡めにしとけて考えてたんだろ」

「なるほど。さすがは叔父上だ。自分の息子の悪癖は先刻承知だった訳か」

「……てめーに言われっと、何かハラ立つんだけどなっ、カナメっ」
マリーが苦笑し、ハーシエルは声を上げて笑う。

18. 二千年前の、真実

仲間の楽しげな声を聞きながら、チカゲは一人、バルコニーへと出た。

雨は漸く上がり、雲の切れ間から陽の光が下界へ注いでいた。その夏の長い陽もそろそろ、西へと傾き始めている。

まだ湿り気を持っている手摺に手を置き、地面に伸びた庭園の木の影に目を落とし、チカゲはそつと溜め息をついた。

??あの時、どうして力が急に抜けてしまったのかなあ……

『チカゲ』

頭の中で呼び掛けられて、チカゲははっとする。

「チナミ様」

『少し、話したいんだけど……』

「あ、はい」返事を返した途端、目の前が白い景色に変わった。

「あれ? 『光の塔』……?」

『うん。意識だけ、ちよつとここへ来て貰った』

声と同時に、眼前にチナミが現れた。

「先程、パルスタードへの攻撃の力を止めたのは、僕だ」

「チナミ様が?」

「チカゲが納得出来ないのは、分かってる。チカゲはあの時、パルスタードを殺そうとし

た。トシヤが……、目の前で仲間が倒されて、頭に来て。僕にもそういうことが過去に何度

度あった。エルウィードと戦っている時に」

「では、何故……?」

チカゲの心情が分かっているながら、止めたのか。

「うん……。その理由を、チカゲには知っておいて欲しくて、だか

ら、ここへ来て貰ったんだ。??エルウィードと僕が、血を分けた兄弟なのは、前に聞いたね」

チカゲはこっくりと頷く。

「これから話す事は、僕とユキナガしか知らない。

二千年前、僕はヒナタ国の王太子として生まれた。僕の母が第一王妃だったから、位の順番からそうなった。一方、エルウィードの母上は、ヒナタの王宮に行儀見習いとして来ていた下女だった」

当時のヒナタは、身分制度に加え、王侯貴族でも魔力の強い者の位が上位という、魔法封建国家だった。

エルウィードの母は、多少魔力はあったが、地方の農家の出という低い身分であったため、王の手はついたが妾妃として後宮には入らず、妊娠が分かった時点で国王から子供の身分の証しの品と金を少し渡され、里へ帰された。

王侯貴族が下女に手を付けるといのは今でもあることであり、それ故、王家の血筋は市井に掃いて捨てる程いる。

王の子とはいえ、父親の無い子供には違いなく、田舎では片親の子は冷たい目で見られる。

実家で息を潜めるように暮らしていた母子は、エルウィードが十歳になった時、彼の魔力が魔法学院入学に十分だと分かるや、逃げるように王都へと出て来た。商人の親戚を頼

りその人物を後見人として、エルウィードは魔法学院に入学した。入った途端、エルウィードはめきめきと実力をつけていった。魔

力は精神的なものに大きく左右される。それまで田舎で目立たぬように暮らしていたため、素質はあっても発揮

されなかった彼の魔力は、学院の専門の教授の指導を受けるや、あつという間に強大なもの

に変わった。加えて勉強熱心であったため、呪文や理論も凄まじい勢いで覚え、十四歳の時には並み居る先輩を押し退け首席になった。

その頃、やっと五歳になった王太子の守役兼遊び相手を、王宮では探し始めた。当時の

慣例として、魔力の強い王子や王女には、やはりそれを指導出来る、同等かそれ以上の魔力

を持った守役が付けられた。

しかしチナミの魔力は、魔法国ヒナタの王族でも稀に見る強さであったため、中々適任

者が見付からなかった。王宮では、通常貴族と騎士の子弟の中から選ぶ守役候補の枠を拡

大し、魔法学院からも候補を探した。それで、エルウィードに白羽の矢が立ったのだ。

「えっ？　ではエルウィードは、チナミ様のお守役だったのですか？」

「うん。十五の年まで、彼と僕はずっと、それこそ寝食も一緒だったんだ」

「え？？」　衝撃の事実、チカゲは一瞬言葉を失う。チナミは続けた。

「守役だった頃のエルウィードは、とても良い先生だったよ。分かり易く魔法を教えてく

れたし、身体が弱かった僕を、とても気遣ってくれた。僕はそんなエルウィードを、心か

ら慕ってた。後で、僕の腹違いの兄だと分かった時には、本当に驚

いたし、嬉しかった。

……でも、ある日突然、彼は変わってしまった。古くなり使われなくなった、宮廷魔術師の勉強室のある塔の地下に眠っていたひとつの水晶球オーブが、その後のヒナタの壮絶

な運命を決定したんだ」

水晶球に記録を残すという手段は、ヒナタより更に古い、古代王国時代には頻繁に行わ

れていた。しかし、人々の魔力が徐々に減って行く現在の大陸では、水晶球が情報集積装

置であることすら、忘れられている。

魔術師の塔の地下にあつ水晶球には、禁忌の大呪の情報が入っていた。

「それは、人間を作り出す魔法だった」

「人間をっ?! そんな魔法聞いたこと無いっ!」

驚愕に声を荒げたチカゲに、チナミは「そうだね」と頷いた。

「僕もあの日まで、そんな魔法があるなんて知らなかった。いや、

あの魔法は、知られて

はならない魔法だったんだ。

ところで、僕とエルウィードは当時、時々探検に出掛けた。行き

先は王宮内の、使われ

ていなかった塔や地下倉庫。それは、身体が弱くて普通の子のように外遊びが出来なかつ

た僕のために、エルウィードが考えてくれた一番楽しい遊びだった。暴れ回るのは出来な

くても、体調のいい時は歩くことは出来たからね。それに、王宮内なら、まずそんな危険

なところは無いし。

あの日も、僕達は例によって遊び半分で魔術師の塔の地下に忍び込んだ。天気の良い日

で、僕の体調も良かったから、医師も少しの冒険を許してくれたんだ。古い魔術師の塔に行くことになったのは、僕が言い出したからだった。だから僕はもちろん、いつもは先に下見に行くエルウィードもそこには入ったことが無かった。そこにあの水晶球があるなんて、二人共知らなかった。そして、悪い偶然は重なった……」

水晶球から情報を取り出すには、相当の魔力が必要だった。呪文が入っている場合は、その呪文を使いこなすだけの魔力がなければ、水晶球は何の情報も与えない。

人間創造の呪文は大呪だったが、エルウィードの魔力はそれを行うに十分過ぎた。同じく、チナミの魔力も。

「僕達は知らずに水晶球の中の呪文を発動させた。水晶球はまず、入っている呪文とその制約について僕らに伝えた。更に、水晶球から呪文を読み取った人間と制約についても、情報を蓄積していた。一番近い過去に、その呪文を知った人間は僕達の父、当時のヒナタ国王だった」

「それって……、もしかして……」

「大呪は、全容と概要に別れていた。概要だけ知るなら制約には縛られず、水晶球に名も刻まれない。けれど全容を水晶球から読み取るなら、ある制約を果たさなければならないようになっていた。それは、必ず一度は大呪を発動し、人間を作り出さなければならないという」

その制約を破った場合、術者は制約の呪いによって、二十年後、

必ず狂い死ぬ。

「どうして、あんな場所にあの水晶球があったのか、今でも分からない。ただ、あの頃か

ら、既に水晶球の中身を読み取れる程強い魔力の持ち主は減っていたから、宮廷魔術師達

も、あれが魔術書であるとは思わなかったのかもしれない。幸か不幸か、国王？？父上も

エルウィードも、水晶球から知識を引き出せる程魔力が強かった。

……水晶球に名を刻まれているということは、父上は一度は大呪を行ったということだった。

僕とエルウィードは、大変な秘密を知ってしまった恐ろしさに震えながらも、好奇

心に勝てなくて更に詳細を調べた。地下室にあった他の魔法書や日記のような書物を片端

から読み、ついに見付けてしまったんだ。父上が何時、誰を作り出したかを」

チナミは一度言葉を切った。自分の右肩を抱き、俯く。

辛そうな彼の表情に、チカゲは「もういいです」という言葉を、喉の辺りまで言い掛ける。

だが、チカゲが口を開けるより先に、チナミは話を再開した。

「父上が大呪を習得したのは、まだお若い頃だった。きっとあの時の僕達のように、面白

半分に地下室に入り、あの水晶球を見付けられたんだろう。でも、

僕達とは違い、父上は

全容を読み取ってしまわれた。それから十五年後、父上は制約に従って大呪を発動させた。

それが、僕達が水晶球を見付けた時から溯って、二十四年前だった。

その時、エルウィードは二十三歳、僕は十四歳だった」

「ま、さか、その……？」

「人間創造の呪文を発動するには、術者の血と、魔法を宿す女性の身体が必要だった。こ

れも色々調べている時に知ったんだけど、この禁呪は余程の魔力の持ち主でも七割は失敗する。人にならなかつたり、宿す女性が死んでしまつたり。

……地下室の魔法書の間から見付かった父上の走り書きに、女性の名前が書き込まれて

いた。エルウィードの母上の名が」

チカゲは悲鳴を噛み殺した。見開かれた薄緑の瞳を、チナミが見詰めた。

「そこまで記録があつて、ではどうしてエルウィードが僕の守役として王宮に入つて来た時に分からなかつたのかと、チカゲは不思議に思うだろう。

当時のヒナタでは、国からしかるべき身分を貰った者以外には姓が無かつたんだ。名前

だけなら同名の女性は大勢いる。それに加えて、エルウィードは親戚を保護者として学院

に入学していたので、母親の名は書類に乗らなかつたんだ。

僕は、これは何かの間違ひだと思つて、何度も調べ直した。父上が大呪を発動した当

時、他に同名の女性をお召しになつていなかったかどうかとか。……でも、日記を見ても

王宮の下働きの過去の名簿を見ても、エルウィードの母上と同名の女性は、その時居なかつた。

……全て間違ひないと分かつた晩、エルウィードは父上の寝所に忍び込んで問い詰めた。

何故自分の母親を選んだのか。どうして身籠もつたと知つた途端、母親を里へ帰したのか。

父上の答は、恐ろしかったから、だった。制約の呪いを信用せず

面白半分で大呪を覚え

たが、いざ期限の二十年が近付くと本当に狂い死ぬ気がして来て、
適当な下女を召し上げ

魔法で眠らせ、大呪を掛けた。その後本当に子を宿したと知って、
ますます恐ろしくなり

王宮を下がらせた、と」

「そんな……っ、無責任なっ！」

チカゲは、怒りに任せて声を荒らげた。

19．絶望と怒り

身勝手な父親に、エルウィードも、チナミも振り回されたのだ。

「うん。飛んでもない国王だったと、僕も思う。あれが自分の父親だったかと思うと、今

でも嫌になるよ。でも、事実を聞かされたエルウィードは、もっと酷い気分だったろう。

自分は、王の気紛れと保身のためだけに作り出された魔法人形だったと、彼は僕の前で泣

いた。??今でも、あの時のエルウィードの様子は忘れられない。

辛い告白をしながら、

彼は静かに涙を流していた。でも僕はまだ子供で……。彼を慰める言葉も分からず、助ける力も無かった。

それから数日後に、エルウィードは突然王宮から姿を消したんだ。二か月後、ヒノワと

の国境の町に現れた彼は、ヒナタを破壊する邪悪な魔術王に変貌していた」

そうして、ヒナタはエルウィードの魔力と魔法によって、何一つ生命が存在しない大砂漠と化した。

チカゲは、泣きながら俯いた。ただ無闇にエルウィードが、世界の破滅を望んだのだと、

ずっと思っていた。チナミと彼の間にそんな絆があったことなど、ついぞ考えもしなかった。

「……お辛かったんですね……」

涙声のチカゲに、チナミは泣くでもない、怒るでもない、複雑な表情を作った。

「辛くなかった、って言ったら、嘘になるな。ユキナガにも言われた。ああ、彼は僕の乳

兄弟だったんだ。だから、悪しき魔術師として、世界の破壊者となる前のエルウィードと

も面識があった。ユキナガもエルウィードと戦うことになった時、僕と同じように切なか

ったと思う。けれど彼はそんな言葉は一言も口に出さないで、ずっと僕を励ましたくれた」

ふわりと、頬に暖かいものが触れて、チカゲは顔を上げた。チナミの光の手が、彼女の涙をそっと拭っていた。

「君は優しい。そして仲間想いだ。だから、僕のエルウィードに対する気持ちも分かって

くれると思う。……僕は、どんなに熾烈な戦いをして、優しかった頃のエルウィードを

忘れられない。だから、彼を、彼の存在をこの世から消し去ることが出来なかった。今で

も、それは多分、僕には出来ない。例え、みんなから大甘だって言われても、ね……」

優しい兄の面影を、二千年経った今でもチナミは追い求めている。それは、病弱で孤独

な少年だった彼の、唯一の幸福な思い出からだ。

依代となり、チナミと意識を共有しているチカゲには、彼のそうした気持ち、痛い程

伝わって来る。

「分かりました。今度は殺そうとしたりしません。パルスタードを掴まえて、必ずエルウ

ィードの魂を封印します」

「ありがとう、チカゲ」

チナミが微笑む。と同時に、目の前の白い景色が薄れた。

「姫様っ?!」

マリの声が聞こえ、チカゲははっと我に還る。

「マリ……?」

「ああよかった。何度声をお掛けしても何のお返事も頂けなかったので、心配致しました」

「私……、ずっとここに居た?」

「いたぜ?」ハーシエルが、呆れた顔をする。

「ずっとここに立ってた。って、もしかして立ったまま寝てたのかっ?」

器用だなあ、と少年は苦笑する。

「違うって。ちょっと、その、チナミ様に呼ばれて??」

言い掛けて、チカゲはチナミの言葉を思い出す。

『この話は、僕とユキナガしか知らない』

ハーシエルは知っているかもしれないが、マリとカナメ、それにトシヤは知らないのだ。

急に黙った王女に、マリはまた心配そうな表情になる。

「また、チナミ様がおっしゃられたのですか?」

「あ、ううん。あー、その、パルスタードを上手く掴まえてくれって……」

ハーシエルの眉がぴくり、と上がる。マリは「そうですか」と肩の力を抜いた。

「ま、とにかく中へ入れよ。夏だっても、あんまり風に当たってんのも身体に悪いぜ」

「……うん」

頷いて、チカゲがトシヤの病室へ戻り掛けた時。

突然、地鳴りのような音と共に、床が波を打った。

「なに??」

またもやの嫌いな地震に、チカゲは急いでマリにしがみつく。

その場にしゃがんだハーシエルは、バルコニーの上空を睨み上げて舌打ちした。

「ちっ、こりゃあパルススタードの奴、俺らが言ってた通りにやりやがったかもっ！」

やや揺れが収まり掛けた時、伝令の兵が飛び込んで来た。

「大門の方向から、数多くのゴーレムが王宮に向かって進んで来ておりますっ！」

「ゴーレムっ?!」

チカゲ達は、王宮の正面門の楼閣へと走った。

楼閣は、正面門の上、門扉の左右に各二本ずつ聳えた塔で、その間には屋根付きの橋梁がある。この橋梁は、門に押し寄せる敵を矢や投石で攻撃するために作られたものだった。

正面門のすぐ前には王宮前広場と呼ばれる広い空き地があり、そこから三の濠の大門まで伸びる通りを大門通りといい、シノノメの主幹線道である。

馬車が五台横に並んで走れる幅の大通りを、巨大な土の魔法人形が王宮に向かって行進して来る。

茜の陽を背後から浴び、黒いシルエットとなったゴーレム達の巨軀が動く度に、王宮正面門全体が地震のように揺れる。

大通りからばかりではない。広場に通じる小路からも、ゴーレムは王宮へと向かって来る。

周囲の邪魔な建物を破壊し、逃げ惑う人々を塵でも払うように薙ぎながら、進んで来る。

ざっと五十はいる。口は無いので当たり前だが、無言で家屋を壊しながら進むその姿は、あたかも地獄の底から這い出て来た、巨大な悪魔である。

いや、悪魔の方がまだ暖かみがあるかもしれない。

夕食時で火の気もあった市内は、ゴーレムに破壊された建物から火事の煙がもうもうと上がる。

楼閣から見える範囲だけで十二、三か所は、煙と炎が上がっていた。

「酷い……っ」

王宮を正面に見て左の楼閣に上ったチカゲは、地震の揺れの恐さも忘れ、たちまち空を

黒く染める黒煙とゴーレムの群れに、怒りと悲しみを覚えた。

「パルスタードの奴、本格的にシノノメの破壊を始めたなっ」

「にやろうっ！」

怒って拳を握ったトシヤが、ふらついてカナメの肩に縋る。

「どーでもいいけど、どーして起きて来たんだよっ？」

咎めるハーシェルに、トシヤはむっとする。

「ああっ？、この状況で一人でベッドに転がってろってのかっ？！」

「貧血でふらふらだろーがっ！ 使いモノにならないのが一緒に居ても、邪魔なだけだったのっ」

「てめーなあ……っ」

二人は、顔を近付けて睨み合う。が。

「血の気の多いのもこの戦況に不向きだな。口喧嘩を止めないなら、どっちもこの場から退場させるぞ」

氷の魔法よりも冷たいカナメの声音に、すいません、と二人は反省して縮こまった。

その間も、ゴーレムの行進で起こる地響きは続く。

正面門が開き、第三近衛軍と第四近衛軍が出撃した。

騎馬は使わず、徒歩で出た彼等は、昼間カナメ達がやったようにゴーレムの足下を狙っ

て走り寄る。

士気高揚の怒声を上げ、パルスタードのおぞましき兵に迫る近衛兵達を、ゴーレムの列に隠れていた黒い犬の群れが襲った。

すっかり悪しき魔術師の飼犬と成り果てた死の犬は、その速さで王宮前広場に出た兵士に次々と飛び掛かり、鋭く長い牙で易々と金属製の胴鎧を噛み裂く。

瞬く間に、王宮前広場に死傷者の山が出来る。

出撃した兵の大半を失い、軍団長ハナブサは止む終えず退却の号令を掛ける。

敗走する兵を追う死の犬は、その勢いのまま正面門へと迫った。

間一髪、生き残った兵達が正面門の内側へと逃げ込み、門が閉じられる。門内へ入れな

かった犬共は、恨めし気に咆哮し後ろへ下がった。

助走を付け、跳躍を始める。

「やべえっ、こっち来るぞっ！」

楼閣を超えようと殺到する魔獣は、だが魔術師達があらかじめ門扉とその周辺に張って

いた結界に全て引っ掛かった。

「プロテクト・シールド（物理防御魔法）かっ！」

ハーシエルは、眼前で次々と弾かれて落ちる魔獣に、拳を振り上げて喜ぶ。

「こいつはすげえっ！」

プロテクト・シールドは剣や打撃といった、物理的な攻撃を防ぐ魔法である。攻撃のみに反応し、門を開閉するような動作には無反応である。

通常は一打撃受けると消滅するが、何人もの術者が繰り返し幾重にも張ると、かなりの回数の打撃を跳ね返す。

シノノメの王宮は、何世代もの宮廷魔術師が、万一の時に備え、魔力防御魔法と共に、

物理防御魔法もずっと掛け続けている。

しかし、何度も攻撃を受ければ、その分だけ効力も減って行く。

20. チナミの魔力

「この数だ、そう長くは持たない」

美麗な面を厳しくするカナメを、トシヤは横目で見る。

「出るか？」

「しかし、今、我らが王宮を離れる訳には行かないのでは？」

マリは、護衛の兵の手職の明かりに浮かぶ二人の横顔を見る。

「『光の塔』の結界が心配です」

「確かに。今俺らが出るとなると、塔の結界が弱まる。正にパルス
タードの思う壺だ」

ハーシエルが、歯噛みする。

「けどこのまんまじゃ、どっちにしてもシノノメは壊滅だぜっ」

不意に、チカゲの頭の中でチナミの声が響いた。

『サンダー・アロー（雷矢）なら、全部の敵を一遍で倒せるかもしれない』

雷矢は、風の魔法の中でも上級に属する呪文で、術者の魔力が強ければ、一度に広範囲

に稲妻の矢を降らすことが出来る。しかも、呪文の中に特定の目標の名を入れておけば、

その物（人）を狙って魔力を集中させるのも可能だ。

狭い範囲ならば、チカゲも発動した経験はあるが、眼前のゴーレム全てというほどの広

範囲な発動は初めてだ。

だが、チナミが雷矢で敵を倒せるというなら、やってみる価値はある。

チカゲは、兄の顔を見た。

「私がやる。兄上、魔術師長に一時結界を解くように言ってっ」

魔法防御があると、大規模な魔法の場合、威力が半減したり変質して発動したりする恐

れがあった。

チカゲの提案に、しかし意図の分からないハーシエルとトシヤは目を剥いた。

「え？ 解くって……。城、丸裸にする気かよっ？！」

「この数だぞっ？ 今結界解いたら雪崩打って入ってくるぞこいつらっ！」

眼前で、跳躍しては結界にごんごんぶつかっている死の犬を、トシヤは指差す。

チカゲは、表情を引き締めて頷いた。

「一時的に、よ。大丈夫、必殺技があるから、心配しないで」
言うなり、チカゲは楼閣の手摺の上に立つ。

「兄上、お願い」

「このままだと、どちらにせよこいつらが雪崩れ込んで来るのは必至。……いいだろう」

カナメは、彼等の背後に控えていた兵に、急ぎ魔術師長に結界解呪を伝えるよう命じる。

若い兵は全速力で楼閣を降りて行く。

手摺に立ったチカゲは、夕闇の迫る市内を蠢く敵を、じっと見詰めた。

ゴーレムは、動きの遅いのもあって、今やっと先頭が王宮前広場に到着した段階だった。

対して、死の犬は、恐らくパルスタードが召喚した全てであるう二十頭余りが、激しく

正面門と楼閣を攻撃している。

術を掛けるなら、ゴーレムがこれ以上王宮に近付かない方がいい。

自分で解呪呪文を唱えてもいいのだが、そうすると攻撃呪文の発動より死の犬が先に王

宮内に入ってきてしまう。

そうなると、この絶好の位置での魔法発動が難しくなる。

別の人間に防御を解呪してもらい、その前に自分は攻撃呪文の発動準備をしておいたほうだが、即座に敵を倒せる。

「……早くしてえっ」

魔術師長の到着を、チカゲは今かと待ちわびる。

程なくして、三人の魔術師が楼閣に駆け上がって来た。

「遅く??、なりましたっ!」

来たのは、パルスタードに代わり魔術師長補佐となったルシアン・トウノである。

パルスタードと同期に宮廷魔術師となったルシアンは、魔力ではパルスタードに劣るもの、勤勉で人柄も良く、魔術師長の信任も篤い。

他の二人も、宮廷魔術師の中で五本の指に入る実力の持ち主だった。

「魔術師長は?」

尋ねたハーシェルに、ルシアンは苦笑する。

「師匠がこの短時間でここまで来られるのは無理ですから。その代わり、これをお預かりしました」

補佐は、胸に下げた小さな水晶球を、チカゲに見せた。

「我々が解呪呪文を発動すると、この球が対の球に発動を知らせます。師匠はそれを頼りに、別の場所で術を発動されます」

「分かったわ。それじゃ始めるけど、私が呪文を唱え終わると同時に、解呪を掛けて下さいっ」

はい、とルシアンが頷く。

チカゲは呪文を唱え始めた。

「……我が魔力の流れ、雷の形に変わりて我が敵を討ち滅ぼすべし。しかして全ての雷、

矢と変じ、雨の如く天より降り注げ。サンダー・アロー」

詠唱を終えたチカゲの掌に、子供の頭程の光球が乗っていた。空かさず、ルシアンと他二人が物理防御魔法の解呪を唱える。

「???デスペルっ!」

魔法は、その術の大小にもよるが、大概の場合、掛ける魔力より解く魔力のほうが小さくて済む。

魔力の無い者には分からないが、チカゲを含む四人の魔術師には、幾重にも掛けられていた二つの防御魔法が、解呪と同時に消え去るのが感覚として確認出来た。

物理防御魔法が解かれた刹那、跳躍を繰り返していた死の犬が、彼等の立つ欄干に着地した。

「来やがったっ!」

カナメ達が、武器を構える。チカゲは犬を避けて、掌の光球を頭上へ投げた。

表面に無数の稲妻を纏い付かせた球は、急速に膨らみながら上昇し、ある大きさまで膨らんだ時点で、炸裂した。

チカゲの魔力を、チナミの魔力が制御した雷球は、どれも五十センチ程の細長い棒状の稲妻となって地上に落下する。凄まじい速度と正確さで、ゴーレムや死の犬を襲った。

ハーシェルとカナメが向き合っていた一頭も、降って来た雷矢の一本に串刺しにされ、甲高い咆哮を残して消えた。

「……すげーっ」

広場を埋めようとしていた魔法人形の群れも、魔獣の姿も一瞬の間に消え去ったのを確

認して、ハーシエルが心底からの驚きの声を漏らす。

「やったな」

背後から掛けられた兄の称賛に、チカゲが振り向いて笑おうとした時。

突然、ハーシエルが飛び付いて来た。

「チカゲっ！」

力任せに欄干に叩き付けられる。

仰向けに倒れた彼女の上に、ハーシエルの顔があった。

「なっ、何すんのよっ?!」

チカゲは真っ赤になって怒鳴った。

前に女官長に言われた『求婚』という言葉が頭を過ぎる。しかし、この状況で、しかも

こんな過激なやり方は、いくら何でも無いだろう。

「もーっ、止めてよっ! こんな時にっ!」

恥ずかしさから半分怒りながら、チカゲは少年の身体を押し退けようと肩に手を掛ける。

と、その手にぬるりとした液体が触れた。

「なに……、これ？」

「殿下っ!」

マリが、駆け寄って来た。その時初めて、チカゲは少年の口許から血が滴っているのに気が付いた。

マリがハーシエルの身体を抱き起こす。急いで起き上がったチカゲは、ハーシエルの背

と肩に長い槍のようなものが突き立っているのを、認める。

兵の手燭にきらきらと光る透明な形状から、それが魔法で作られた氷の槍だと知れた。

血の気が引く。目の前で二度も、仲間が傷付くの見るなんて。

「チカゲっ」

「ハーシエルっ」

がつくりと膝を着いたチカゲの元に、トシヤとカナメもやって来た。

「アイス・ランスかつ」

引き抜こうとするトシヤの手を、カナメが止める。

「待て。やってる場合じゃなさそうだ」

仲間を見ずに言う兄の視線の先を、チカゲはぼんやりと辿った。

そこには、灰色の髪を

した長身の魔術師の姿があった。

「思う壺だな。結界を解呪してくれたことに感謝しよう、アケノの王女」

「パルスタードっ！」

途端、放心状態に陥り掛けていたチカゲの裡に、かつ、と怒りがみなぎる。

王女は勢いよく立ち上がり、魔術師を睨み上げる。

パルスタードは、小馬鹿にした笑みを浮かべ、彼女を見下ろす。

「おまけに、こんなに早く『光の塔』の結界も解けた。本当に、おまえの無能には頭が下がる」

「こんのお……っ、根性ワルっ！」

自分が卑下されたより、仲間を傷付けられたことに大いに腹を立てているチカゲは、一挙に捲し立てた。

「世界に恨みがあるとかなんとか知らないけどっ、二千年も前のこと未だに引き摺ってっ

！ バカじゃないのっ！ どんな形で生まれようと自分は自分じゃんっ！ それをっ、他

人に八つ当たりするのもいい加減にしろってのっ！ あんたこそ、能無しの最低よっ！」

出生の秘密に触れられ、エルウィードの『転生の器』は薄ら笑いを止める。

「……貴様に、何が判るっ！」

チカゲはふんっ、と鼻を鳴らした。

「なあんにもっ！ あんたみたいなヒガミ根性の塊の気持ちなんて、全っ然判りませんっ

！ 私のはっ、いくらトシヤ兄やカナメ兄上に苛められても、やり返すファイトは持つてるもんっ！」

「この……っ、小娘がっ！」

パルスタードが腕を顔の前で曲げる。

魔法が来ると察知したチカゲは、チナミの杖を右手で持ち、構えた。

チカゲがパルスタードと言合いをしている間に、ルシアン達三人の魔術師が、ハーシエルの身体を貫いた氷の槍を抜き傷を塞いでいた。

その時間を作るために、チカゲはわざとパルスタードと言合いをしたのだ。

カンカンに頭に来ているのに、相手の動きは酷く冷静に判断出来ている自分を、チカゲ

は不思議に思う。

だが、それが何故だか検証している暇は無い。

「兄上っ、早くハーシエルをっ！」

「分かっているっ！」

傷は完全に塞がったが、失血が多かったためか、少年の意識はまだ戻っていない。

トシヤが小柄な少年を抱き上げて、欄干の入り口まで移動したのを目の端で確認した時、

パルスタードが、曲げた腕を前へ伸ばした。

「我が要請に従いでよっ、魔の鳥よっ！」

突き出された掌から光が迸る。光は急速に上へ伸び、巨大な鳥の形になった。

それは、伝説でしかないと思われていた、火の鳥だった。

21. 地獄の魔鳥

全身に赤く揺らめく炎を纏った鳥は、羽ばたく度に周囲に火の粉を撒き散らす。

石造りの楼閣は容易に火はつかないものの、そこにいる人間は高温の炎に容赦なく晒される。

思わず片手で顔を覆ったチカゲに、パルスタードの嘲笑が飛んだ。
「さて、おまえにこの火の鳥を倒せるかな？ 無能な小娘よ」

「無能って、言うなあっ！」

怒鳴りながら、チカゲはチナミの杖を振った。

「アイス・ウインドっ！」

細かい氷の粒が混じった冷たい強風が、火を纏った鳥に吹き付ける。弱点の属性魔法を

浴びて、火の鳥は高く鳴き放って消えた。

ざまあみろ、と、チカゲが得意気に腰に手を当てた、その直後。

小さな炎が鳥の居た場所から立ち上ぼった。炎は見る間に巨大化し、やがて元の鳥の形になる。

「なっ……?!」

「地獄の火山から生まれた火の鳥は、たかが氷の風くらいでは死なぬ。魔法では倒せぬのさ」

チカゲは、蘇った火の鳥を凝視し、目が眩む程の怒りと絶望を感じた。

本当に魔法が効かないというのなら、ではどうやって自分は仲間を守ればいいのか。

蒼白になり動かないアケノの王女に、パルスタードは勝ち誇った顔で言った。

「まあ、ゆっくり火の鳥の相手をしてやってくれ。私は先を急ぐので、おまえ達の焼け死

ぬ姿は見届けてやれぬが、な」

残念だ、という声を残し、悪しき魔術師の『器』は移動の呪文で何処かへと姿を消した。

後を託された火の鳥は、大役を得た喜びか、一声高く鳴くと再びその高温の炎を纏う羽をはばたいた。

「プロテクト・シールドっ！」

浴びる寸前、チカゲは防御呪文で高熱の風を遮る。

「チカゲっ！」

兄の呼ぶ声に、チカゲは欄干の上がり口の方へ目をやった。と、カナメがこちらへ来い、と手招きをする。

彼女は、魔鳥の様子を見ながら、素早くそちらへ走った。

「危ないよっ！ あいつが気が付いたら、こっちへ来ちゃうっ」

「僕達があいつの相手をする。おまえはパルスタードを追え」

意外な申し出に、チカゲは目を見開いた。

「だってっ！ 魔法も効かないんだよっ？！ 兄上達がどうやって戦うのっ？」

「……地獄の鳥を操る者……」

ハーシエルが、床に突き立てたユキナガの刀に縋りながら立ち上がる。

「ハーシエルっ！ 大丈夫っ？」

慌てて助けようと伸ばしたチカゲの手を、だがハーシエルは払い除ける。

「聞け。あれは地獄の鳥だ。俺の祖国ヒノワでは、あれを召喚し操れるのは、闇の国の妖

術師だけと言われている。こんな、詩もある。

『地獄の鳥を操る者、闇の王の眷属なり。地獄の鳥は吹雪でも死な

ぬ。聖なる剣にのみ屈す」

「それって……？」

「『地獄の鳥』は火の鳥のこと。闇の王の眷属、つまり、闇の国の妖術師が奴を呼び出し

使役する呪文を知ってる。最後の『聖なる剣』ってのは、ヒノワでは鋼鉄で造られた上に

黄金を被せた剣をそう呼ぶ」

「ってことは、宝具は……？」

「神々が作り出した上に、丸まんま金ぴかだし？」

にやり、と笑ったハーシエルに、トシヤもにっ、と笑い返す。

「なる……。んじゃ俺達の武器なら、あいつを倒せるって訳かっ」

「だから、チカゲはあいつに関わるなっ。倒すのは俺らの仕事だ」

「でも、ハーシエルはまだ……」

「ぐたぐた言ってる場合じゃねえってっ！」

欄干を見ていたトシヤが、思い切りチカゲを左へと突き飛ばす。

そして自分も同じ方向

へと飛んだ。

カナメ達と魔術師三人も、素早く塊を解いてその場を離れる。

その後に、火の鳥の炎の息が襲って来た。咄嗟に逃げた一同は、

続く攻撃を予測して素

早く立ち上がる。

魔鳥は、右に避けたカナメ達の方へと首を回した。

「援護してくれっ！」

カナメがルシアン達に言った。

「私が囹になりますっ！」

叫んで、マリが飛び出した。

「マリっ！」

お守役の無謀とも言える行動を止めようと、思わずそちらへ走り掛けたチカゲを、トシ

ヤが引き止める。

「大丈夫だっ。マリを信じろっ！」

「でもっ！」

「いいからっ、おまえはさっさとパルスタードを追えっ！」

突き放されて、チカゲはよろめく。迷うチカゲに、カナメとハーシエルの怒声が浴びせられる。

「何をぐずぐずしているっ！ 早く行けっ！」

「俺らなら心配ねえからっ！ 早くパルスタードをぶっ飛ばして来いっ！」

火の鳥が、一度上空へと舞い上がる。炎の息を吹きながら、鋭い鉤爪でカナメ達を引き裂こうと急降下して来る。

ルシアン達三人の魔術師が、同時に皆に物理防御の魔法を掛けた。炎から守られたハーシエルとカナメは、爪を避けて左右に転がる。彼等の必死な姿を見ながら、チカゲは二千年前の戦を思った。

チナミ達も、こんな過酷な戦いの日々を送ったのだ。仲間を盾にして、ひたすらエルウイードを捕らえるために。

彼等の気持ちを無駄には出来ない。

チカゲは背を伸ばすと、トシヤに言った。

「……行っ、来る」

「おう、頼んだぞっ」

にやりと、いつもの悪戯っぽい笑みを浮かべ、トシヤはチカゲの肩をぽんっ、と叩いた。

チカゲも笑い返す。溢れた涙が一筋頬に零れる前に、チカゲは飛翔の呪文を唱え、トシヤに背を向けた。

欄干から飛び立った従妹の姫を見送ったトシヤは、すん、と鼻の下を擦る。

「……さあてっ、んじゃ俺達もいっちょ、地獄の鳥とやらをコールド・チキンにしてみるかっ！」

黄金色の槍を手にすると、彼は火の鳥の右側へと回り込んだ。

飛翔の魔法で楼閣から飛び立ったチカゲは、一路『褐色の塔』を目指した。

パルスタードが王宮に侵入したからには、必ず最後の封印を真っ先に解きにあの塔へ向かう筈である。

夕闇と、勢いよく枝葉を広げる夏の木々のせいで、地上の様子がよく見えない。チカゲ

は兵士達が持つ手職と松明の明かり、それに王宮の位置を頼りに、その方向へと飛んだ。

やがて、数本の松明に照らされた場所が見えて来た。王宮本殿の方角から、『褐色の塔』

の辺りと知れる。

チカゲは松明の範囲に目を凝らし、ぎょつとした。

塔が無いのだ。

正確には、パルスタードが第四の封印までを解き、塔から小さな神殿に姿を変えていた

『褐色の塔』が、跡形も無く消え失せているのだ。

チカゲは急いで着地する。塔のあった場所へと駆け寄ると、そこには幾人もの人間が倒れていた。

「どうしたのっ?!」

王宮警護の兵十数人と、魔術師が数人。

その中に魔術師長の姿を見付け、チカゲは慌てて側に行った。

「師匠っ！」

「……おお、姫様」

魔術師長はチカゲの姿を見ると、ゆっくりと起き上がる。が何処か打ったのか、途中で酷く顔を歪めた。

「何処かお怪我をつ？」

「ああ、パルスタードの魔法ですな。ちと足を。……いやいや、歳には勝てませぬなあ。

完敗ですわ」

チカゲは治癒魔法を唱えた。

ややあつて、魔法が効いた魔術師長は、ほうつと溜め息をつき肩を落とした。

「ありがたい。炎の魔法で吹き飛ばされてな。さすがに、エルウィードの魔力まで追

加されたあやつには、わしらでは歯が立ちませぬ」

「では、やはりパルスタードは第五の封印を？」

魔術師長はむっつりと目を閉じて頷いた。

「それを阻止するために、ここに詰めておりましたが、力及ばず、取られました」

恐らく、トシヤとハーシエルのダメージが『光の塔』の結界にも影響したのだろう。

チカゲはもう一度、『褐色の塔』の跡を振り返った。

「で、パルスタードは？」

「さて……。独り言のように「あとは究極呪文だけだ」と言っておりましたが……」

「究極呪文？」

首を傾げたチカゲの脳裏で、チナミの声がした。

『『光の塔』だ。多分、僕がそれを隠していると、エルウィードは知っている』

「チナミ様がつ?!」

「どうなされました？」

不思議そうに見る魔術師長に、チカゲは「あ、いえ」と笑った。

「チナミ様が……。その、究極呪文をご存じだと」

「ほう。では、あやつは『光の塔』へ？」

「はい。チナミ様もそう、おっしゃっています。私、『光の塔』へ行きますっ」

チカゲは、漸く動けるようになり側へやって来た兄弟子に師匠を任せ、立ち上がった。

「くれぐれもお気をつけて行きなされ。相手は、今までのパルスワードではない」

「はいっ」

暗闇になって来た森の中を行くために、チカゲは、チナミの杖の先に魔法で光を点した。

もう一度魔術師長に頭を下げ、アケノの王女はチナミの塔へと走り出した。

22. エルウィードの目的

『二千年前にも、エルウィードは究極呪文を奪取しようとしたんだ』『光の塔』へと急ぐチカゲの頭の中で、チナミの話が続いた。

『究極呪文はヒナタで、僕が生まれるより五百年程前に出来上がった魔法だった。五百年

前当時、ヒナタの周辺の国々は政情が著しく不安定で、魔法大国のヒナタと言えど、何時

侵略されるか判らない状況だったらしい。そこで、周辺諸国への威嚇のために、究極呪文

は考え出された。国王も含め、当時最高の魔力と知恵を持っていた宮廷魔術師達数十名が

研究し完成した呪文は、けれどあまりにも強大で、魔術師の中で最大の魔力を有した国王

でさえ、唱えるのを諦めた、と伝えられていた。そのため、究極呪文は以後誰も覚えるこ

となく王宮の宝物庫の中で、水晶球オーブに納められたまま眠っていたんだ。

その呪文を、五百年後に読み解いたのが、エルウィードと僕だった。前にも話したけれ

ど、僕とエルウィードは時々、王宮の中を探検していた。本当は立ち入り禁止だった宝物

庫へも、何度かこっそり忍び込んだ。宝物庫には管理人が置かれていたけれど、暇な部署

だ、時折魔法で部屋の空気を入れ替えるために風を通す程度で、庫内の物品の詳細管理な

どはおろか、所定の場所に待機していない場合もしばしばあった。そんな状態だから、僕とエルウィードは、宝物庫の錠を魔法で難

なく外し、中へ入れた。

究極呪文が収められた水晶球は、古い木箱の中に眠っていた。宝物庫の一番奥の棚の下に置かれていた木箱は、長い年月を経たため、蓋の上に貼られていた中身の詳細を記した羊皮紙が剥がれ落ち、錠も腐って壊れていた。

簡単に中身を見ることが出来た究極呪文の水晶球には、けれど呪文の全ては記されていない

なかった。後で分かったことだけれど、当時の魔術師長が、強大な破壊力を持つこの呪文

が、万が一にも悪しき者に知られないよう、前半と後半に別けて記録していたんだ。エル

ウィードと一緒に見付けたのは、その後半部分だったんだ」

「では、エルウィードが探しているのは、前半部分？」

魔法の発動は、大概のものは、呪文の前半で性質と方向性がほぼ決まる。後半は、術者の力を整えるための韻である。

前半が分からなければ、究極呪文の性質は全く掴めない。

??それでパルスタードは、『光の塔』に入るために、あんな強引な手段で王宮に入り込んだのね。

自分勝手にも程がある。怒りが再燃してきたチカゲは、チナミの杖をぶんつ、と振った。

杖の先に灯された明かりが、チカゲの真上の小枝に当たる。眠っていた場所にいきなり

光が当たって驚いた小鳥が、小枝から飛び上がる。

「チナミ様は、究極呪文の前半を、どちらで見つけられたのですか？」

『エルウィードが悪しき者となった後に、王宮の庭園で、一番遠くに建てられた離宮で前半部分が納められた羊皮紙を見付けた。前半部分も水晶球に納めら

れていると思っていた

ので、羊皮紙を見付けるまで時間が掛かってしまった。僕が呪文を覚えて羊皮紙を始末し

てしまった直後に、王宮にエルウィードが乗り込んで来たから、正に間一髪だったけどね』

「その……、究極呪文って、そんなに危険な魔法なんですか？」

再び歩き出しながら、チカゲは今更だなと思いつつ、尋ねる。

チナミは、だが笑いもせずに、真面目な声で答えた。

『うん。きちんと発動出来れば、まずこの大陸が一瞬で砂漠になるかもしれない』

「えっ?!」チカゲの手から、思わず杖が落ちそうになる。

「そっ、そんな強大な呪文っ、でも、簡単には発動出来ないんでしよう?」

『昔のエルウィードや僕で、やっとだと思う。けれど、今のパルスタード??エルウィー

ドの『器』は、元々の己の魔力に更にエルウィードの魔力を追加している。ここまで強大

な魔力を持てば、楽に唱えられるかも……』

チナミが言い掛けた時。チカゲは『光の塔』の前に人影が動くのを見付けた。

灰色の魔術師が、果たしてチナミの塔の前に立っていた。彼は、自分の周りに幾つか小

さな炎の球を浮かべ、チナミの塔の入り口を探していた。

背後から近付いたチカゲの革靴が、芝の上に落ちていた細い枝を踏む。その乾いた音に、

パルスタードは素早く振り向いた。

「……ほお、火の鳥からおまえ一人逃げて来たのか」

「逃げたんじゃないわよっ、みんながあんたを倒すために、私をここへ来させてくれたのよっ!」

チカゲは、先端に魔法の光を点したままの杖を、パルスタードに向ける。

パルスタードは、嘲笑った。

「美しき友愛、という奴か。さて、本当にそれが友愛かな？ 奴等の本心は、足手纏いな

おまえを、さっさと退けたいだけだったかも知れぬぞ？」

確かに、火の鳥には魔法が効かない。あの場所にチカゲが頑張っている、みんなの邪

魔になるだけだ。

だが、パルスタードとの戦いには、絶対チカゲの力が必要だ。

「そんなんっ。仲間が出来ない奴のヒガミよっ！ 私達は、お互いの得手不得手も知っている。だから、私はあんたを追って来たのっ」

「ふん、何処までも強がるな。まあいい。私としても、チナミの交代であるおまえが、の

このことやって来てくれたのは好都合だ」

言うなり、パルスタードは、思わず見とれてしまうような優雅な動作で、長い腕を前へと伸べた。

パルスタードの指先から、魔力が光となって発される。と同時に、チカゲの首に見えない何か

何かが巻き付く。

「くっ……！」一挙に首を絞められて、チカゲは苦しさのあまり、両手で喉を庇おうとする。

その指に触れたのは、細い風の流れだった。

たった一動作で、パルスタードは風の魔法を発動していたのだ。

チカゲの首に巻き付い

たのは、彼の作り出した魔法の風の帯である。

「おまえなら知っていよう。究極呪文は何処にある？」

チカゲは黙っていた。実際、教えられていない彼女には答えよう

がないし、チナミは沈黙している。

口を開かない王女に焦れ、パルスタードは風を手元へ巻き取る。

「さあ、教えろ」

「しっ……、らな、いつ……、てばっ！」更に喉が締めまり、苦しさにチカゲは喘ぐ。

「嘘を付けっ。チナミがかつてヒナタの王宮で、私の知らなかった前半部分を見付け出したのは承知しているのだ。周到なチナミのことだ、究極呪文の全容を、間違いなく何かに

記録している筈。さあ、さっさと言わねば、細首が折れるぞっ！」

『チカゲっ、究極呪文は……』

チナミが根負けし語ろうとした声を、チカゲはわざと遮った。

「しーらないってっ！」

彼女は渾身の力を振り絞り、無理矢理叫ぶと、右手に握ったままの杖を振った。

「デスペルっ！」

それで、魔力の倍加したパルスタードの呪文が解呪出来るとは思わなかった。が、やら

なければ死ぬ、という思いが通じたのか、首に巻き付いていた風の帯は、何とか消滅した。

「げっ、げほげほっ！」

急激に気管に侵入してきた呼気に噎せて、地面にへたり込んだチカゲを、パルスタードはいまいましたげに見下ろす。

「何処までもしぶとい小娘だっ！　よかろう、ならこれでどうだっ」
悪しき魔術師は、涙の顔をようよう上げたチカゲの目前で、火の鳥をもう一羽召喚した。

森の闇を駆逐する地獄の怪鳥の輝く炎を前に、沸き上がった恐怖がチカゲの幼い顔を歪

ませる。

「これを、恐らく戦い終わったか、まだ戦っているおまえの仲間のところへ送ろう。最も、

おまえが究極呪文の在処を喋るといふなら、考え直してもよいが？」
直接攻撃には屈しないと見て、仲間を人質にするとは。

何処までも卑劣なパルスタードに、チカゲは三度激しい怒りを感じた。

「……ほんと、自分のことしか興味ないんだねっ、あんたはっ」

「他人に興味を持ってどうする。人は皆、己の都合しか考えぬ。善人面をして人助けなど

していいようが、結局は己の損得が唯一なのだ。得にならなければ、誰が他人など助けよう。

むしろ、足蹴にして退ける。それが人間の本性だ」

「チナミ様はっ！」

チカゲは向きなっって言い放った。

「チナミ様はっ、今でもあんたのこと、兄上だっって思っっていられっしやるのよっ。血を分け

た兄弟だから……、優しかった兄上だから、出来れば殺したくないっ。そんな方まで、

本性が身勝手だっって言える訳っ?！」

火の鳥の生み出す明かりの中で、パルスタード??エルウィードは、暗く微笑んだ。

「……チナミは、私を助けることに酔っっているのだ。己の変わらぬ優しさを示すことで、

奴は神として祭られ、崇められて来た。その優越感に、酔っっているのだ」

チカゲは驚き、目を見開いた。

こんなにチナミが心配をしているのに。二千年にも及ぶ彼の『想い』、ひとりぼっちだ

った彼を慈しんでくれた人への、変わらぬ『想い』を、だがエルウ

イードは無残に踏み躪ったのだ。

チカゲの中の怒りが、更に倍加する。

アケノの王女は猛然と杖を振り上げると、パルスタードを見据えた。

「あんたが、何と思ってるかなんて、どうでもいい。でも、勝手な思い込みで私の大事な

人達に傷付けるのは、絶対許せないっ！」

「ならば、早く究極呪文の在処を教えることだ。そうすれば、命だけは助けてやろう」

「バカ言ってるんじゃないわよっ！」

チカゲはだんっ、と地面を片足で踏み鳴らした。

「あんたは、最初から誰も助ける気なんてないっ！ 究極呪文を發動したら、この大陸の

人々は、みんな死んでしまうんじゃないっ！」

「……チナミから聞いたのか」

あはは、と、パルスタードは声を上げて笑った。

「そう、後先になるだけだ。だから教えない、というのは、愚の骨頂だ。どのみち、私は

時間が掛かっても全てを滅ぼす気でいるのだから」

「やれるものなら、やってみなさいっ！」

チカゲは、詠唱を省いてサンダー・ボールを発動した。

急速に回転しながら膨らむ雷球は、瞬く間にパルスタードに接近する。

魔術師が球を片手で捕らえようとした時、火の鳥が前へ出た。

炎を纏った大鳥は、迫る雷球を、まるで水でも飲むように口の中に吸い込んだ。

魔鳥の行動に呆気にとられながら、チカゲはもうひとつ雷球を作り出す。

今度は、火の鳥に直接ぶつかるように球を繰り出した。鳥は、最

初と同じように雷球を

飲み込む。

途端。鳥の体内でまだ消えずにあった最初の雷球が、次に飲んだ球とがぶつかりあい、炸裂する。

悲鳴を上げばらになった魔鳥は、しかし残り火の中から必ず復活する。

チカゲは、鳥が復活するタイミングを見計らって解呪呪文を唱えた。

「デスペルっ！」

23. すれ違う『想い』

精霊魔法は、現在使用されている四大属性魔法と無形系魔法とは、体系が違う、とパルス

スタードは言っていた。

しかし、魔法は魔法。介在している魔術師の『魔力』は、どちらも同じだ。とするならば、別体系であろうと、より大きな『魔力』をぶつけられれば、タイミングによっては霧散する可能性もある。

事実、北の封印塚の戦いの時、負傷したパルススタードの魔力が弱まったために、魔獣達は霧散した。

火の鳥も同じだ。特殊な生態だが、召喚されて来た以上、魔力の生き物であろう。一度

死んで再生するその瞬間、もしかしたら火の鳥と召還者の魔力の絆が一度切れ、自動的に改めて召還し直されているのかもしれない、と踏んだチカゲの読みは、当たった。

再生？？正確には、再召還の瞬間、その魔法をより強大な魔力によつて解呪され、火の鳥は元の姿に戻れずに霧散した。

まさかチカゲがそこまで考えていると想像していなかったパルススタードは、初めて青褪めて彼女を見た。

「……さすがは、強大な魔力の持ち主だな、チカゲ・セラリア」

「初めて私の名を言ったわねっ」

チカゲは杖を斜めに構えると、大声でレベル5の呪文を唱えた。

「……我が魔力、風の流れとなれっ。しかして突風、炎を産み、振

れるものごとくそ

の舌に捕らえ粉碎せよっ！ ファイヤー・ストリームっ！」

『チカゲっ！』

頭の中で、チナミが叫ぶ。制止の叫びなのは分かっていて、しかしチカゲは術を止めなかった。

振り下ろされた杖の先から、轟音と共に炎の渦が飛び出す。渦は強風に乗り、チナミの塔を背負って立つパルスタードへ向かう。

呪文の通り、炎の風の舌が魔術師を捕らえようとした瞬間。チカゲの手から不意にチナミの杖が消えた。

チナミが、チカゲから離れたのだ。

唐突に杖を失い一瞬慌てたが、ある程度予想していたチカゲは、続けてそのまま魔法を放った。

「ファイヤー・ウォールっ！」

今度は更に強力な、炎が壁のようになったまま相手にぶつかるレベル6魔法である。

壁は、途中から大波の様相で魔術師に押し掛かる。

エルウィードの魔力を得たせいで、逆巻く熱い渦すら難無く手で止めたパルスタードだ

ったが、間を置かず襲って来た二陣の炎の壁は、さすがに防ぎ切れなかった。

灰色の魔術師の端正な顔が、チカゲの強大な魔力を受け、苦痛に歪む。

押し合うこと数秒、パルスタードは炎の壁に飲まれる。しかし完全に炎に捕まる寸前、

パルスタードは移動魔法を発動し、虚空へ掻き消えた。

目標のなくなった巨大な炎の壁は、そっくりそのまま後方の『光

の塔』に激突する。

チカゲはパルスタードを取り逃がしたことより、塔を崩壊させてしまう危険に悲鳴を上げた。

「きゃあああっ！」

ここ数日の悪夢再び、と、彼女は両手で顔を覆う。

大広間の天井どころではない。チナミの戻った『光の塔』を粉碎したとなっては、どう

謝っても父王とて許さないだろう。

「……やっちゃったあ……」

顔を覆ったまま、その場にぺたりと座り込む。

そこへ、『褐色の塔』を守っていた魔術師達がやって来た。

「姫様っ！」

草の上に蹲っているチカゲに、魔術師長が慌てた声で尋ねた。

「どう、なされましたっ?! 何処か、お怪我をっ?!」

老体にむち打ち急いで来たのだろう、上がる息のまま心配そうに側に膝をついた師匠に、

チカゲはそろそろと顔を覆った手を退けた。

「い、いいえ、大丈夫、です。ただその……。『光の塔』に、魔法がぶつかっちゃったから、もしかしてまた、壊しちゃったかもって……」

「『光の塔』にっ? ??あ、いや、塔は無事ですな」

最大出力のチカゲの魔力が炎の奔流となってぶつかったはずなのに、チナミの塔はびくともしていなかった。

「……ほんとだ、よかったあ」

「『光の塔』は、内部がチナミの魔力で出来ておりますから、余程でなければ崩れたりせんのでしょ」

にっこり笑う師匠に、チカゲは、改めてほっと肩を落とした。

「チカゲっ！」

正面門から、カナメ達が走って来た。

「パルスタードはっ？」

火の鳥の炎に焼かれたのだろう、カナメの服は、シャツもズボンもあちこち焼け焦げ穴

だらけである。銀の装飾を施した胴鎧にも、幾つも焦げ跡がある。

いつもの優美な貴公子の表情とは打って変わって、勇猛果敢な剣士の面構えの兄を、チ

カゲは見上げた。

「ごめんなさい。取り逃がしました」

「けど、結構ダメージ与えたんだろ？ 火の鳥がいきなり消えたもんよ」

大怪我をした割には元気で、それでも腕や足に軽い火傷だらけのハーシエルが言った。

「うん……」

「なら、いいんじゃないよ？」

「っても、あいつのこった、またすぐに襲撃して来るぜ？」

こちら軍服が焦げ穴だらけのトシヤが、難しい顔で腕を組む。

「しかし、姫様が無事で何よりでした」

美貌を軽い火傷と埃で汚したマリが、チカゲを見てにっこり笑った。

「……マリ」お守役の優しい笑顔に、それまでの緊張が一挙に解ける。

チカゲは、悲しくもないのにわっと泣き出した。

「どっ、どうなさいましたっ？」

「なんでも…、ないのっ。ただ…、泣けちゃって……っ、ひつく…」

「無理もない。姫様はまだおん歳十四。魔法は精神を如何に研ぎ澄ますかで勝敗が決まる

もの。よくぞパルスタード相手に、頑張られました」

魔術師長の労いが、またチカゲの涙を呼ぶ。

「あーあー、これが俺達のヒロインなんだからなあ」

トシヤは、大袈裟に呆れてみせた。

「おいっ、いい加減に泣き止めっ。まだまだ終わっちゃいねえってのっ」

「う、うん」

分かっているが涙が止まらないチカゲは、だが何とか顔を手の甲で拭ってしゃくり上げるのを止めた。

マリが、その背を小さな子供あやすようにゆっくりと擦る。

「さて」とカナメが一同を見回した。

「トシヤの言う通り、まだ奴との戦いは終わっていない。だが、もう先は長くないんじゃないかと、僕は思っている。奴は相当、焦っている。その焦りが何を起因としているのかのところ見当がつかないが。とにかく、次に相對するのを、最後にしたい」

「俺も」ハーシエルが手を上げた。

「エルウィードの魔力を、奴は身に付けた。ってことは、こっちが打ち損じて戦が長引けば長引く程、奴に有利になる。早いとこ決着つけないと、結構ヤバいと、個人的に思う訳だ」

「しかし、どうすれば……」

マリが言い掛けた時、魔術師長が驚いた顔でチカゲに言った。

「姫様、チナミ様は、どうされました？」

彼女の手にはチナミの杖が無いのを不思議に思って訊いた師匠に、チカゲは少し困った顔で答えた。

「あの……。離れてしまわれたんです」

「ああ、やっぱり」

ハーシエルが苦い顔をした。

「チカゲからチナミの気配がしないから、多分離れたと思ったけど」
「また喧嘩したのか？」

カナメの問いに、チカゲは素直に頷く。

「だって……。確かに、チナミ様のお気持ちは分かるんだけど。でも……。でもっ、私は

やっぱりパルスタードを許せないのっ」

チナミの、優しかった兄であり守役であった頃のエルウィードへの、今も変わらぬ思慕

を、あの男は打算と自己陶醉として切り捨てた。

チナミの依代となり、かなりの部分彼と記憶を共有していたチカゲは、チナミが純粹に

エルウィードを慕っていたのを感じていた。

それを、己の歪んだ思いで曲解し、揚げ句に殺そうとするエルウィードは、何としても

許せない。

そして、そんなエルウィードを哀れに思う余り、いつまでも彼にとどめを刺せないチナミを、悲しく思った。

「これ以上、チナミ様に悲しい思いをして欲しくないの。エルウィードさえいなくなれば、

チナミ様は悲しみから開放される。でもそれは、私の手でやるしかないの。だから」

「……そっか」ハーシエルが、柔らかい笑みをチカゲに向けた。

「チカゲは、チナミを思いやってくれたんだな。そうだな、もういいよな。チナミは二

千年、あいつのために悲しんだ。もう、いいよな」

「そうだな。チナミを奴から開放してやんなきゃ、な」

トシヤも、深く頷く。

「だが、どうやる？ 現在のあいつは、二千年前とは比べものにならない程の強大な魔力

を手に入れている。一筋縄ではいかないぞ」

「それなんだけど、兄上」

チカゲは、意を決して言った。

「究極呪文って、知ってる？」

一瞬、カナメ達四人が凍り付く。

24. 究極呪文

「それは??」マリが、困惑した面持ちでチカゲを見る。

「パルスタードが、その究極呪文を欲しがってるの。でも、チナミ様があいつが知らない

呪文の前半部分を含めて、全文を何処かへ隠してしまわれたって」

四人は、顔を見合わせた。

「知ってるのね? 何処にあるの?」

「……チナミと一緒にってたのに、知らねーのかよ?」

ハーシエルが、厳しい表情で逆に尋ねた。

「うん、知らない。チナミ様は、私に流れる魔法の記憶は、凄く制御してらしたから」

思い返して、やはり信用されてなかったのかな、と、チカゲは少し悲しくなる。

ハーシエルが「そうか」と唇を噛んだ。

「言っとくけど、あれは飛んでも無く危険な呪文だ。大体、あんなもん覚えたって普通の

魔術師には発動出来ねえぞっ。チナミだって無理だったんだから?」

「でも、今のパルスタードには、発動出来るよ」

チカゲは、硬い声で言い返した。

「今のあいつには、どんな魔法も大きなダメージは与えない。けど、究極呪文だったら?」

「?」

「バツカっ! んなもん無闇に発動したら、みんなぶっ飛んじまうだろーがっ!」

トシヤが、腕を振り回しながら怒鳴る。

チカゲは、むっとしてトシヤの長身を睨み上げた。

「じゃあっ、どーやったらあいつを倒せるのよっ!」

「それはあつ」

「少々、よろしいかな？」

トシヤとチカゲの言い合いに、魔術師長がおつとりと割って入った。

「それについて、ひとつ良い案が、ありますのじゃが？」

二人だけではなく、カナメ達三人も寄って来た。

「『光の塔』は『褐色の塔』の封印を強化するために、神々自らが結界石となり建てられ

ました。結界は、本来核となる、魔法の掛けられた石なり物があれば、完成します。現在、

皆様には四体の神がそれぞれ降臨なさっています。それと、姫様には強大な魔力があります。ということです」

「そうかつ」カナメが手を打った。

「僕達が結界を作り出せばいいんだ。その中にパルスタードを閉じ込め、呪文を発動すれば……」

「効果は結界の中に止まるっ。なるほどなっ」

感心するハーシエルに、だがマリが眉を寄せた。

「しかし……。私達が作る結界で、果たして究極呪文の威力を押さえられるでしょうか？」

「びくびくしてたって、しょうがねえ。やってみるしかねえなっ」

トシヤが、何時にない真面目な表情で腕を組んだ。

「ねえ、ところで、究極呪文は、何処にあるの？」

チカゲの尤もな質問に、それを失念していた四人ははっとする。「ああそうか。チナミから教えて貰ってねえんだっけ」

うんうん、とチカゲは頷く。ハーシエルは、カナメの顔を見た。

「究極呪文は、実は僕達の中にある。正確には、神々の魂の中に。その前に、チカゲが発

動出来るかどうかという、初歩的な問題がある。けれど、」

と、カナメは一度言葉を切り、妹の薄緑の大きな目を覗き込んだ。
「僕は、チカゲの魔力ならいける、と思う」

チカゲは、兄の表情から自分への絶対の信頼を読み取り、思わず胸が熱くなった。

「年中大暴走する程、魔力余ってるもんな」

心中に沸き上がった感動に水を差され、チカゲは、にやりと笑うトシヤに、

「年中じゃないもんっ」と、いつもの膨れっ面を返した。

ハーシエルとカナメが吹き出し、魔術師長とマリが苦笑する。

「まあ、トシヤじゃねえけど、やってみるしかねえしな。とにかく、究極呪文じゃなくっ

ても、チカゲの魔力を最大出力にして奴にぶつける積もりなら、結界は絶対必要だしな」

ハーシエルの意見に、皆が頷いた。

カナメが、改まった体でチカゲに向き直る。

「というわけで、チカゲに究極呪文を教える。ひとつ注意しなければならぬのは、この

呪文はもの凄く魔力を消耗するから、一度発動したら、続けて二回は発動出来ない、らしい

い。『らしい』というのは、僕達は魔術師ではないので、この説明はチナミからの受け売

りだ。ただ、ほぼ間違いないと思う。なので当然、これを使った後は他の呪文も使えなく

なる。そのところをよく考えて、戦うことだ」

「分かりました」チカゲは決心を込めて、兄に頷いてみせた。

「では、手を出して……」

兄に言われるまま、チカゲは両手を前へ出す。上に向けた掌に、

カナメが、次にハーシ

エルが、トシヤが、そしてマリが手を翳す。

依代となっている彼等の掌から、真っ白な光が溢れ出し、それが、

チカゲの掌の中に移
って行く。

四人から流れ出た光は、掌を通じてチカゲに呪文の情報を伝える。
頭の中で無数の光の

文字が乱舞するような感覚に、チカゲは目眩を覚える。

やがて、カナメ達が手を下ろした。チカゲの頭の中の光の舞いも
止む。

くらくらするのを、ようやく堪えて立っている妹に、カナメは
言った。

「チナミの持っている部分が足りないが……。チカゲなら何とか補
えるだろう」

「うっ、うん……」

一応頷いた。が正直に言えば、自信がない。呪文の流れの大半は
分かるので、発動を始

めれば、多分、最後のチナミの持っている部分も出てくるだろう。

「うおっ、おいでなすったぜっ」

はるか上空を見上げたトシヤが、低い声で言った。チカゲ達も、
そちらを見る。

夜空に、パルスタードが、浮かんでいる。まるで墓場から現れた
死者のように、魔術師

の身体は青白い淡い光に包まれている。

ぼんやりと燐光している魔術師は、どういうわけか、まだ下方へ
来ようとはしていない。

こちらとの間合いを、見計らっているのか、と、チカゲは身
構えた。

と、パルスタードを睨み上げたカナメが、低く呟いた。

「もしかして……、魔力の倍加によって『器』の身体が保たなくな
っているのか？」

「って？」チカゲとハーシェルが、同時に訊く。

カナメは、「僕は、専門家ではないのでね」と、魔術師長を見た。

魔術師長はアケノの王太子の、「説明を」という視線に頷く。

「魔力というのは『気力』?? 本来、人間が生きて行くために必要な力です。魔術師は、

それを呪文を使い物質に変換します。こう、ご説明しますと簡単ですが、魔術を使うに

は、並の者よりも、生まれついで『気力』が大きくなければなりません。一定量の

『気力』がなければ、魔術は使えぬ、ということです。

また、人の『気力』というものは、余程不摂生をしたりせぬ限り、ある程度一定です。

年齢などで、徐々に増えたり減ったり、ということはありましようが、一度に極端に増大

する、というのは、まずあり得ないでしょう。……私も、王太子殿下のご推察通り、パル

スタードの身体が、一挙に増えたエルウィードの『気力』に耐えられなくなりつつあるの

では、と考えております」

「耐え切れなくなった最後は、どうなるんです?」

マリの質問に、魔術師長は長い顎髭を撫でながら、「さて」と目を閉じた。

「魔力が暴走し、気が狂うか、もしくは、身体を破壊するか……。見聞きしたことは、ご

ざいませんでなあ」

チカゲ達は、パルスタードが自らの魔力でばらばらになる図を想像して、思わず息を飲んだ。

「でも、だったらほつといってもいいんじゃないの?」

ハーシエルが、横目で敵を見ながら小声で言った。

「あいつが勝手に死んでくれるなら、こっちの手間が省けんじゃん」

「それは、どうかな?」カナメは、上から目を逸らさず、肩を竦め

た。

「奴のことだ、自分が死ぬ前に、必ず世界を破壊して退けるだろう」
「ちえーっ。めっちゃ根性悪……」

ヒノワの王太子が悪態をつき終わる前に、ようやく悪しき魔術師が上空より降下して来た。

「やっぱ来やがったっ！」ハーシエルが歯を剥き出す。

「おっしや、やるっきゃねえなっ！」

トシヤがテオドールの宝具を取り出した。

「手筈通りだなっ？」

「ああ」

頷くカナメに親指を立てて、近衛軍軍団長は右側へと大きく開いた。

それを見て、マリが左に素早く開く。

左右に広がった五人の中程に、パルスタードは降りた。

「ほう……。火の鳥と戦って未だに生きていたとはな。中々悪運が強い」

「そりやおまえの方だろがっ！」トシヤが言い返す。

「チカゲのバカ魔力を受けてぶっ飛ばないなんて、おまえの方がよっぽど悪運が強えぜっ

！ もっとも、空中で長いことぼーっとしてるとこみると、頭は少々イカれたみたいだな
っ」

「私を、何だと思っているのだ？」

灰色の魔術師は、さも不快だと言うように細い眉を吊り上げた。

「今の私は、『器』の魔力と本来のエルウィードの魔力両方を併せ持つ、最強の魔術師だ。

アケノの王女ごときに遅れは取らぬ」

「言ったなあっ！」

傲慢な台詞に頭に来て、チカゲは吼えた。

「その目茶苦茶腹立つ言い方、今度こそ絶対出来ないようにしてあげるからっ！」

パルスタード？？エルウィードは、青白い光を帯びた顔を、嘲りに歪めた。

まるで地獄の悪鬼が獲物を認めて喜んでいるような不気味な笑みに、チカゲだけではな

く、その場で彼を見ていた全員がぞっとなる。

「いい度胸だ。……だが、その元氣も何時まで持つかな？」

言うなり、エルウィードは魔法を発動した。

25. 最後の戦い

ファイヤー・ボム。その名の通り、触れるもの皆爆裂させて通る火球より数段威力の強い魔法を、彼は詠唱抜きで、しかも一動作で発動したのだ。

この速さでは、防御魔法を発動している暇は無い。触れるすれすれで脇へ跳び、チカゲは爆裂弾をやり過ごした。

チカゲに肩透かしを食らったファイヤー・ボムは、背後の樹木を薙ぎ倒しながら、王宮

手前の四阿を木っ端微塵にして消えた。

しかし、チカゲ達がそれを確認している余裕は無かった。

すぐに、エルウィードは次なる魔法を発動した。

サンダー・スピアとウィンド・エッジ。どちらも強い魔法では無いが、エルウィードは

一遍に五つずつ、それらを繰り出した。作り出された雷の槍と風の刃は、扇状に広がった

五人目掛けて、てんでに走って行く。

カナメとトシヤは、迫る槍を自分達の得物で何とか斬り伏せる。

マリは風の魔法を避け、

エルウィードに三節棍を当てに行った。が、プロテクト・シールドで難無く交わされる。

「アイス・ウイングっ！」

チカゲは、仲間の動きを見ながら魔法を繰り出した。氷の粒を含んだ風は、向かって来

た雷の槍と風の刃を消し、灰色の魔術師に迫る。

しかしエルウィードは、片腕の一振りでチカゲの猛襲を消し去った。

詠唱も何もなく、どんな術でも即座に繰り出してくる。驚異的な、

魔力である。

チカゲ達は、次々に襲って来るエルウィードの魔法と戦いながら、徐々にお互いの間隔を広げて行く。

エルウィードが、パルスタード得意の召喚魔法でガーゴイルを呼び出した時。

「効かないよっ！」

待ち構えていたチカゲは、掌を空飛ぶ魔獣に向けて、叫んだ。

「デスペルっ！」

途端、ガーゴイルが声も無く虚空へと消え失せる。

「なにっ?!」

身体が再生する時に、術者との繋がりが一旦切れ魔力が弱まるため、解呪される危険度の高い火の鳥とは違い、他の闇の生物の召還魔法は、この世界に闇の生物を繋ぎ止める術者の魔力に何らかの支障が出ない限り、闇の生物が消滅することはまず、ない。

まして、強大なエルウィード＋パルスタードの魔力である。

通常のフィールドならば消せる筈の無い召喚魔法を解呪され、エルウィードは驚愕に目を見開く。

チカゲはふん、と鼻を鳴らした。

「気付かなかった？ あんたは私達の結界に捕らわれたんだよ」

「なんだとっ？」

魔術師は、己の周囲を見回す。遠巻きに見守っている宮廷魔術師達が作り出した魔法の明かりに照らされたチカゲ達は、五人が五芒星を描くように立っていた。

「『光の塔』の五芒星かつ」

「その通り」

カナメが言った。

「ここでは、外界から何かを魔力で呼び込むことも、ここから何かを魔力で出すことも、不安定でできにくい。だから、おまえの召喚魔法がチカゲのデスペルで解呪できたのだ」

「……なるほど。だが、逆に四大魔法はどんなに強力なものを撃つても、外への被害は無い、ということか」

エルウィードが不敵に笑う。彼は腕を上げるや、呪文を唱えた。
「ファイヤー・ストームっ」

チカゲが先刻エルウィードに使った激しい爆風が、カナメを襲う。カナメは咄嗟に宝具の剣を構えて、魔法を防いだ。

後方に押し込まれそうになりながら、それでも何とか持ち堪える兄に、チカゲは駆け寄って助けてほしい気持ちをぐっと堪えた。

「ブリザードっ！」

チカゲは、次の魔法を発動しようと再び腕を振り上げるエルウィードに向かって、魔法を放つ。

彼女の小さな掌から飛び出した魔法は、一瞬で凄まじい吹雪に変わり、魔術師を襲った。

しかし先程同様、エルウィードは片手で掴む動作をし、その魔法を消し去る。

「無駄だっ！ この程度の魔法では、私は倒せぬっ！」
勝ち誇るエルウィードに、チカゲはにやりと笑う。

「じゃあ、この程度じゃない魔法なら、倒れるんだ？」
彼女は、予備の積もりでスカートのベルトに差していた自分の杖を取り出した。

魔法の杖には、それを使う持ち主の魔力が籠っている。

自分の分身とも言える杖を、チカゲは足下の土に突き刺した。

五芒星の結界を形成する己の位置に身代わりを置き、チカゲは一歩、前へ出る。

「今度こそ、完全にぶっ飛ばすからっ！」

「ふん。究極呪文を使おうというのか。チナミを降臨させていない身で、出来るものならやってみるがいい」

呪文の詠唱の長い究極呪文は、それを唱えている間に、敵の魔法を避ける事が出来ない。

結界の中という逃げ場の無い空間では、全く不利だった。

が、魔術師は、魔法を使えない人間に比べ、魔法に対する耐性が高い。

四つの要素の根源は、無属性である自然の『気』である。この『気』は四大要素全てを作り出すと同時に、全てを打ち消す作用も持っている。

人の有する『気』も、やはり無属性である。従ってやり方さえ知っていれば、四大魔法

を難なく打ち消せる。その場合『気』が大きければ相殺力もより大きくなり、必然的に普通人より気力??魔力の大きい魔術師のほうが、魔法耐性が強くなる。

チカゲは、魔法の攻撃に耐えて耐える覚悟をした。

それでなくては、もうこのエルウィードを倒すのは不可能だ。

「……我が魔力の流れ、奔流となれ。しかして、大地の力、陽の力、月の力、風の力を全て取り込み……」

呪文が始まると同時に、結界の中の大気がぐにやりと歪んだような感覚が起こる。

究極呪文は、通常の火地風水の四大魔法の延長上にある魔法だった。

四つの要素の先にあるもの、それは天の星々が有するという、高次の『気』である。

それを地上で作りに出すには、四つの要素を寄り合わせる必要があるが、そもそも属性の違う要素同士は反発するため、統合するには膨大な魔力が必要になる。

星々はその強大な力で、四つの要素を無理矢理融合していると、魔術では考えられてい

る。どんなに強大な魔力を誇る魔術師でも、星の力に匹敵する魔力など、到底持ち得ない。

そこで、呪文の前半では、術者の肉体ではなく、別な『場』を術者の周囲に新たに作

り、その『場』に術者の周囲の気、無属性の自然の気を、一時的に出来得る限り取り込む。

そのため、大気にも歪みが生じるのだ。

周りの気配の歪みは、人に言い知れぬ不安を抱かせる。

魔力を持たないカナメやハーシェル達にも大いに不安感を抱かせる程、チカゲの『気』

の取り込みようは凄まじかった。

まして、今はチカゲ以上に魔力を有するエルウィードは、周囲の気の極度の歪みに、心

底恐怖を感じたのだろう、両眼をかつ、と見開き、鬼の形相でチカゲを睨み付ける。

小馬鹿にした小娘が、本当に究極呪文を発動しそうだと察した魔術師は、早急に呪文を

阻止しようと、火球を数十個、チカゲに向けて繰り出した。

気が付いたが、ぶつけられるのは元より覚悟している。自分の魔力の大きさならば大丈

夫、とチカゲは胸中で自分に言い聞かせ目を閉じる。

火の熱が間近に迫る。その時、誰かが自分の前に立ちはだかる気配がした。

チカゲは、驚いて目を開けた。

「トシヤ兄っ！」

トシヤが、何と数十個の火球を両手に抱え、止めている。一瞬で焼失してもおかしくない

行為なのに大丈夫なのは、恐らくテオドールの魂が『神気』を使つてトシヤを助けているせいだろう。

思わず詠唱を止め叫んだチカゲを、トシヤはもの凄いい形相で睨み付けてきた。

「バカ野郎っ！　ここで止めてどーするよっ！　さっさと続きを唱えろっ！」

チカゲは、思わず涙ぐみながら、うん、と頷いた。

「……大気を、空を、世界を揺るがせ。その鳴動は天に上り……」
エルウィードが再び魔法を繰り出す。今度は氷の魔法を数十個、チカゲへと走らせる。

巨大な氷の塊たちを、今度はマリが押さえた。

カレリアの『神気』が熱を生み、氷塊と反応して、マリの身体の正面からもうもうたる蒸気が上がる。

二人は、それぞれの宝具を結界石として己の場所に置いて来ている。そのため、魔法を打ち返すことが出来ないのだ。

またも声を上げそうになるのを、チカゲはぐっと堪える。

三度、エルウィードが魔法を発動した。

虎鐵を素早く大地に突き刺したハーシェルが、チカゲの右前へ飛び出す。地を這い突進

して来た十数個の雷球を、少年はやはり素手で止めた。

「くおっ！」

腕の中で炸裂する激しい稲妻に、ハーシエルは必死で耐える。

仲間の想いに、チカゲは思わず目頭が熱くなった。

「?? 遠く夜空の星々の力を目覚めさせる。とこしえに輝く星はその光を増し??」

本当は、すぐにも彼等を助けたい。その気持ちを押し込め、呪文の詠唱を続ける。

五つに別れた究極呪文の最後の部分は、チナミの魂に刻まれているため、チカゲは覚え

ることが出来なかった。しかし、呪文の流れから、彼女はおおよその傾向を掴んでいた。

「?? 星々は共鳴し、その力、天に満ち溢れる??」

呪文が終盤になるにつれ、チカゲの魔力が光となって、彼女の身体から溢れ始める。白

く輝くチカゲの魔力は、下から上へと流れ、赤金の長い髪を大きく両側へと広げる。

三つの魔法を止められ焦るエルウィードは、チカゲを攻撃するよりもまず結界を壊そうと、

チカゲの杖へ向けて雷撃を放った。

予測していたカナメは素早く動き、鋼の小剣をすぐ側に突き立てて雷撃をそこへ導く。

「ちっきしょう……っ！ てめーばかりっ、楽しやがってっ！」

上手く逃れたカナメに、トシヤが苦しい中から文句を言った。

「しょうがないだろう？ トシヤとは勘の冴えが違うんだから」

「んーだとおっ?! こんのやろーっ！」

ストレートな揶揄に、トシヤは怒って火球を押し返した。と、あろうことか、数十個が

ひとつとなって巨大化していた火球が、エルウィードの方へと押し返された。

逆戻りして来たファイヤー・ボールを、魔術師は驚きながらも簡単に消去する。

それを見ていたハーシエルが、負けじと雷球を押し返した。

「んーっなるっ！」

こちらも一度は逆戻りし掛けたが、押し返せずにまた戻る。

「ちーっくしょうっ！ 行かねえっ！ トシヤっ、なんちゅー、バカ力っ！」

「へへん、おまえとは怒り方の年季が違うんだよっ！」

「アホっ……、かっ！」

二人が漫才をしている間に、エルウィードがまたも魔法を発動する。押さえようの無い

ウォーター・ボールの出現に、トシヤとカナメは焦る。

それでも止めようと二人が同時に腕を伸べた時。

チカゲの呪文が完成した。

26. 長き悲しみの終わり

「??? 夜空より降り注ぎし共鳴せし星の力、我を通じて破壊の源となれ。スターライト・ウェーブっ!」

途端。

チカゲの、胸の前で向かい合わされた掌の間に、無数の強烈な白い光の点を含んだ、黒い球が現れた。無数の光点はよく見ると、ひとつひとつがまるで夜空の星のようにはつきりと輝いている。

両手の間で静止しているその球を、チカゲはエルウィードに向けて投げた。球はうねりながら長く大きく伸び、それにつれて中の様子がはっきりとする。

黒い波は、紛れも無く、宇宙だった。無数の光点は波状になった黒球の中で間延びし、

やがてひとつひとつが星雲となる。

波状の夜空の中に、無数の星が、星の雲が、輝いている。

『神気』に次いで高次の気力である『光気』を纏う星々の雲を内包した黒い波は、膨大な力の塊として突進する。

エルウィードは、迫り来る力の波を止めようと、幾つもの魔法を同時に放つ。

しかし膨張しながら全てを飲み込む波は、圧倒的なエネルギーで、エルウィードが放った全ての魔法を飲み込んだ。

「う……っ、わあああああっ!」

解呪も、魔法防御も、何も効かない。最後は結界一杯に波及し、エルウィードの身体も、

魔力も魂も、何も彼もその波頭に飲み込み、爆発した。

それは、原始の高エネルギーの球が爆発し今日の世界を構成し始めた時にも匹敵するよ

うな、物凄い力の拡散であった。

結界内に居たチカゲ達も、究極呪文の爆発のエネルギーに吹き飛ばされ、突き倒された。

五芒星を象っていた彼等の宝具も皆、粉々に碎け、波は結界の外にも影響を与えた。

遠巻きで見守っていた魔術師長達も、爆風に煽られ地面に叩き付けられた。

しかし、強固な神々の魂の結界は、この凄まじい魔力をそれ以上外には伝えなかった。

宝具によって力の大半を押さえられた究極呪文は、人々を多少傷付けた後、『光の塔』

第一の塔にぶつかり、大きな亀裂を入れ、更に周囲の数本の大木を薙ぎ倒し、消えた。

気が付いた時、チカゲは地面に転がっていた。

目の前には、満天の星が、広がっている。

「あ……あれ？」

一瞬、チカゲは自分がまだ究極呪文で出来たあの波の中に居るのかと、錯覚する。

だが、そよぐ夏の風に頬を撫でられ、ここが現実の世界で、全て終わったのだと気付き、
漸くほっと息をついた。

起き上がったチカゲは、何気なく自分の掌を見詰める。どうやらあんな凄まじい魔力が出せるのかと思う程小さな掌は、星明かりの下、薄ぼんやりと白い。

あの時。黒い夜空の波が爆発する寸前。

チカゲはチナミが、両腕を広げ自分の前に立ちはだかるのを見た。チナミは『神力』を使い、チカゲをスターライト・ウェーブの爆風から守った。

一度は決裂した筈の神が、突如現れた事実には呆然としたチカゲを振り向き、チナミは微笑んだ。

『迷惑掛けたね、ごめん』

依代としてチナミを降臨させていた時と同様、彼の声は頭に直接響いて来た。

『長い間、悩んだ。僕がしたことは本当によかったのだろうか。でも、チカゲと出会

って、僕は全く覚悟が出来ていなかったんだ、と気が付いた。エルウィードを含めてみんな助けようなんて、虫が良すぎたんだ。……過去を切り捨てる事が出来ない僕に、こう

して踏ん切りを付けさせてくれたのは、チカゲだ。本当に、ありがとう』

どう答えてよいのか分からず、チカゲは黙っていた。チナミは、分かっているというように、頷いた。

『もう僕は行くけれど、チカゲ、仲間を大切に。そして、これから先の世界をよろしく』

チナミは、広げていた両手を下ろした。

ゆっくりと、押し寄せる究極呪文の強大な波動の中に進み出すチナミを、チカゲは何とか引き止めようと口を開く。しかし、それは終に声にはならなかった。

数歩歩いたチナミの隣に、長身の人影が寄り添った。それがユキナガであると分かるの

に、それ程時間はいらなかった。続いてテオドールとツバサが、そしてカレリアが、チナミの横へ並ぶ。

初めて見た他の四人の神々は、チカゲの予想していた通り、皆、凜とした美しさを持った若者だった。

彼等は、戸惑うチカゲに淡く笑い掛けると、究極呪文の力の中心、エルウィードの居る所へと進んで行った。

チカゲは、彼等を止めようと手を伸ばした。

だが、途中で思い止どまった。

これで、彼等はやっと安らげるのだ。

二千年もの長きに渡り、苦しみ、悩み続けたチナミの悲しい物語は、今、漸く終わる。

強大な力の中へと消えて行く彼等の後ろ姿を見送りながら、チカゲはただ静かに涙を流した??

ふと、苦しげな声が聞こえて、チカゲは意識を現実へと戻した。目を上げると、三メートル程離れた左側で、カナメがもそりと起き上がった。

「兄上」

星明かりにぼんやりと見える兄に声を掛けると、カナメは地面に座ったまま頭をこちらへ向ける。

「……行っ たな」

その言葉で、チカゲは兄も同じ光景を見ていたのを知った。

「うん……」頷いたチカゲに、カナメはふうっ、と息を吐いた。

と、その向こう側でトシヤがむくりと起き上がった。

「よお、終わったな」

低い声に、カナメとチカゲは頷く。

更に反対側で、マリとハーシエルも上体を起こした。

「五人共、行っちゃったね」

「エルウィードも、これで二度と復活しないでしよう」

チカゲは、ふと頭上を見上げた。

「きれいな星」

彼女の眩きに、マリも、カナメも面を上へ向ける。

チナミ達の行った魂の世界は、この満天の夜空の彼方ではないのかもしれない。

だが、もう二度と苦しみも悲しみも無い場所であることを、チカゲは心から願った。

27. やっぱりノーコン・プリンセス

究極呪文などという桁外れな魔法を使ったチカゲは、さすがに疲れが出て、戦いの翌日は終日、自室で過ごした。

一日ごろごろと寝て過ごし、すっかり体調が戻った翌日、王女は通常通り朝食を採りに、お守役と共に食堂へと向かった。

「お、もういいのか？」

廊下の角を曲がった時、貴賓室の方からやって来たハーシエルとはち合わせる。見ると、

少年は旅支度を整えていた。

「あ……、もう、帰るの？」

「ん？ ああ。エルウィードの一件も片付いたし、何時までもアケノに世話になってる訳に行かないだろ？」

くしゃりと笑った少年に、チカゲは何故か、少しだけ寂しさを覚える。

「もう少しだけ、いれば？」

「あ？」

「だって、せっかく来たんだから、もう少し、アケノの国情とか、勉強してみればいいじゃない？」

「……あー」

ハーシエルは、困ったように頭を掻いた。
が、次に悪戯小僧の顔でにやり、と笑う。

「それって、俺に居て欲しいから言ってるんだろ？」

「？ うん」

「俺が、好きってこと？」

「……え？」瞬間意味が飲み込めず、チカゲはきよんとする。彼女の薄緑の大きな目を、

ヒノワの王太子は真面目な顔で覗き込んだ。

「俺と、結婚する？」

その時になって、チカゲは漸く自分がプロポーズされたのだと気が付いた。

音がしそうな勢いで、一挙に顔に血が上る。

「どっ、どどどっ……！」

完全に頭の中がパニックになり、酸素不足の魚のように口をぱくつかせるチカゲの隣で、

マリがこほん、と咳払いをした。

「ハーシエル殿下、申し訳ございませんが、姫様はその手のご冗談には不慣れなお方でございまして……」

「えー、冗談じゃないって」

心外だなあ、と、ヒノワの王太子が声を上げた時。大階段の方からトシヤとカナメがやって来た。

「よーっ、もう帰っちゃうのかぁ？」

トシヤが、呑気に手を上げる。

「おうっ、で、今、チカゲに結婚申し込んだとこっ！」

「なにいつ？」

驚いた二人が、全速力で走って来る。

「本気かよっ?!」

トシヤが、顔がくっつきそうな勢いでハーシエルに訊いた。

「マジマジ」ハーシエルは喜々として頷く。

「わっ、私は……」

飛んでもない事態に慌てふためきながら、それでも何とか否定しようとしたチカゲの言葉、カナメが遮った。

「そうか……。ヒノワと言えば西の大国、悪い縁談ではないな」

「うおおっ！ どーすんだよこんな跳ねっ返りっ！ 王女らしいこと、なんも出来ねーぞ

こいつわっ！」

「アケノの王女として、釣り合う相手を考えれば、一考すべき話だな」

「あ、別にいいぜ、なんもできなくても。ただ、モノぶっ壊すノーコン魔力の制御だけ何とかしてくれば」

「少しお待ち下さいっ、殿下方。姫様のお相手でしたら、他にも候補の方が……」

「ちっ、ちよっと……」

勝手に決めないで、とチカゲは皆を止めようとする。

しかし、兄も従兄も、更にはお守役も、誰も彼女の意見を聞こうとしない。

王子や王女が廊下のひと隅に固まって、何の騒ぎかと、近衛兵や侍従達が遠巻きに集まり出す。

「大体っ！」

トシヤが怒鳴った。

「こいつは魔術師だぞっ？ おまけに魔法使う以外能が無いくせに、その魔法がまるっき

りの外れと来てるんだぞっ！ そんなんヨメにしてどーすんだっ！」

「だーからっ、それは何とか努力して貰って」

「努力して直るんだったら、だっれも今まで苦労しねえってのっ！」
「だーっもうっ！」

ついにキれて、チカゲは声を張り上げた。

「さっきから聞いてれば人のコト無視してみんなして勝手な話してっ！ 私ほっ、まだ結

婚なんてっ、しませんっ！」

金切り声に近い高音で叫ぶ王女に、遠巻きのやじ馬家臣団が、おっ、と、どよめく。

「ざーんねんっ」

ハーシエルが、おどけた仕草で肩を竦めた。

「どさくさ紛れに「うん」って言うてくれれば、強大な魔力の魔術師を一人、ヒノワにスカウト出来たのになあ」

チカゲは、目が点になった。

何のことは無い、ハーシエルは自分の魔力だけが目当てだったのだ。

好きとか嫌いとかの問題ではなく、ただ魔力だけが。

なのに、勘違いして真っ赤になった自分が、情けないし恥ずかしい。

それにもまして、仮にも乙女心を踏み躪った少年の発言は、絶対許せない。

キれる以上に頭に来た。

「……あのなあっ」

童顔を憤怒の形相に変えたチカゲに気が付いたヒノワの王太子は、ひえっ、と奇妙な声を発し、飛び上がった。

「結局なんじゃいっ。私はただの魔力兵器かいっ！」

「いっ、いや、そーいう意味じゃなくて」

「じゃあ、何の意味なのよっ！」

魔力の放出で髪が宙に浮き始めたチカゲの様子を見て、トシヤマでが焦って執り成しに入る。

「だからよっ、今の話は冗談で……」

「冗談で済むと思ってんのっ！ 散々人の乙女心をコケにしてっ！」
悪かった、と謝りながら逃げる二人に向けて、チカゲは魔法を放つ。

「ファイヤー・ボールっ！」

「いけません姫様っ！　ここは王宮の中??」

諫めるマリの声が終わらぬうちに、チカゲの魔法が炸裂する。

火球は二人の背中を掠め、回廊の天井に当たる。

コントロールが出来ていればシャンデリアのひとつを破壊するくらいのは筈だった。が、

ノーコンは全く治っていなかった。

勢い良く飛んで行った火球は、シャンデリアどころか直径一メートル程もの大穴を、天井に空ける。

「うっわっ！」

「きゃああっ！」

魔法を発動した側もぶつけられそうになった側も、恐怖に叫ぶ。

見物していたやじ馬家

臣も、大破に揺れる建物から降って来る埃や建材のかげらに、慌てて逃げ出した。

ばらばら落ちて来る壁の破片を避けながら、カナメは至極真面目な顔で言った。

「やはり、チナミが降臨している時だけだったな、あの絶妙なコントロールは」

「もーやだあっ！」

またまたやってしまった大失敗に、チカゲは頭を抱えてしゃがみ込む。

「大丈夫だよチカゲ。アケノの国庫は豊かだ。おまえが何とかコントロールを覚えるまで、

幾ら王宮を壊してもなんとかなるだろう」

ははは、と空々しく笑う兄に、チカゲは「バカあ」と涙声で返した。

プリンセス・オブ・クラッシャー　完

27. やっぱりノーコン・プリンセス（後書き）

終わりました・・・

ここまで読んで頂いた方々に、ただただ感謝致しますm（　　）m

チカゲ達の物語は、一旦これで終わりですが、また機会がありましたら、第二弾なども、書いてみたいと密かに思っております。

（いつになるかは分かりませんが……）

とりあえず、今回はこれにて終了とさせて頂きます。

ほんとうに、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5160u/>

プリンセス・オブ・クラッシャー

2011年7月29日22時44分発行